

# 奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

新年増大号

画集新装教育こんな愛し方

アルバイン表情とアップセレクション



1961

KITAN CLUB

1

定価 百五十円



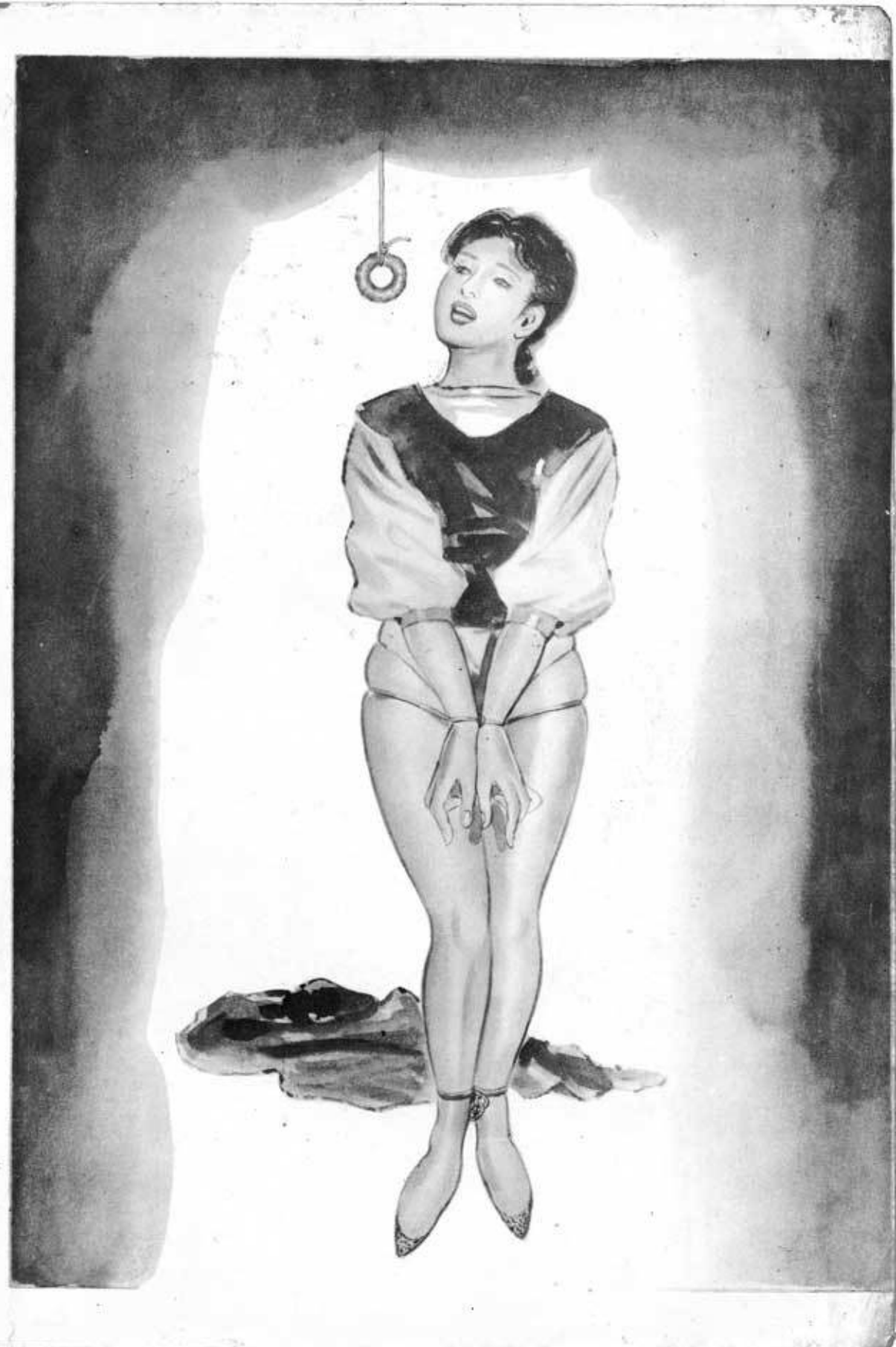
THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

IBM 2805







限定特別号の第三弾！

緊縛写真グラフィック集

特価 五百円

◎総グラビヤの豪華な内容と絢爛

- (二十五枚)

(八十四葉)

女の 三醜女の逆恨み 遠慮はいらねえぜ  
女体の 荷物 トランク詰の裸女  
吊し責めの美女 浴場の悦虐  
鞭の 御馳走 淫虐な美容師  
狂気の 復讐 ヤキを入れてやる  
電気責テスト 集(八十四葉)  
女の 歎び 八態 さあどうでもして  
陳列された女体 忘れぬ豊満美  
黒蛇地獄 女のふんどし  
女のサポーター 吊り人形の哀歎  
断然これは凄い 囚人第十四号罷り通る

◎総グラビヤの豪華な内容と絢爛たるモデル陣――

たるモデル陣

恍惚境：絹川文代  
いためられた乳房

……桜井葉子

耐えられる：桜井葉子

月経帯の強制……大塚

手吊りと逆手吊り五態

……大塚啓子

捕われの麗人……絹川

湯責二態……大塚啓子

何をしようって言うの

……桜井葉子

新人媚態集：桜井葉子

いじめぬく……絹川文代

メンズバンドの猿轡……

……絹川文代

親念横臥……絹川文代

変型手足しびり：愛川

後手首腰繩……大塚啓子

隅から隅まで……愛川

鏡面万華模様（裏と表）

百十五ポーズ



巻頭色刷口絵	蛇倉の恐怖	四馬孝・画
色刷折込口絵	より美しきもの	四馬孝・画
裏紙	「編あと」	第二表紙
目次裏	「風流いろは草紙」	佐保忍作・滝れい子画

新妻教育——こんな愛し方——第一口絵——  
編を持って……初めて……御食事です……二人だけだから  
御風呂へ……赤ちゃんのように……シャワー……休息

第二口絵  
チャイミングな女(サジスチック・ムード) EXOTIQUE No.6ヨリ  
サド・マゾ絵画館——猥奇館の歓迎パーティ——  
拷問台上の苦悶、恐怖の予告、奴隷宣言  
マゾヒスチック・フォト  
レスリング・ブレイ (逆手どり)  
レズリングな女(マンヒスチック・ムード) EXOTIQUE No.6ヨリ  
チャイミングな女(マンヒスチック・ムード) EXOTIQUE No.6ヨリ

表情とアップ・セレクション 横成・富士見司郎  
或る争いから  
からむもの  
引立てられて  
素肌を

石の冷たさに	モデル	大塚啓子
水と影	モデル	大塚啓子
許されずに	モデル	大塚啓子
白い炎	モデル	大塚啓子
ぐるぐるに	モデル	大塚啓子
非情の紐	モデル	大塚啓子
どうして こんな	モデル	大塚啓子
これが飾り	モデル	大塚啓子
ふるえるもの	モデル	大塚啓子
レンズの前に	モデル	大塚啓子
少し休ませて	モデル	大塚啓子
静かな時	モデル	大塚啓子
囚衣を着て	モデル	大塚啓子
風にもなぶられて	モデル	大塚啓子
肌にもふれるもの	モデル	大塚啓子
或る午后に	新人	前本妙子
小さな事から	モデル	四方清美
香りある息吹	モデル	四方清美
一方的	モデル	四方清美

新アブ街散歩……市川国彦 66

「へんたい」という言葉について  
晴雨両稿 新華双紙・地獄宿……伊藤晴雨 76  
体験記 誘導への過程……山野香澄 80

誘拐された美少女の詩  
海原にありて歌える  
慈賞(告白と手記と体験)入選  
奇妙な作業……菅谷はるみ 89

告白……お笑と私……島 俊太郎 90  
ある無惨面絵師の生涯……保田 徹 99

或る女のカルテ  
「火あぶり女房」……緑 猛比古 100  
告白 輝に憑かれた男……藤山秀緒 110  
松井頼子悦慮小説シリーズ  
妖(ようか) 花……愛知輝一 114  
妖(ようか) 花……滝れい子・画 116

あの香りは私を魅了する  
——愛好者の記録——  
ファンタジア・マゾヒスティカ……とやま・かづみ 126

慈賞応募作品 柔肌地獄……山本節夫 128  
女相撲と女斗美……花巻京太郎 134  
「読者投稿」 奇くべからず集……雪崎京人 150  
新稿 ある夢想家の手帖から……林 寿夫 154

歌集 みだれ編……沼 正三 156  
連載小説 狩獵者(第二回)……無茶野歌子 162  
洗腸レポート 家政婦の日記……渡部かね 173  
連載第三次元小説 影の国……雪俊 遙 176

告白 アクロバット残酷記……水田真紀子 188  
連載小説 「宇宙のどこかで」……佐治麻造 196  
一悦慮者の回想 快楽……一ノ瀬悦子 214

麻生保氏の生活と意見……麻生 保 217  
奇譚三十九夜物語(第二夜)……辻村 隆 220

(感想) 「私はアブなのだろうか」……川崎進一 231  
感想文 奇譚クラブを読むと云うこと……牧野正夫 234

「真崎伸一氏よ自信を持て」……牧野正夫 234  
本誌最近号主要目次……250

読者通信……250  
編集あとがき……270





風流の草紙

佐保忍作  
淹心子画



き たま 朝



さし  
むかい

き

な手に  
きやしゃ  
むごい



ゆれ動く  
ロソクの  
火に

身を  
よじり



目隠しの  
あとではきつと東屋が



男力はみんな  
從之

馬に  
なし

升

み  
しせ  
め  
に(

消化器など











新妻  
教育  
こんな愛し方



四馬孝画



初めて  
「どうして、こんな事するの？」  
「うん、そりゃ君が好きだからさ」  
そういう彼の眼はやさしく、そして  
光りがあった。





御食事です

「さ、今度はこれをあげるよ、  
駄目だね、何んでも食べなきゃ、  
ほら、うんと口を開けて」





二人だけだから

「意地悪ッ、意地悪。知らない、知らないッ。  
あたし、泣いちゃうから……」





お風呂へ

「さあ、僕もすぐ入るから、先にゆっくり  
あたたまっているんだよ」  
彼はそう言って更にやさしく  
「いい子だからね」と笑った。







赤ちゃんのように  
「ハイ、お水だよ、もっともっと  
よく飲んで」  
そう言われて美しい妻は、ただ  
うろたえむせるだけであった。



シャワー

「もう少し辛抱しなさい。綺麗な  
君がより綺麗になるように、ね」  
それでも、つぶらな美しい瞳が軽  
くうらめしそうに……。





休 息  
匂う素肌に煙草の煙が  
静かに流れて、夜は物音一つ  
しなかった。





# 表情とアップセレクション

構成 富士見司部





或  
る  
争  
い  
か  
ら





か ら む も の





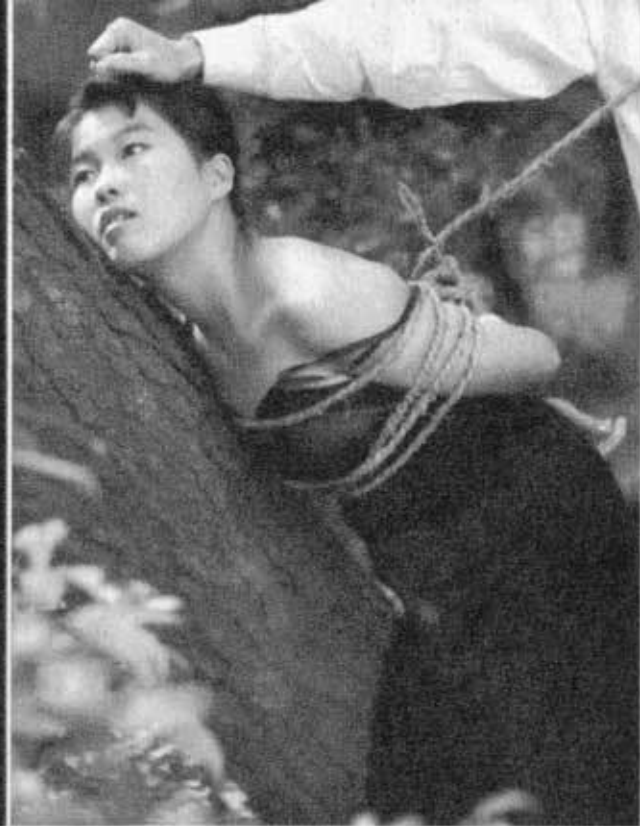
引立てられて







モデル 大塚啓子





素  
肌  
を





石の冷たさに

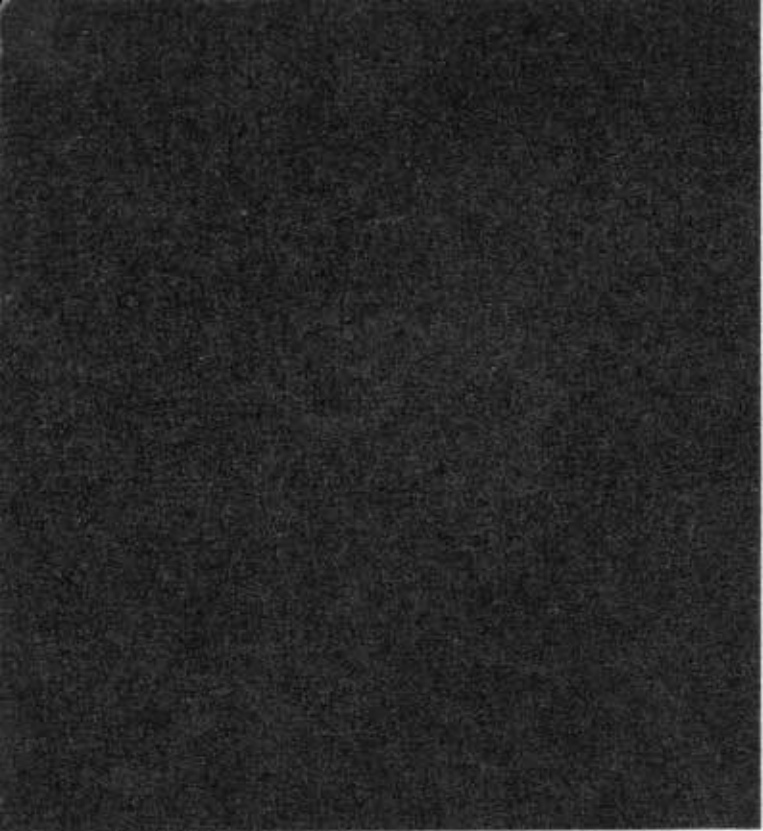




水 と 影









許されずに



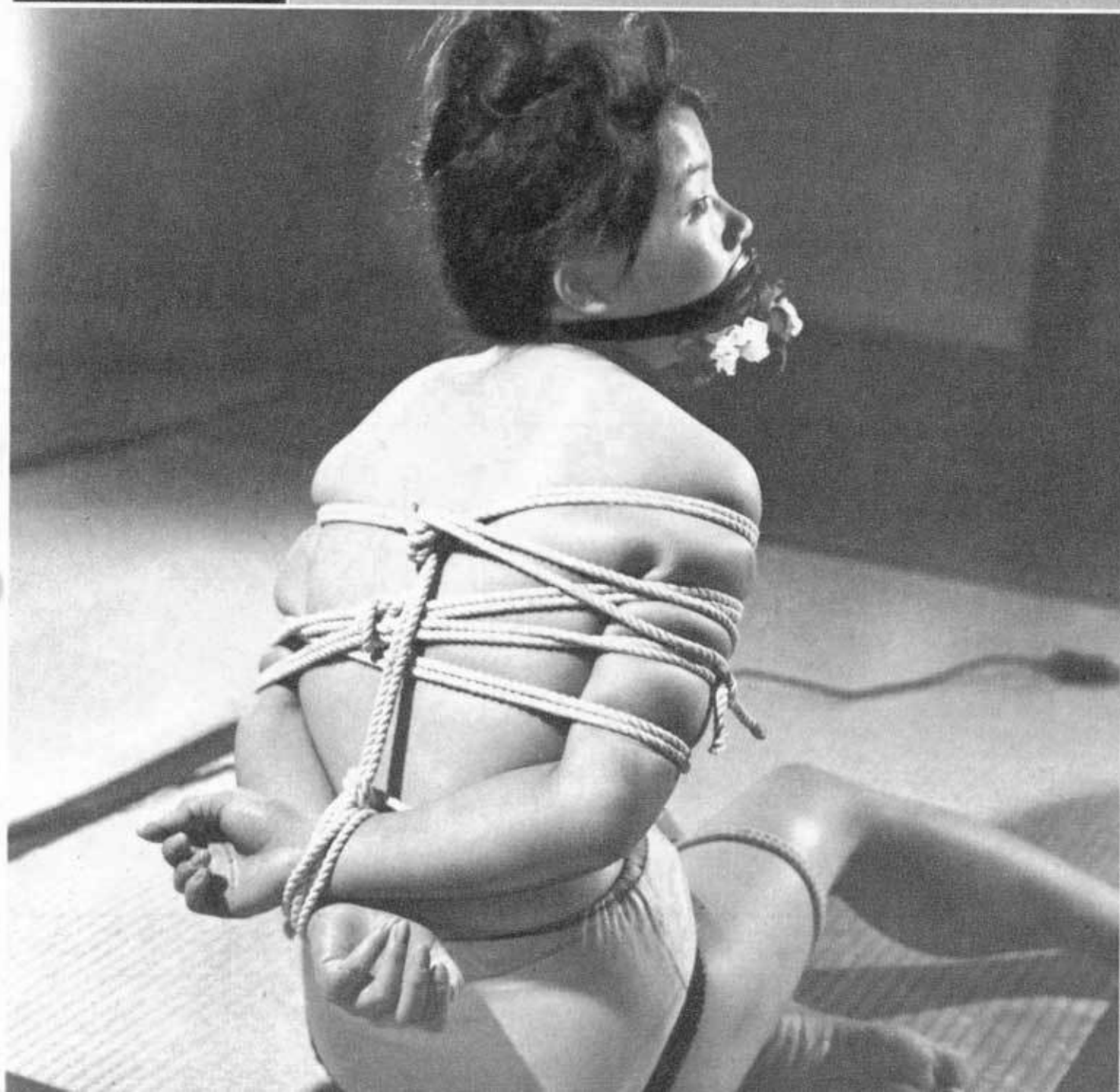


白　い　炎





ぐるぐるに



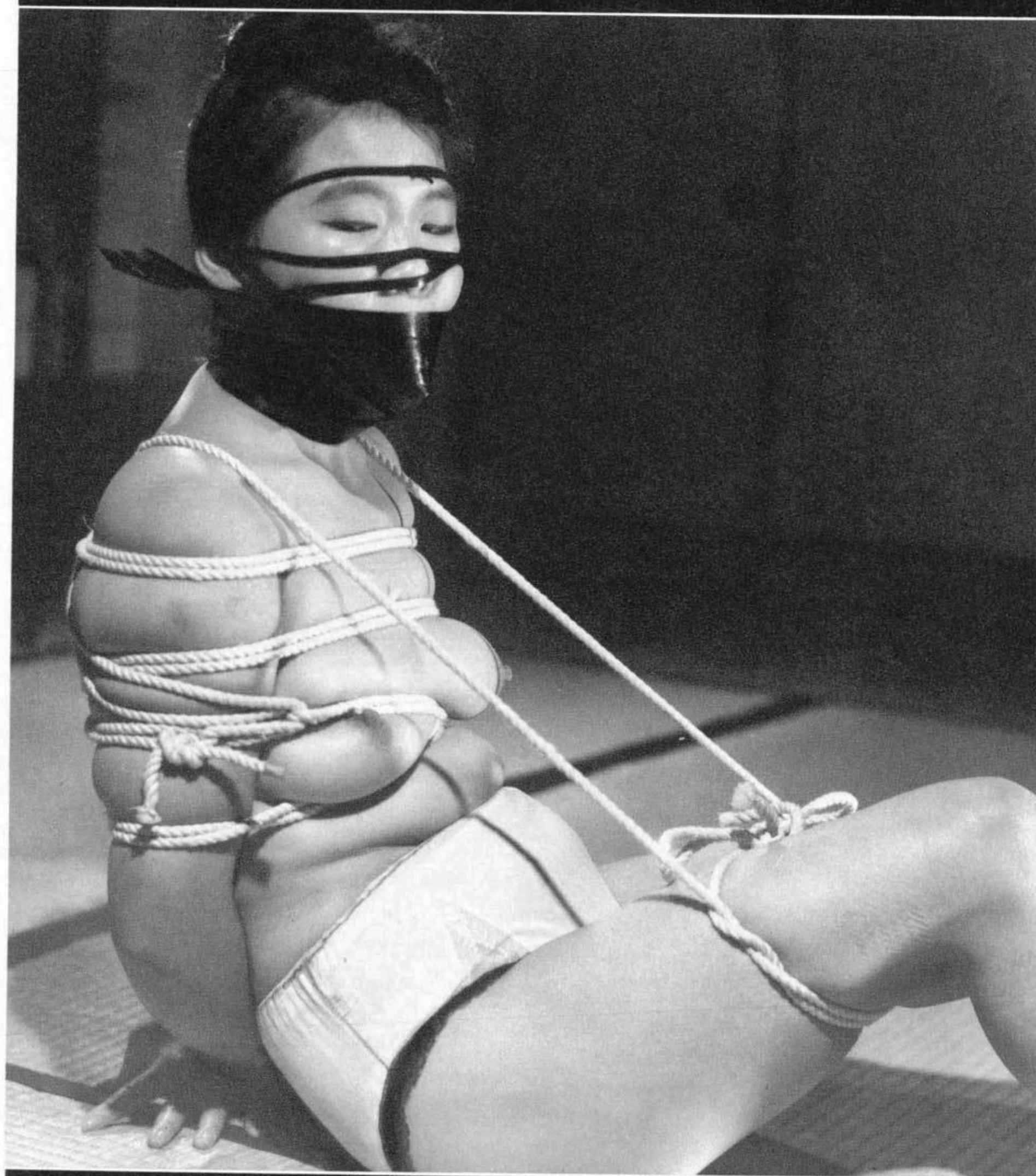


非  
情  
の  
紐





ど う し て こ ん な



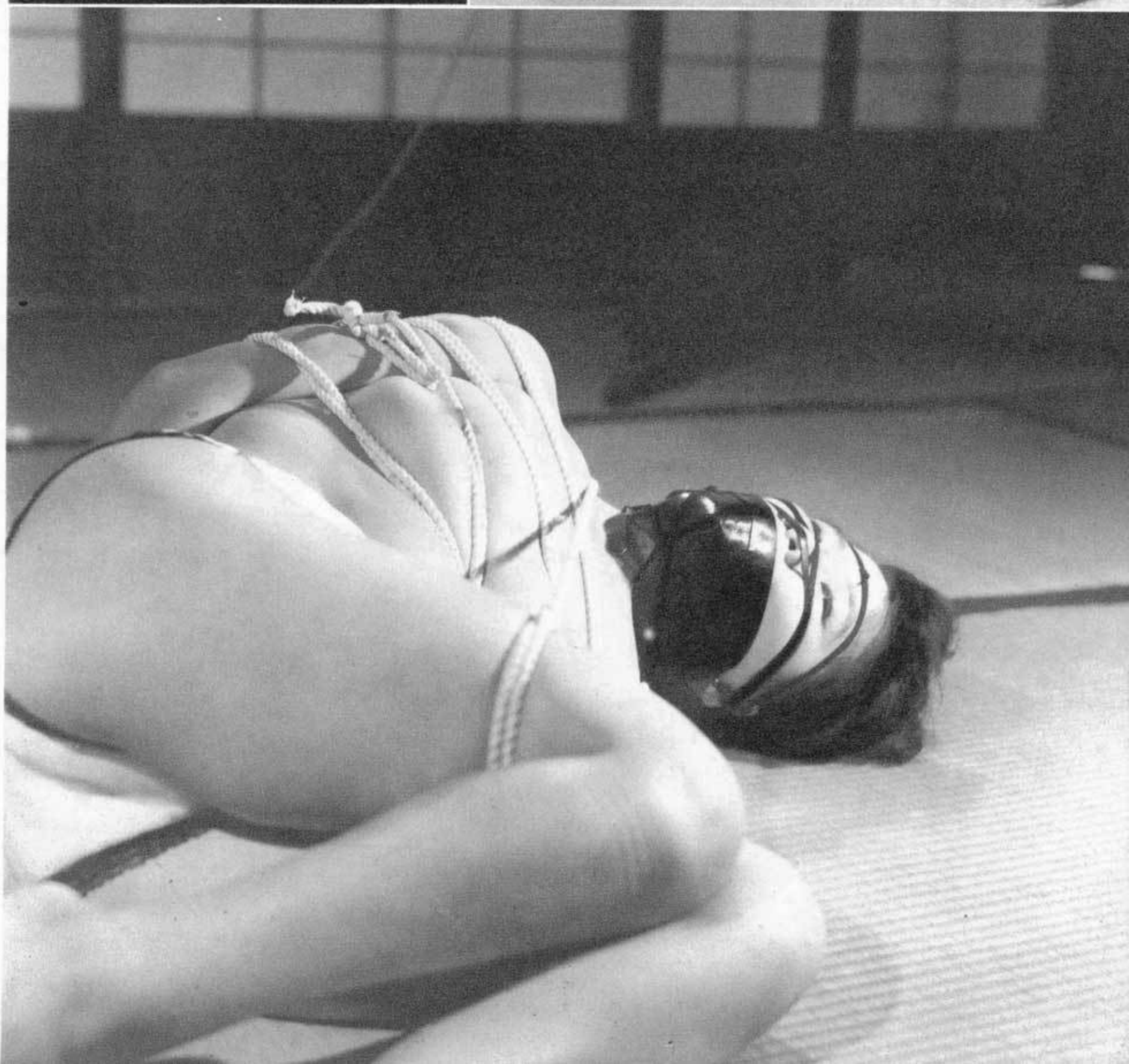








このまゝに





こ れ が 飾 り ？

モデル 絹 川 文 代





ふ  
る  
え  
る  
も  
の



モ  
デ  
ル  
絹  
川  
文  
代

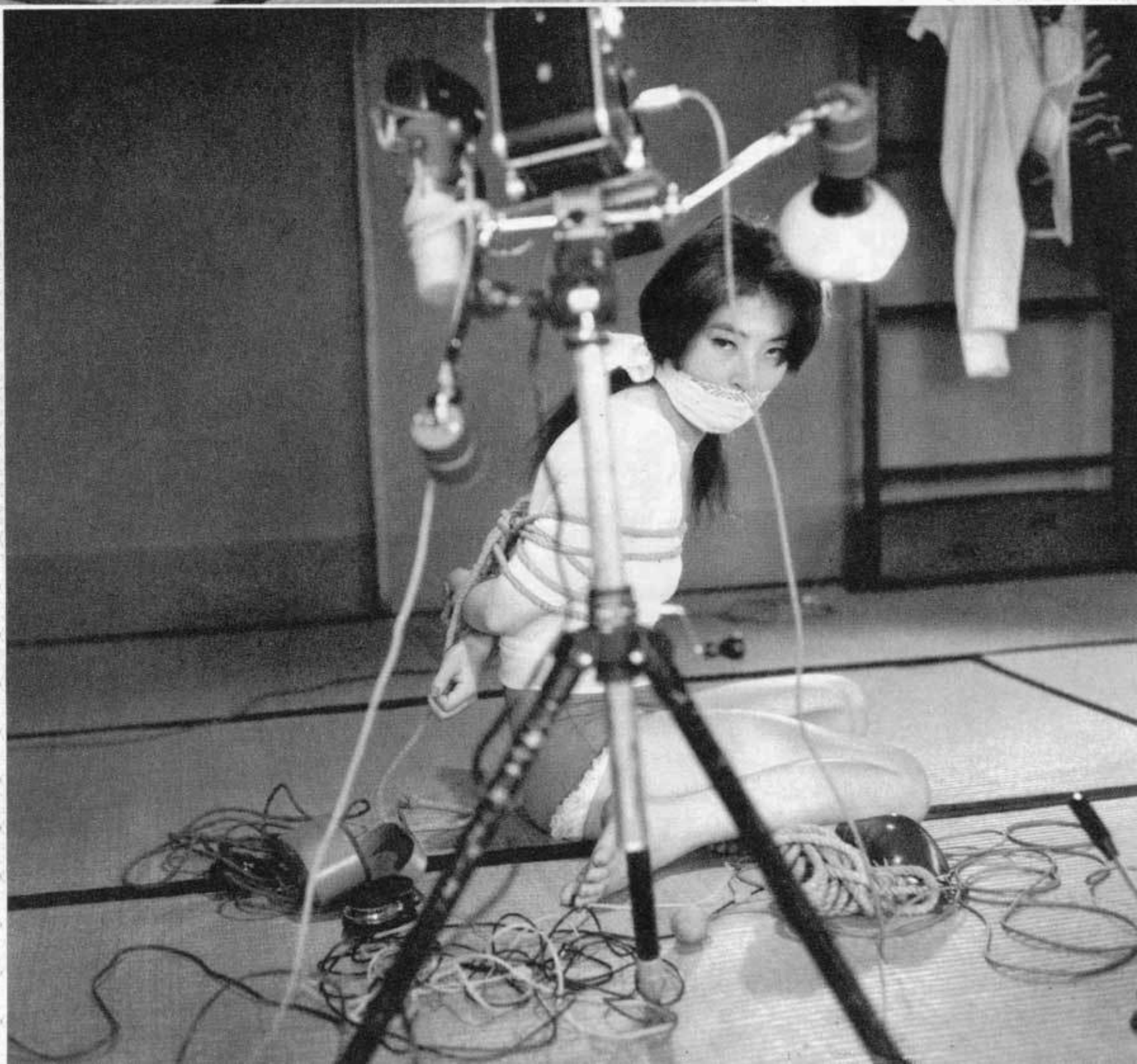




レ ン ズ の 前 に









少  
し  
休  
ま  
せ  
て





静かな時

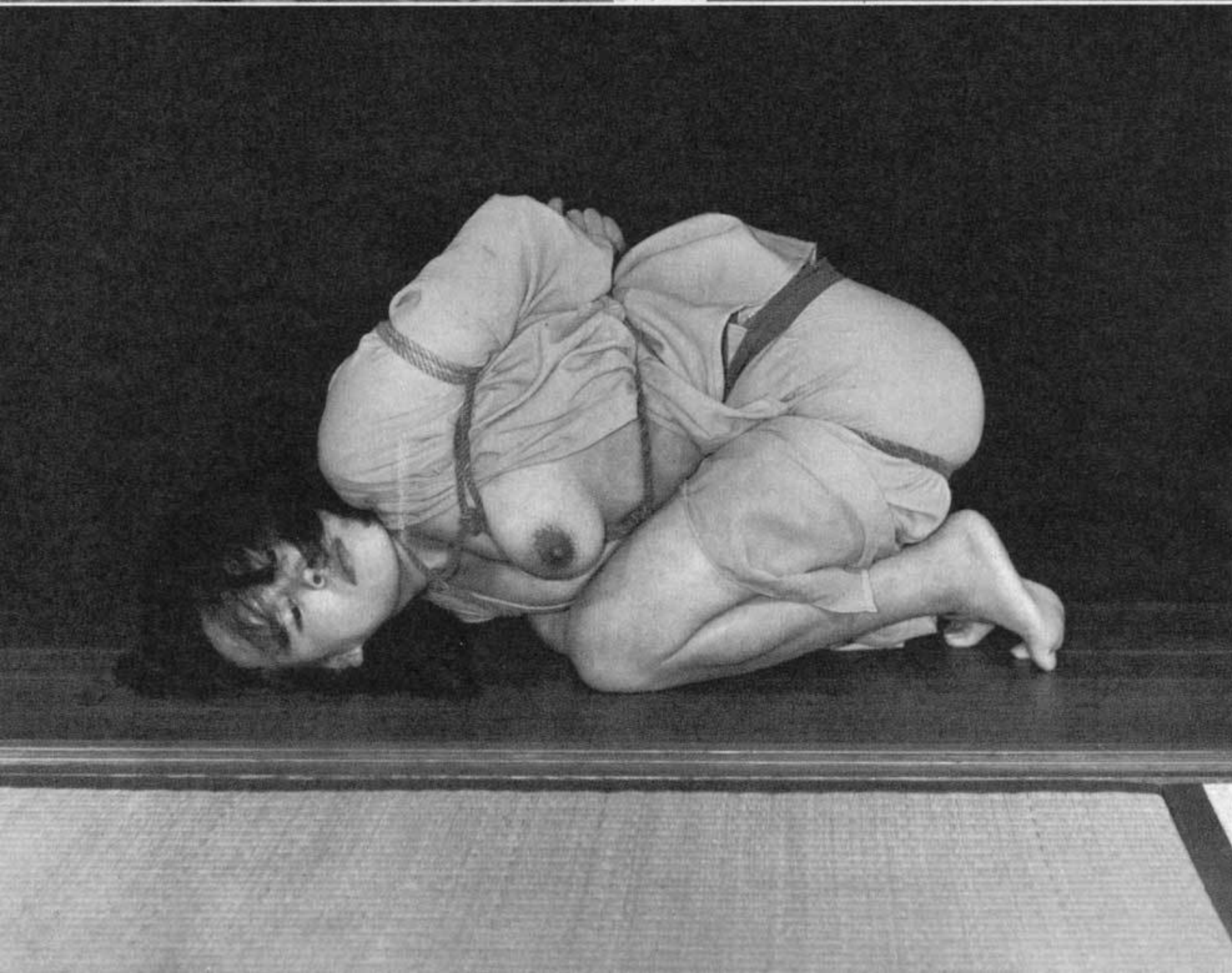
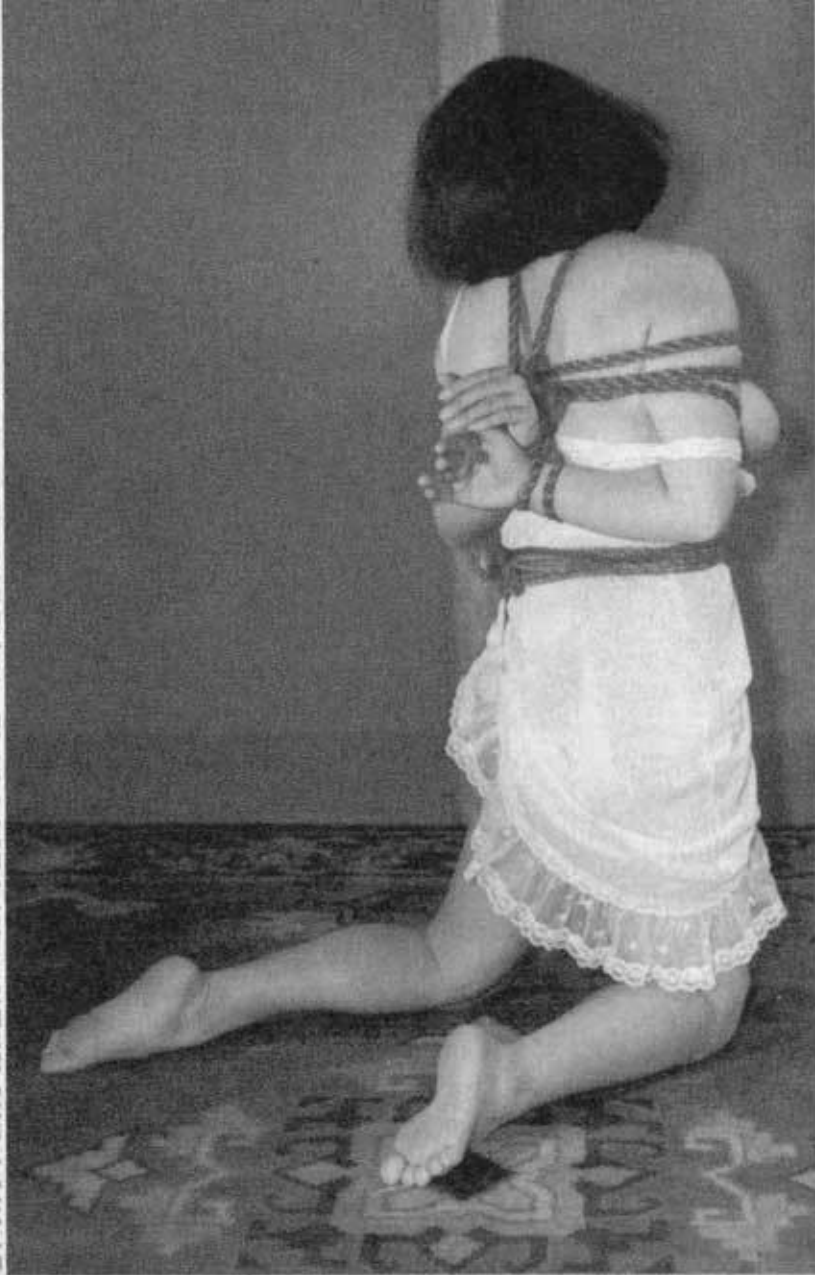
モデル 花本京子







モデル 桜井 葉子





風にもなぶられて





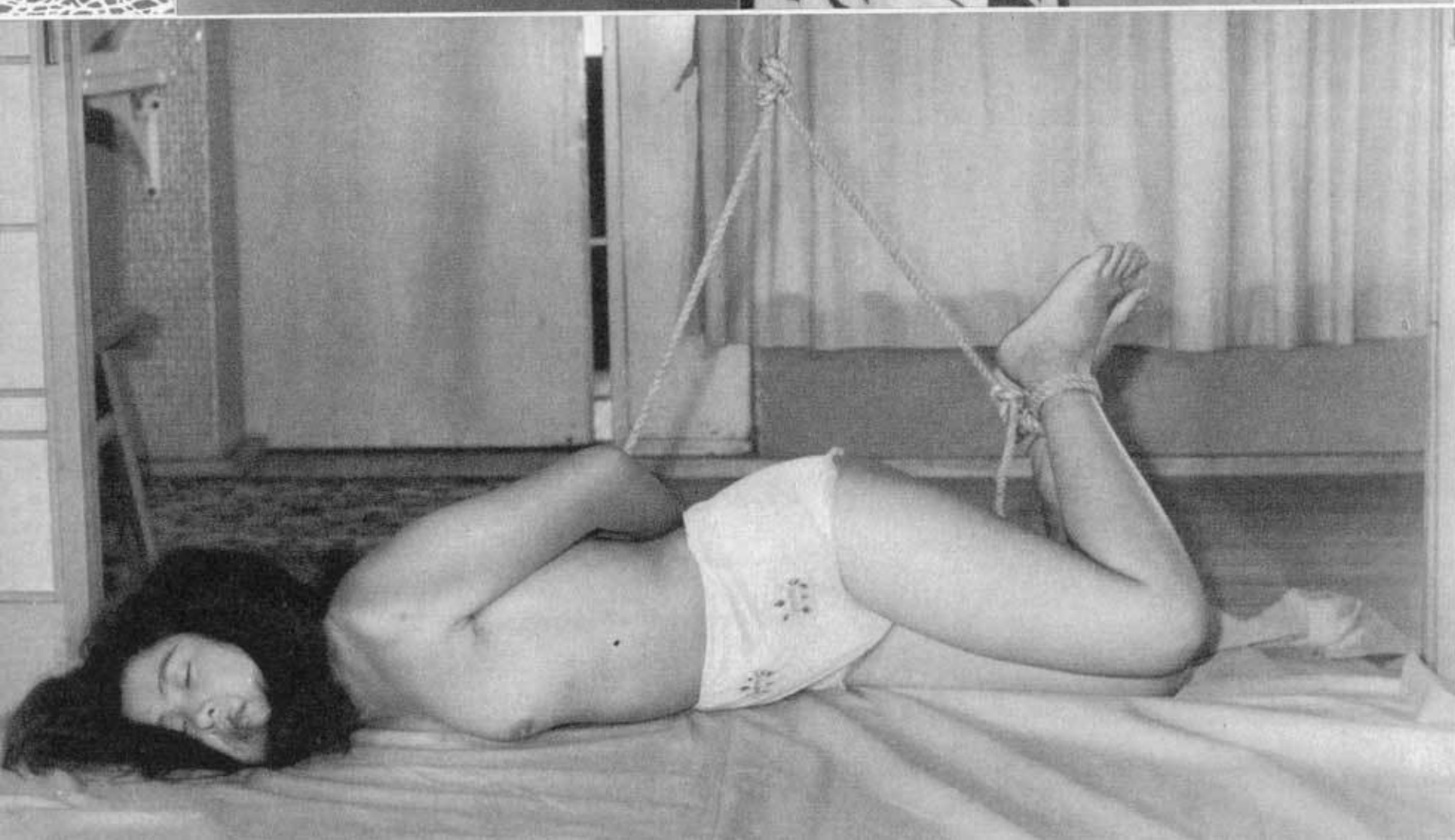
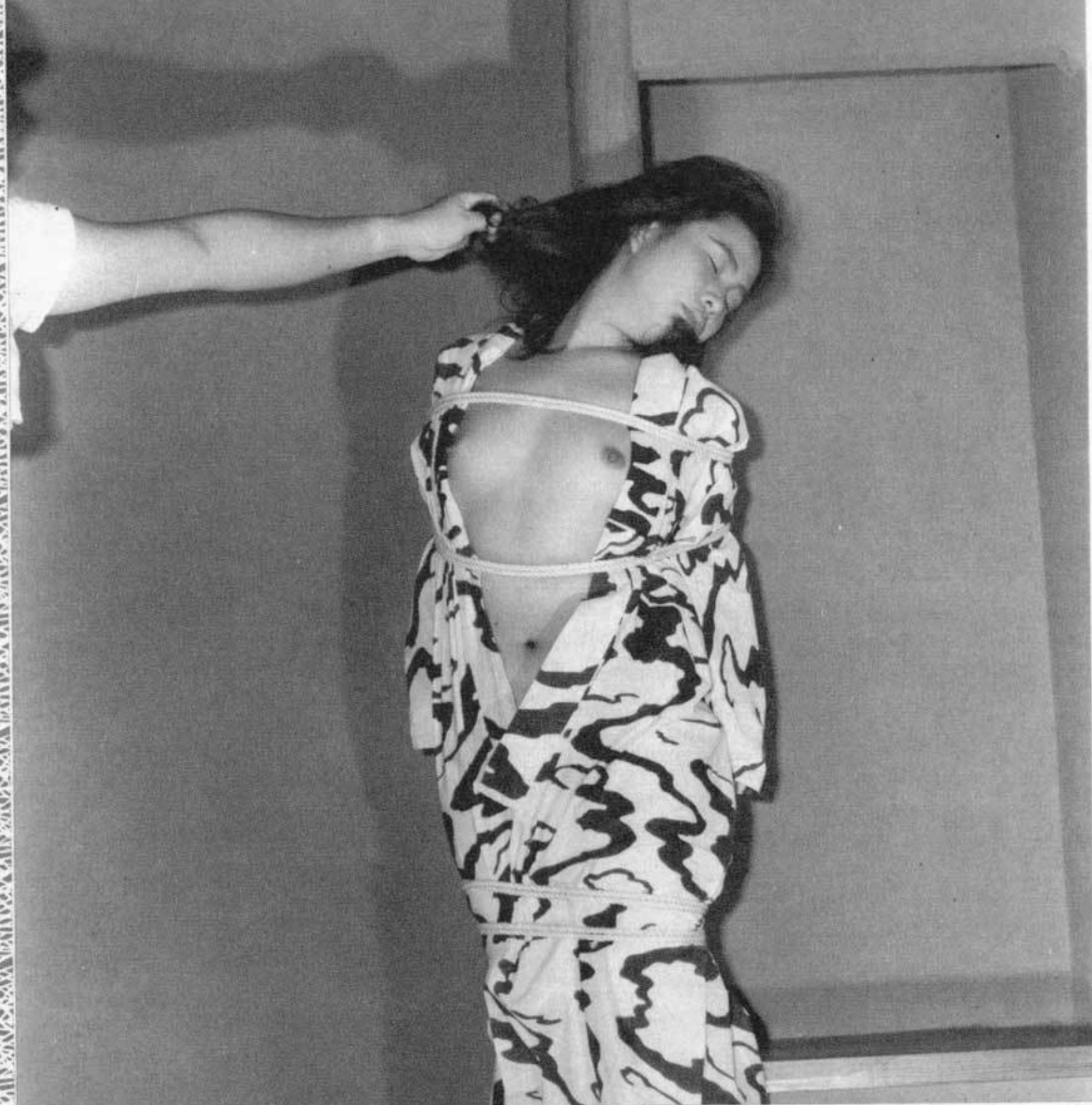




肌にふれるもの







或

る

午

后

に

新

人

モ

デ

ル

前

本

妙

子







小  
さ  
な  
事  
か  
ら

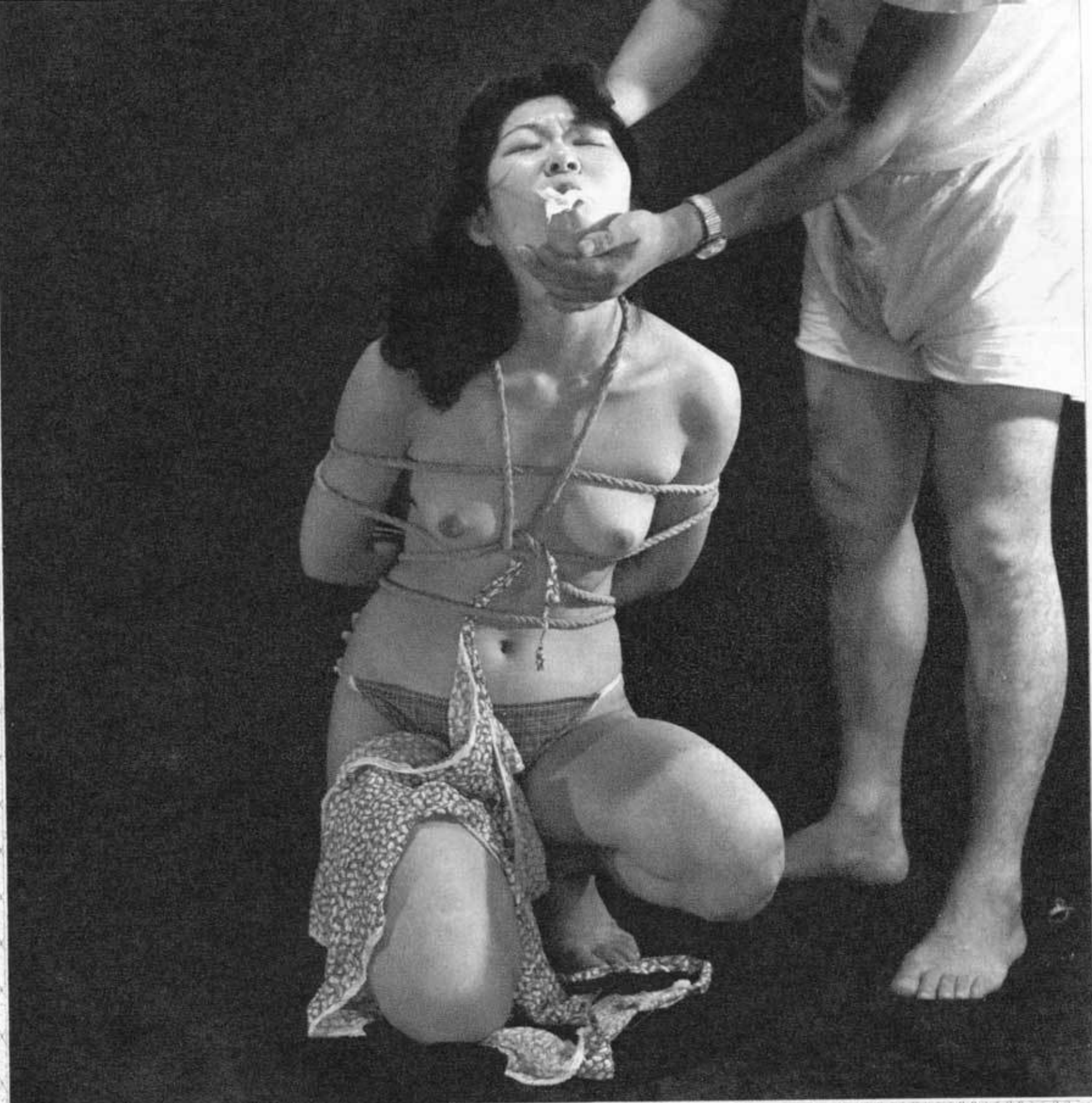




香 り あ る 息 吹







モデル 四方清美



一 方 的

モデル 四 方 清 美





チャーミングな女

〈サジスチック・ムード〉

EXOTIQUE No.6 ヨリ



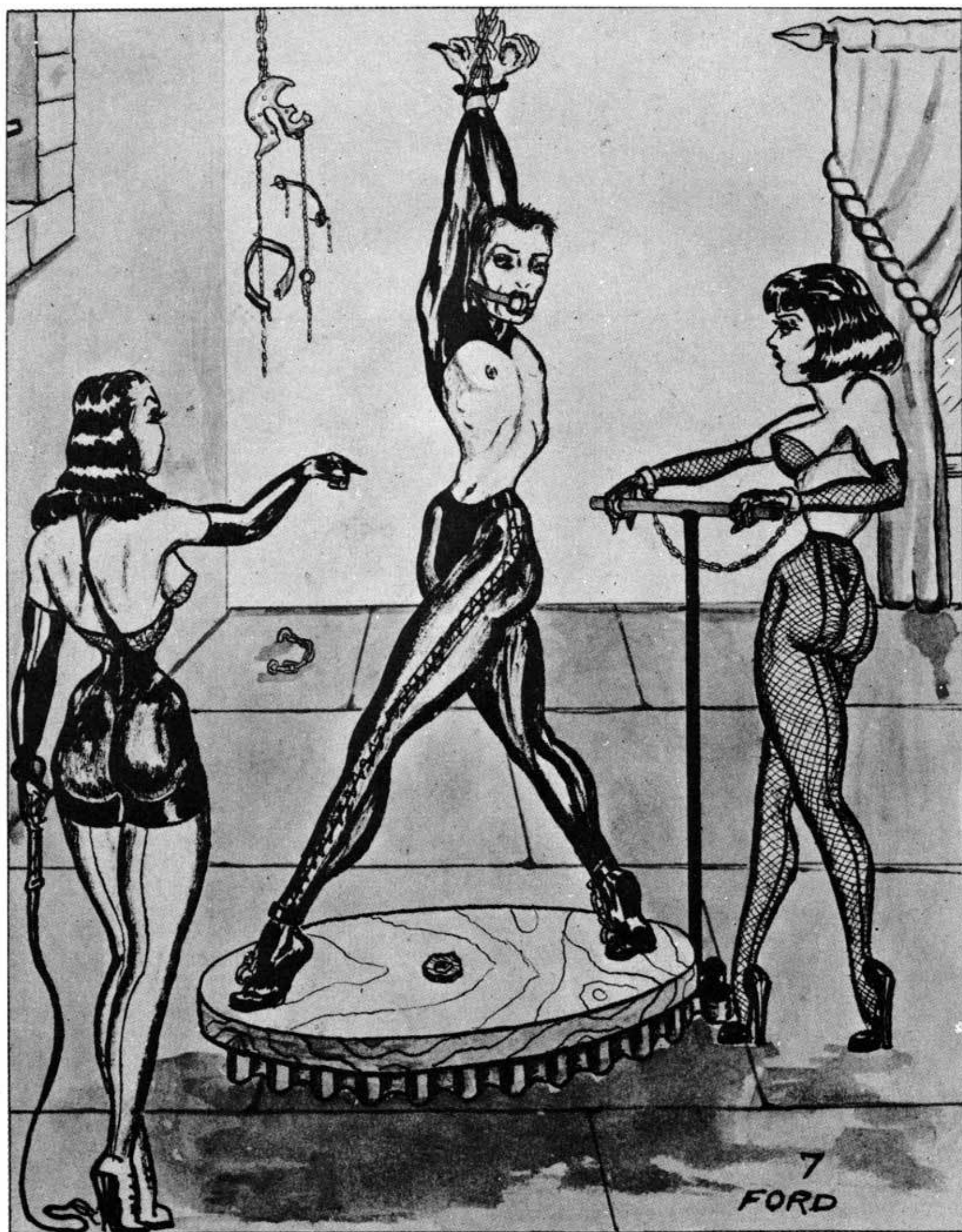


# 猟奇館の歓迎パーティ

猟奇館の歓迎パーティに招待された青年紳士  
紳士は、三人の若い女たちの手によって身ぐ  
るみを剥がされて特別訓練室の拷問台の上で  
ギリギリと身体をねじられるのであった。







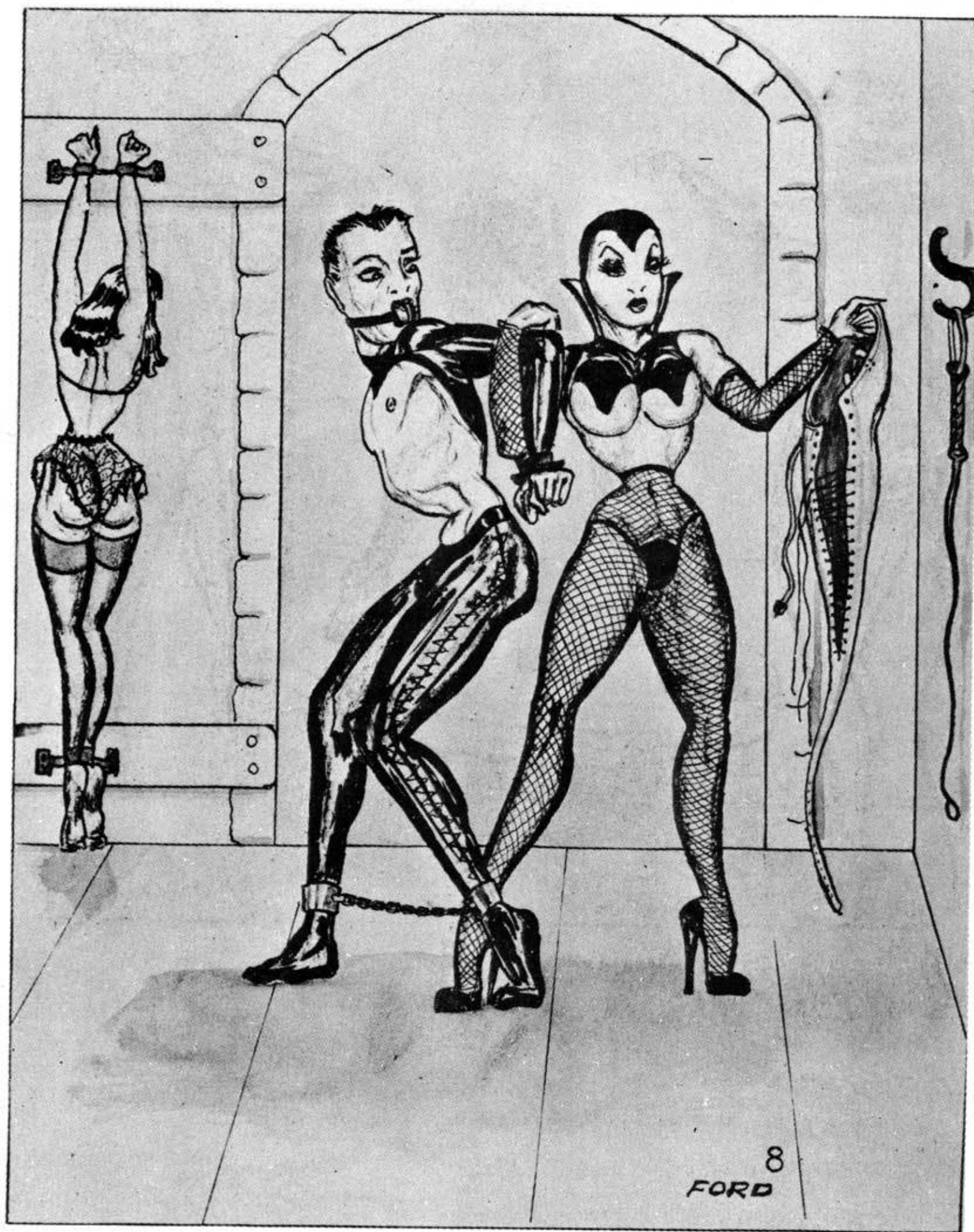
## 拷問台上の苦悶

全身に激しいムチを浴びたがら、手拭をねじるように身体をねじられていった。若い女は青年の苦悶も知らぬげにハンドルをギリギリ、ギリギリと回していった。男は女の前で哀れな悲鳴を挙げるのだった。

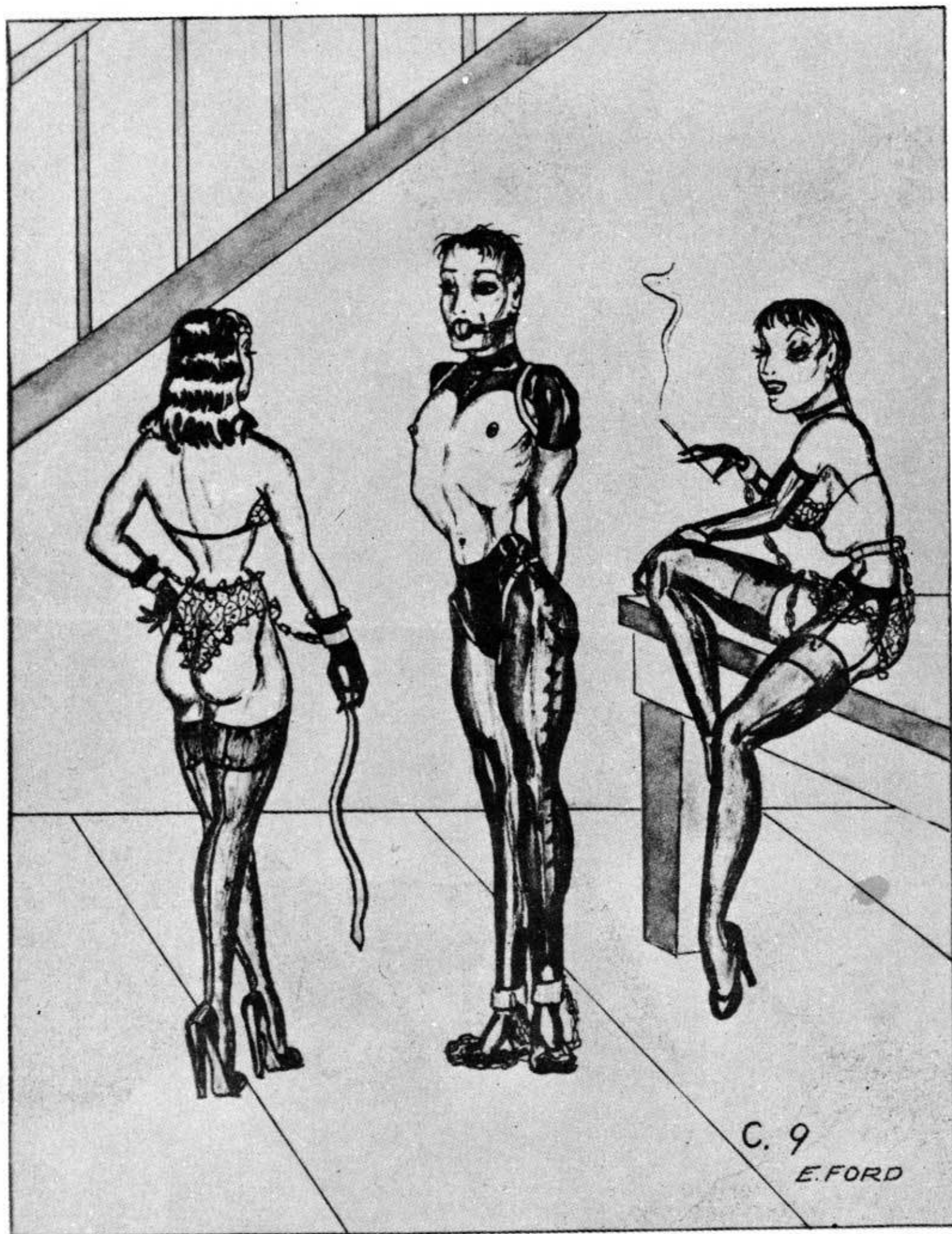


# 恐怖の予告

身体ねじりの拷問台上でさんざん痛めつけられた青年は、やっと解放されたが、腕をとった女の鋭い視線に射すくめられて、次に起るべき拷問のきびしさを予想して、恐怖に身をふるわせるのであった。







## 奴隷宣言

「如何にお前が立派な青年社員だからといって、一旦この猥奇館へ入ってきた以上は、私達の奴隷になるより仕方がないんだ」女の前に直立不動の姿勢で立たせられたこの男の哀れな姿はどうだろう。姿勢で立たせられたこの男の哀れな姿 どうだろう。





レスリング・プレイ

逆手どり

＝マゾヒスチック・フォト＝





ヘッド・ロック





チャーミングな女

〈マゾヒスチック・ムード〉

EXOTIQUE No.6 ヨリ



新しい風俗文献研究誌

奇譚クラブ

新年増大号

1961年 1月号

(第15巻 第1号 通刊第149号)





## 新アブ街散歩

「へんたい」という言葉について

市川 国彦

## 1

ラッシュアワーを過ぎた国電のなか。

まばらな男女乗客の頭上に、越中フンドシのように垂れ下がっている通称「中吊り広告」に印刷された大きな見出し文字「男性はいつも貴女の「あし」を見る」――。

週刊コウロン、十月四日号の特集記事の見出しなのだ。

私は、私の隣りの座席にいる女性にささやいた。

「ねえ、あれを見てごらん」

連れの女性は、瞳をあげて、私の視線を追った。

そして、その文字を読んだ。

「いやらしい」と、そくそくつぶやいた。さらに「へんたい的だわ」と、つけたした。

それから彼女は、あわてたようにチラと眼を自分の足におとし、尻をもじもじさせながら、両膝を合わせ、靴をそろえた。

「週刊誌もだんだん、えげつなくなるのね。コウロンなんて、上品だったのよ、前は」

彼女は、いかにもけがらわしいというような表情をつくっていった。

私はさっそく、その「週刊コウロン」を買い求めた。

問題の特集記事に眼を通した。

私が想像したとおり、やはり「足フェティシズム」を刺激する文章が、かなり濃厚に書きつらねてあった。しかも、十枚近い写真入



りで。

——この記事が、もうすこし突っこんで書いてあれば、これを奇譚クラブに載せたとしても、さしてピントはずれではないな……と、私は思った。

この「週刊コウロン」の八月三十日号には「お尻幻想家と女弟子」という、これまた奇ク顔まけのアプ記事を、堂々と掲載し、売り物にしているのだ。

## 2

「週刊コウロン」に限らない。どの週刊誌も月刊誌も、ちかごろこの傾向が強い。

一つには、特集として歌うほどのネタが、乏しくなってきたせいであろう。

一つには、この種の材料のもつエロチシズムを極端に利用して、煽情的におもしろおかしく書きたてて読者をつろうという下心。

ということはまた、これらの記事に眼を惹かれる人間も、多いというわけになる。



「へんたい的だわ」と眉をひそめた、私の女友達も「その週刊誌、あとで私にも読ませてね」といった。ちやっかりしている。

もつとも、彼女にとってけっして見過しにできるキャッチフレーズではないのだ。

この記事を読んで、女の足を見たがる男性の心理を研究し、いっそう自分の足の美に、磨きをかけるつもりなのだろう。そして、より男性の心を挑発し、もてあそばうとするにきまっている。

それがはっきりした計画でなくとも、無意識のうちに、若い女性はそのような努力をし、ポーズをつくり、行動する。

うわべでは「へんたい的だわ」などと軽蔑しながら、彼女らは、そして男ももちろん、これらのアプの記事を読む。読めばおもしろい。心の深奥部をくすぐられ、かきたたえられるような気がする。

程度の差こそあれ、万人の胸底に、アプ願望の心理がひそんでいるからだ。

読者が熱心に読むから、編集者は味をしめて、またつぎのアプ的材料を探がし求め、ない時にはそれらしくデッチあげて誌面に歌うのだ。かくて残酷ブーム、アプ流行時代到来という次第。

「週刊スリラー」という雑誌がある。

れいの「倒錯雑誌の執筆メンバー」という、なんともいいかげんな記事を書いた週刊誌だ。

この「週刊スリラー」十月七日号のトップ記事は、特別レポートと肩書きをつけて、なんと「おんな上位論」——。

これがまた、マゾ派の心をうずかせる文章の羅列である。眼についたところを、抜萃してみよう。

『——もはや、男性が女性の弱さをいたわってやる時代ではない。



なぜなら、女性自身、たいへんにお強いからだ。

講道館に女子部が開設されたのは、遠く大正時代からであるそうだが、近年はいわばブームの状態を呈しつつづけている。一日の来館者数はざつと百人。高校生、BGが大半を占めている。

なぜ彼女たちは柔道をやるのか。

十八才の高校生（一級）は、ずばり「強くなりたかったから」と答えた。

都保健局につとめる二十二才の女性（初段）は、

「家の者がね、家であられるよりは柔道であられる方がいい、といったので」

そして、柔道の魅力は、

「投げるスリルがたまらない」（高校生・初段）であり、暴力的男性については、

「こらしめてやりたいと思う」（家事手伝い・三段）と、えらく攻撃的なのであった」

『——婦人経済連盟という、いわば女性の「日経連」のような団体がある。会員はおよそ百五十人。いずれもソウソウたる女社長さんばかりである。この人々を強い女性——というのは、あまりにも当然すぎて面白くない。文字どおり「女上位型」の職場、そこに働く男子社員の声をきいてみると、

「そりゃね、たまには自分のことをダラシないと思うことだってありますよ」（44才の経理マン）

「男女のちがいてことより、能力の差が問題なわけでしょう。ウチはとにかく「女太閤」ですからね」（25才・外交員）

「郷に入らば郷に従えということばもありますからねエ。まあ、ぼ



くは満足してますよ」（30才・庶務課長）

いったいに低姿勢。女社長の教育よろしきを得ているといった風であった」

『——いわゆる「甘い生活」の面でも女性の発展ぶりはすさまじい。池袋西口にNというゲイバーがあるが、ここに夜十二時すぎに行くと、面白い光景が見られる。美しい中年女性が、女装の青年をはりあうのだ。彼女たちはほとんど銀座の高級バーのマダムたちで、店を閉めてから一夜の相手に「男を買い」にやってくるのだという』

『——より強い女性たちは、男性をドレイのようにあつかう。

銀座のジャズ喫茶、ダンスホールなどに、きまって数人で現われるブルジョア娘たちがいる。彼女らはそこである「鑑賞用」のエレガントな青年を誘って、ホテルへ行く。そして、丹念なペッティンガ行為を楽しみ、あげく最後の段階に至ると、やにわに男をはねのけて絶対に許さないのだという。だから解剖学的な見方では、彼女らはあくまで「処女」なのである。

にわかに信じがたい話だが、これにはちゃんと証人がいる。彼女らの一人に誘われてあわれな性的ドレイの役目をさせられた銀座の



喫茶店Kのボーイである』

ざっとこんな調子なのだ。

これらの例の一つ一つを、もう少し慎重に掘り下げていったら、これまた立派に「奇譚クラブ」つまり本誌に掲載可能の記事ではないか。

奇妙にえらぶった位置から「奇ク」を見下ろし、いかにも汚い不潔なもののように、侮蔑まじりの筆調で「変態雑誌」として煽情的に取りあげた「週刊スリラー」が、その「変態雑誌」に転載しても不自然でないような記事を、トップに陳列しているというわけである。

もつとも、このトップ記事「おんな上位論」を書いた記者（あるいは社外の執筆者）も、この文章がマゾ派を刺激するとは考えていなかっただろう。

失礼な言い方で恐縮だが、かれらにそれだけのセンスも、理解もないのだ。

理解というよりは、知識、認識というべきか。あるいは研究不足、勉強不足ということにもなるうが。

かれらは、自分たちが理解でき得ぬものをアブノーマルとよぶ。



自分たちに感受し得ぬ愛情の形態は、すべて「へんたい」呼ばわりである。

「へんたい」「変態」「ヘンタイ」——なんという、いやな、おぞましいひびきをもった言葉だろう。

既成観念にとらわれずに、注意ぶかく愛情をもって人間を観察する者には、他人のことを、そう無責任に「へんたい」呼ばわりはできないはずだ。

あらゆる人間に、ある程度の異常性があるということは、こんにちは、もう誰にでも知られているではないか。

### 3

『——というのが常態の性慾で、というのが変態異常の性慾であるか？——』という、従来は、一定の定義も解釈も殆どないのである。凡百の性科学書を繙いてごらんさい。いずれも「平衡を失い常軌を逸するもの」などという程度でごまかしているに過ぎない。

では常態・正常・常軌・平衡等々という性慾とはどんな程度のものであるか？——というと、是もまた、よくは判っていないかったのである。

ところが、主としてフランスの心理学者ビネー、ジャネー、リボ、シャルコー等が、いわゆる「変態心理」（夢・錯覚幻覚・催眠・降霊・人格転換・異常犯罪・ヒステリー・精神病・神経衰弱・神経症等々——）を研究し、それについて、ジグムント・フロイドが精神分析学を樹立するに及んで、正常と異常、常態と変態にはハッキリ



リした本質的差違がなく、厳密な区別などはつけられないことが発見された。

一言にしていえば、人間の心はすべて、

a 意識（自分でも自覚出来る心）と、

b 無意識（自分でも気づかず、催眠術や精神分析を施して、初めて悟れる心）

とで構成されている。その無意識だけが無統制に暗躍する場合は「異常」と呼ばれているのである。

性についても、万人の心底（無意識裡）にある願望は正に変態的で、心の統制機構が弱ければ、その人は性生活ばかりでなく、あらゆる生活が異常になる。

しかもそれは、もっともなことだともいえる。

嬰兒時代から徐々に「心」が出来ていくためには、誰だって多岐多様な刺激を受けて、はじめて一人前になるのである。——」（高橋鉄著「アプノルム」より）

高橋鉄氏は、さらに、

『——永い過去のことであるから、すべての人は多少なりとも様々な「変態願望」を持合せている。その点では「万人異常」である。



ただ、多種多様な性本能（部分的要素的本能）が偏端なく発展し融合され、統制力も強ければ、その人は、適度に、性生活へその願望をまじえていく。あるいは娯楽その他で、空想的に発散させていける。それでもなお残っている願望は、社会的に有益な仕事に高めて発揮する。——」（同じく「アプノルム」より）

と述べられている。

ながながと引用させて頂いたが、これらの言葉は、私自身の生い立ちやら経験やら、思考やらとを合わせて、十分にうなずけるものがある。

#### 4

私の友人に、テレビやラジオのドラマを書いている作家がいる。

もっとも、まだ一本立ちになれなくて、生活費のほうは、もっぱら彼の若い細君が稼いでいる。細君は渋谷の酒場に勤めているが、映画や小説に描かれているような華やかな稼業ではないらしく、いつも「疲れる、疲れる、つらい、つらい」と不平をこぼしている。

この友人が私にむかってときどき、

「きみは、アプだからな、なんとなくキモチわるいよ。ぼくはどうもサドだとか、マゾだとか、変態趣味ってのは、わからねえなア。でも、あの道に一步入ると、また、いいんだってねえ……」

なんていうのだ。冗談口調のなかに、嫌悪に似た私への侮蔑の余韻がある。親友同志だから、なんでもズケズケいうのだ。

ところがこの友人が、食事の仕度、部屋の掃除から、洗濯までやる。やらされるのだ。



「あたしは外で働いて、経済生活を確保しているんだから、あなた、家事はぜんぶひき受けてよ」

という、細君の命令なのだ。

そこで、売れない作家の夫は、細君の下着からパンティまで器用に洗濯する。

ところが、それがまんざらイヤでも面倒でもないらしく、私がみたところ、彼は嬉々として洗っているとも感じられるのだ。

私は、彼と共通した仕事をもっているの、彼の家を訪ねると、いつも徹夜になるほど話しこむ。

深夜、細君が帰ってくる。酒気を帯びていることが多い。

「あら、市川さん、いらしてたの。駄目なのよ、うちの亭主、さっぱりなの。才能がやっぱりないのね。買いかぶってたわ。結婚するときに、一年働いてくれれば、なんとかなる、かならず原稿紙で飯が食えるようになるって言ったのが、あなた、もう二年半よ。あたしだって、いつまでバーなんかで働いていたくないわ。だからね、あたし言うのよ、お金になるんだったら、エロ小説でもなんでも、どしどし書けばいいって言うの。だけど駄目ねエ、エロ小説を書く才能もないのよ、このひとつたら……」

こんな調子で、まくしたてるのだ。

「そんなこと言っちゃって、きみ……」

と、さすがに夫はムッとした顔になる。

だが、彼女は平気で亭主を無視し、なおもしゃべりつづける。愚痴というよりも、次第に侮言、嘲罵に近くなってくる。

夫に客がある時に限って、彼女の罵言は意地悪さを増して、烈しくなる、と私はみた。

しまいに亭主も沈黙して、母親に叱られる悪戯小僧のように、かしこまった表情できいているだけだ。どうも彼のほうにも、罵倒されている、という快感があるらしいのだ。屈辱の楽しみを享受している、という恰好にちがいないのだ。

普通だったら、

「お客の前で、いいかげんにしろ!」と、どなりつけるか、サド派の亭主なら、

「うるさい、だまれ!」と、横ッつらの一つも張りとはすところだ。それを、黙ったまま、やや悲愴な表情できいているところなんか、どうみても腹のなかでこの屈辱感を楽しみ味わっているんじゃないかと思うのだ。

第三者にきかせることによって倍加する快感を、この若い夫婦は楽しんでいるのだ。だから、この夫婦喧嘩には湿っぽさや陰険がすこしもない。

なんとなく明かるく、余裕があるのだ。遊びがみえる。そしてこの夫婦仲は、表面はそんな調子だが、じつはまことにうまく、しつくりいっているのである。

サド的女性と、マゾ的男性が、ぴったり調和した夫婦の典型みた





いなもので、私はいつも感心して眺めている。

この亭主が私にむかって、

「ぼくは正常で、マゾもサドもわからないけど——」

なんていうのだから、思わず苦笑してしまふ。

以上、自分がアプがやっているのも知らずに、他人を「へんたい」呼ばわりする人間の具体例を述べたわけ。実話である。

しかし、こんなのはツミのないほうなのだ。腹立たしいのは、ジャーナリズム関係の人間が、そのペンや紙面を武器にして、知ったかぶりで、私たちをなんでもかんでも「変質者」扱いにして、どす黒い谷間の底へ位置づけてしまうことだ。まるで、人種的差別のよう。

(かれらも、それでメシにありついているのだから、仕方のないことだともいえるが)しかし、あまり興味本位に、バカバカしく書かれると、

「あんたたち、へんたい、へんたいって騒ぐけど、一体、へんたいって何だか知ってるのかい？」

と、ききたくなる。

つくづく思うが「変態」というその言葉自体、なんという古めかしい、安っぽい、通俗的な、無責任なひびきを持っていることだろう。

## 5

しかしながら「変態」という言葉を自分に浴びせて悩む人は多い。それらの善良な人たちは、まじめに苦悩し、懊悩し、煩悶する。



本誌十一月号に掲載された「映画『甘い生活』について思う」との真崎伸一氏などがその一例である。じつに真剣に悩んでおられる。自己嫌悪におちいり、自分のことを救われようのない異端者だと思いつめている。

それゆえに、私は思う。想像する。

日常生活における真崎氏は、きわめて温和な、仕事熱心な「正常人」よりも「正常人」らしい人物ではなからうか、と。

すくなくとも、真崎氏の周囲の人たちからは、そのようにみられているにちがいない、と。

これは真崎氏だけではなく、本誌の読者のほとんどが「昼間」は、きちんとした社会人、社会生活を営んでいる方たちだと思う。お世辞でも、希望的観測でもなくそう思うのだ。

私の知っている奇クの読者は、みんな立派な社会人である。良識もあり、分別もある。社会に貢献し得る堅実な労働に従事しておられる。

その労働を終え、汗をぬぐい、一日の疲労を癒やすべき時間がやってきたとき、ひそかに開始される私たちの空想、夢想、あるいは実際のな多少の遊戯——を、なぜみずから「変態」とおののき、不



安と悪徳感にさいなまれなければならないのだろうか。

私は、つぎの名句を、いまでも忘れずに、胸のなかに抱いている。

「だが、すべて夜のおこないというものは、真昼の光りを浴びれば、似た結果となるのではあるまいか」(奇譚クラブ、昭和二十九年二月号「感情教育」吾妻新)

まったく、至言だと思う。

(この一句だけではなく「感情教育」という長篇小説そのものが名作であった)

私が言葉をたしていえば、

「だが、夜ひそかな場所でのおこないというものは、真昼の光りを浴びたら、すべてアブノーマルな似たような結果になるのではないか」

新しいようで、じつはあまり新しくない週刊誌(とばかりは限らないが)の編集者、又は執筆者は、奇クに掲載されている物語、小説、あるいは告白的創作が、すべて事実であり、その内容のとおり、すさまじい行為が実施されていると思っているらしい。

奇クを読むサディストのすべてが、女を裸にして縄で縛りあげ、天井から吊り下げて鞭で叩く——とでも、かれらは思っているのだ。



ろうか。

マゾヒストのすべてが、高貴な女主人の足もとにうずくまって、日夜鋭い皮鞭を頂戴しているとしても、かれらは思っているのだろうか。

そのような「幸福」な人間は(残念ながら)百人に一人も存在しないらしい。たとえ、そういうチャンスが現実を訪れたとしても、裸の女を前にして、いざ縄を握ったサディストは、おそろしくなつて、ぶるぶるふるえだすだろう。

男奴隷志願者も、実際に女主人の皮鞭で裸の背中を思いきりなぐられたら、百人のうち九十九人は、快感よりもその苦痛にとびあがり、悲鳴をあげて逃げだすのだ。

こういつてしまつては、じつはミもフタもなくなるのだが、それがマニヤの大多数ではあるまいか。

私たちは空想を描く。夢に没頭する。

空想を楽しみ、ああして、こうして、自分がこうなつて、と夢想する才能を与えられた人間だとも思う。

その空想力に手をそえ、支えてくれるのが奇クの写真であり、豊富な本文である。バラエティに富んだ活字である。

フォトにおける女性モデルだって、暴力で縛られているわけではない。脅迫されて縛られているわけではない。みんな納得ずくなのだ。

演技であり、芝居である。

その芝居からイメージをさらにひきだし、発展させて、いろいろと楽しみ、秘めたる願望を発散させているのだ。

したがって奇クは、私たちの夢の宝庫であり、空想の泉であり、





慰安と発散の源なのである。

奇クの誌面に展開する犯罪的な物語を、そっくりそのまま自分で主演してしまうような自己統制力のない人間は、奇クを読むことのできない仕掛けになっている。

刑務所では、おそらくこの雑誌を読ませてくれないだろうから——である。

奇クが、現在かなりの発行部数を維持しているのは、社会人としての分別と良識から踏みださない愛読者たちが、数多く存在するからである。

鬼山絢策氏は、奇クの旧号（昭和二十九年三月号）の「変態讚美論」のなかで、つぎのように述べている。

『——現代生活において、いかに自由を希望しても、個人が社会機構の歯車の一齣である以上、法律と道徳を無視することはできぬ。そこで「正しい変態性慾」には三つの戒律を設けなければならない。

一、法律に触れる行為を避けること

二、道徳を守ること

三、程度をわきまえること

この三項である。——』

いつのまにかペンがすべって、なにやら奇クの礼讃めいたものになってしまった。しかし、これはなにも編集部から依頼されたわけではない。

ペンがすべったついでに、その良識と分別に関連して、もう一言いわせてもらおう。

本誌十一月号の「読者通信欄」における、菅良太氏の通信文についてである。

『——編集の方ならお分りでしょうが「風俗奇譚」に芦立鋭吉の筆名でのせた「男に加えられる責」の一文をのせたのは小生です。初めての投稿で思いぎった語句、名称を、そのまま使用してみましたら、一字も削除なく掲載され驚きました。それにひきかえ本誌は「全裸にされて」という語句も削られる神経のつかい方に、若干、疑問を持っています。（中略）ほとんどの読者が男性であるこの種の雑誌に、男性の体に関する語句への神経の使い方は、あまり必要ないと思いますが……』

この言い分は、もっともだと思う。投稿者の心理として当然であろう。

読者にしても、削除のない文章を読みたいにきまっている。

しかし、そこがそれ「分別」だと思うのだ。こうした雑誌は、前にもくどく述べたように、とかく煽情的な眼でとりあげられ、興味本位の話題になりやすく、とかく世間をはばかりがちである。

本誌の編集者が、必要以上に気を使うのも、つまりは奇クの永遠



の寿命を願うからにほかならない。

読者にしても、この雑誌がいつまでも絶えることなく発行されることを、望んでいるのではないだろうか。

それには、できるだけ刺激的な、直接的な表現や語句を避けるのが、上分別というものである。

他誌には、他誌の方針があるだろう。

あるいは「指摘されるのを覚悟で、発行できる間に、じゃんじゃん売りさばいて儲け、いざという場合には、あっさりつぶしてしまふ」ことを、腹のなかにふくんでいて、なんでもかんでも掲載してしまう同傾向誌が、あるかも知れない。

一時は目新らしく栄えても、しかしそれはけっして長続きしない。ぼろ儲けが第一、サドもマゾもよくわからないが、ただ裸の女に縄をからませた写真を盛り、それらしい読み物を載せ合わせて店頭で並べる——を営業方針とした雑誌社が果して永続できるものだろうか。

たとえ指弾からのがれ得たとしても、内容的にいつてどうだろうか。

私たちの空想を助長させるだけの充実した内容を、つぎつぎに盛り込んでいけるだろうか。

アプという性向は、そんなに底の浅いものではない。範囲のせまいものでもない。青みどろの深淵に似ている。神秘的ともいえそうだ。

編集する者の理解と勉強もたいへんだと思う。金儲けだけを考えている出版社に、永続はむずかしからう。

断わっておくが、私にはけっして他誌の悪口をいう心はない。た

だ冷静に客観的な判断を述べているだけだ。

このような雑誌だからこそ、良識と分別をたいせつにしたい、と私は痛切に考える。

私は先にも書いたように作家と呼ばれる友人の男と共通の仕事を持っているものだが、又一面純然たる読者という立場からも、この種雑誌を見ているつもりである。従って、執筆者という立場からしても、読者という立場からしても、各誌が栄え永続するのを望みこそすれ、悪口など言う気持は毛頭持っていないつもりだ。私一人の考えから永続して貰いたいばかりに、老婆心までに私は私なり苦言を述べたわけだ。この事は奇クについても言える事でもあり、その材料も持っているので次の機会には本誌の棚卸しもやってみようと思っている。

ペンはまた妙な方向にそれたが、アプ流行の現代——というよりも、アプが次第にアプになっていく現代において、いたずらな罪悪感に苦しむことは、もうやめにして「分別」あるアプを楽しもうではないか、と私はひかえめな提案をしたいのだが。

もっとも「自分は背徳者だ、異端者だ」と苦悩することによって自虐の愉悅を得ているお方には、なにをかいわんや、である。





晴雨画稿

新草双紙

「地獄宿」

伊藤晴雨

奥多摩峡谷に鳩の巢という部落があつて江戸の松平紀伊守の別館がある。館の主は発狂した奥方で医師の勤める儘に茲に出養生をしている始末。此の館に見目美しい女中が青梅の町から奉公に上った。美しい女中を見ると発狂する館の主は、良人の紀伊守が変に女中に手を出すという嫉妬から起った発狂で、此の奥方は至って醜婦で家康に於ける築山御前の如き人物であつた。或る時、些細な事から奥方の怒りに触れた腰元の美しい女、其の名を楓と呼んで居たが、半ば発狂した奥方は此の腰元を縛って散々に責めた挙句、村での名人と呼ばれる鋳物師に命じて縛った手に鉄の輪をはめて、之に錠前を掛けた上に其の錠前の穴を塞いで仕舞った。邸内に不思議な榎の木があつた。樹幹から絶えず水が滴り落ちるので、乳の出ない女は此の木に願を掛けると乳が出るといつて伝手を求めて参詣する者が多い。此の木の下で残酷極







まる責めが行われた。

髪の毛をむしり取られて、血が浸んだ毛を一本宛或は一かたまり宛釘抜きで引抜かれる苦痛は死ぬより苦しい。楓が必死になってもがき苦しんでいるのを、発狂した奥方は面白そうに眺めて居た。後の手に縛られて、まだ其の上に手錠の穴をふさがれて屋敷の門前に投げ出された楓は折柄暮れかかる秋の夕日を浴びて紅葉色づく奥多摩の峡谷か鞍馬橋の方へ無意識に歩いて行った。所謂附近からの脱走兵が強盗に早替りしたのであろう、数人の大男がトッピーと暮れてしまった洞穴の前で焚火に暖まって居たが、縛られた美しい女がうつろな眼を見張ってトボトボと歩いて来るのを見て一同は立ち上った。

## 二

渋谷誠一郎の振武軍が戊辰の歳に飯能に拠って、官軍に抗したのは上野の彰義隊が破れたのと同じ結果になったが、勝てば官軍、負ければ賊の譬え、其の儘討ち洩らされた旗本の武士は山賊となってしまうて、奥多摩の鞍馬橋附近に本拠をおいて良民を悩まして居た。其処へ、両手を縛られ足にはおもりをつけた美しい女が通りかかったのだから無事に助けてやる筈はない。落花狼藉の一齣を路傍で演じた事は云う迄もない。

併し、賊にも涙がある。足のおもりを村の馬蹄鍛冶に命じて鎖を切ってやった序に手の自由を奪われて居るのも解いてやろうとしたが、錠の穴は或る特殊な金属で埋められてあって、之を破るとすると、熱を其の縛られている錠前に加えなければならず、かくする時は、両手が焼けただれてしまうので、女が泣き叫ぶのを聞いて賊共は之を止めさせて、縛しめを其の儘大菩薩峠方面へ引き上げようとして女を引立てて行った。

鞍馬橋を渡って甲府方面へ出る甲州街道を、女を引立てて歩いて行くと、辻堂の陰から一人の男が出て来た。(はかりさし)という此の附近独



特の生糸買いと見せて、実は八州見廻りの役人で、手先の一種が此の女を怪しいと見て跡をつけていった。

「旦那方暫らく」と声をかけて（はかりさし）の男は此の女を売ってくれないかと山賊に交渉した。丁度軍用金を費いはたして困っている矢先、女を十五両で売り渡す事にしたが、十五両などという大金を持って旅をする男の方が余程怪しいのだが、賊共は之を何とも感附かなかった。

## 三

美女楓を十五両の金で買ったばかりさし（秤差し）の男は、村端れの岩窟を住居にしている独者の鍛冶屋に頼んで、残った足の鎖を切って貰った。楓はいろいろな残酷な目に遇っている夢に悩まされて、只ウツトリと男の為すが儘にされているより外仕方なかった。自分は牢の中に入れられて鼠に身体中噛まれて血塗れになる夢、空腹な夢、そして夢が続いている。

一人が大勢の女になり、大勢の女の中に男が交っている。そうした夢がそれからそれへと続いていく内に、ふと気がつくとい自分は縛られて居て駕籠に乗っているように思われた。

## 四

秤差しという目明しを兼ねた職業は、元来農家の繭を買いだしたり、絹糸を買いこむのが本職である。甲州では何時頃からか、廿四匁の絹糸を金一両に換算したので、俗にいう「金に糸目はつけない」という言葉は甲州から出たのだという。又別の意味に於ては、風の糸目が甲州に限って廿四本ある（江戸の風は十九本）から来た事だとも伝えられて居る。武田信玄が上杉謙信に塩を送られる以前、岩塩を掘ったと伝えられる塩山（えんざん）は富士の松山で此山の麓にある温泉宿は昔しの遊女屋を兼ねて居た。楓が駕籠に乗せられて此宿に送られてから身の毛もよだつ様な事が起った。

## 五







鬼の宿につれて来られた楓は、秤差しの男に証文と引替えに三十両の身代金で塩山（えんさん）の地獄宿に売られた。

両手は後手に縛られたまま口には手拭で猿轡をかまされた姿で地獄宿の親方の前に引き出されて値ぶみをされた。（第一図）

やがて、奥の座敷へ連れ込まれた楓は、親方と女将の前で口説かれた。「お前の身体にや三十両という大金がかかっているのだ。約束の通り女郎になれ」「いやでございます。妾には言い替した夫がございます。たとえ両手は、此様に縛られていまいしょうとも、身体を売るのはだけは勘忍して下さいませ」「生意氣な女郎（めろう）だ。いつもの通り一で、つちでつちてやれ」と宿の主の言いつけに、此店の若い者や、やりて婆がよってたかつて身体改めをやる。満足な女だと見極めがつくと、裏手の土蔵に投げ込んでおけと親方は命令を下した。（第二図）

火の用心はこうした遊び場所の唯一のもの。銅網の張られた鉄行燈を持った主は、店の若い者に縛つたままの楓を担がせて裏の土蔵へと運ばせた。死んだようにぐったりとなった楓は、主の開けた土蔵の中へ投げ込まれた。（第三図）

此家の主人は、女を責める事に就いて、あらゆる方法を考えて之れを実地に行っていた。大勢の女は筆にするさえ身の毛のよだつ様な方法で殺されかかっていた。

主人と雇人との区別がハッキリしていて、人身売買が許されていた時代には、田舎の町には、こうした事が公然と行われていて、女を責殺しても雇主には何の咎めもなかったという結構な御時世であった。奇クの読者の一部の人々が、こういう御時世に生れなかった事を作者は悲しむ。（第四図）



## 《体験記》

## 誘導への課程

山 野 香 澄

## 一

夫婦生活というものには必ず倦怠が伴うものである。如何なるかたちであろうとも倦怠というものは夫婦生活にとって好ましいものではない。私は恋愛から長い結婚生活に入り既に三人の子の父となつたのに協議離婚という最悪の事態を体験した。しかも結婚してから口喧嘩一つしなかった妻と別れたことの最大の理由は倦怠にあつた。

私の場合、倦怠というものをハッキリと意識した訳ではなかった。離婚して、子供の始末もつけ、落付いて自分自身の夫婦生活の失敗をあれこれと詮索してみても実は倦怠に基くものだという結論を得たのである。

私は二十八才の時、或る女と恋愛し、そして結婚した。私は当

時、新聞記者として恵まれた地位にあり、また他に月刊誌を発行したり、映画事業に関係したりして相当の収入を得ていた。

私達の結婚生活は楽しい期間が極めて短かった。それは支那事変が起り私の仕事の性質上、一般の人達よりも強く夫婦生活に影響を受けたからである。続いて太平洋戦争に突入して益々夫婦生活を味気なくした。然し、このことは一般家庭でもそうであった筈である。何故、私達の場合に限って、こんなことになったのだろうか、それは外部からの刺激に対して夫婦が一層かたく結付く機会がなかったからかもしれない。事変とともに隣組が編成されて私は隣組長にされた、続いて防空群長に選ばれ、やがて町会の理事にも撰任された。そしてこのことは他の人々の家庭生活を相当広く見聞することになった。

多くの家庭が色々の形態で刺激を賄っていることを知った。そし



てその刺激は生活程度の高い程強く而も多いことも判った。

私は職業柄相当の書物を蔵していた。その書物は種々雑多なものであり、奇書、珍書の類も多く集めていた、多くは輸入禁止の外国本や、発売禁止の国内本等である。その外写真や絵画も相当、手に入れていた。

私はこれ等のものを資料として使用するだけで夫婦生活に活用することをしなかった。

折角の珍書の指示を夫婦生活に反映させなかったことは真に惜しいことであった。

昭和廿年五月廿日、私の家は戦災で数多くの書物とともに焼失した。そして無一物となった。妻は戦時中の夫婦生活の味気なさや戦後の生活に倦怠して離婚を申出た。私は人生の半ばを過ぎて夫婦生活の重要性を熟慮し、再生を期して、妻の申出を受入れた。

そうだ、こんどこそ、私は楽しい夫婦生活を送ろう。倦怠のない、刺激のある生活を築こうと決心した。

独身になって私は今後の夫婦生活に対する計画をたてた。

## 二

すべてのエネルギーと生命の根源が太陽であるのに原始人以外には誰も太陽の恵みに感謝しない。当然であるからだ。夫婦生活も太陽のように、空気のように当然平和で無難であるべきなのに、何等かの変化を必要とするものである。夫婦生活には刺激が必要なのだ。

私は夫婦生活を再建するために色々の条件を考えた。先ず、どういう女性を妻として迎えるかという点である。

私は妻とする女性に、性格と容姿、その他について、次のように

結論した。

性格生来、少しも変質的なものを有たないこと。

これは少しおかしいかも知れない。しかし、私は白紙の女性を私の好みに塗り上げてゆく必要があるからで、また生れつき変態性のある女性の場合、長い夫婦生活の途中で生活のルールを踏み外してしまう恐れがあると思ったからなのである。

夫婦が意識し、相談して行うプレイは、たとえそれがどんなに激しいものであっても、楽しくこそあれ危険はない。そして益々夫と妻とは固く結ばれるのである。

また、それが二人だけの秘密であるという強い確信を持つので他の異性に好意以上のものを感じないものである。

医学的に観て一般に女性は多少ともマゾヒスティックであり、男性はサディスティックであるわけだが、多くの場合、夫婦生活に男女の原則的な性格をそのまま取入れて、妻をマゾに仕立て——大体それが多いのだが——夫がサド的立場でプレイすると、その享樂への課程は比較的容易で、短期日に妻をその傾向へ導き入れることが出来るのであるが、そのことは、ともすると妻を浮気に走らす場合があることに注意しなければならない。

妻のマゾ性が昂進したとき、マゾ性の妻によっては更に精神的な被虐を希むために浮気をするということが云われている。これは浮気をして発覚するかも知れないという不安な気持が一種の刺激になることと、発覚した場合の責めに精神的或は肉体的快感を得ることを希求するためであると説明されている。

夫婦生活の健康な刺激を計画する私にとって妻の浮気は困る問題である。



私の夫婦生活に対する設計は、たとえどんなにプレイにも耐えるようにし、しかもそれが何よりも、楽しい遊びであるように妻を導くにしても、それは飽くまで演技であって本質的に変態性欲者であつてはならないのである。夫婦は本来の夫婦生活の楽しみの外に更にも一つ別の楽しみを有つというところに意義があるのであつて、これこそ夫婦ならではの味わえないものであることを必要条件とするのである。

### 三

私にとって必要な妻の性格は以上のような条件であつて現在の妻は、この条件に合っている。

では、容姿についてはどうであろうか、

顔貌Ⅱ容色はできるだけ美しい女性であることは言を俟たない。

このことは一般の夫婦生活に於てもそうであるが、私達のようにプレイ——特に縛り遊びの場合、女性をサド側にしてもマゾ側にしても器量の良いことは何倍か楽しさを増すもので、とりわけ女性を縛った場合、その悦虐美に恍惚とすることができ。

若し不器量な女性を縛った場合、どうも芸術的な美しさよりもグロテスクなものを感じてしまう。尤も生来の変態性格者であれば醜女に対して一層エキサイトされることも考えられる。変態的傾向の人は女性に猿轡を掛けるにも汚れたものを使うことに意識を見出すようである。私の場合は夫婦の健全な楽しみとしての責めであるから、悦虐美ないし恍惚美がなければならぬ。この意味で妻は美しくなければならぬ。

皮膚Ⅱ肌は白いにこしたことはない。しかし肌の白い女性は「白

きはやわし」のようにともすれば弱く、また傷つき易く、強い縛りに向かないことがある。また縄目が長く肌に残って消えにくいという難点がある。夫婦だけの秘密であるから人に見られたくないものである。

肉付Ⅱ太つていて縄が肌に喰込む程のを好む人もいるが、太っている女性は身体があまり自由にならない。女性を後手に縛る場合、腕があまり上がらない。緊縛美を楽しむには後手にした手首が肘よりも高くなければ形がつかない。太った女性は後手にすると肩甲骨の肉が邪魔して手首が肘よりも下か、せいぜい同位置ぐらいにしかならない。

緊縛美を楽しむためには中肉である方がよい。そして色々なポーズをとらすのには舞踊などを習っているような女性であると猶更よろしいわけである。

身長Ⅱ夫婦が生活をエンジョイするために行う責めは、妻を縛ることが多いようだが、妻の被虐美だけを毎回楽しんでいると妻は程なくマゾ性が強く誘発されて本質的に被虐を好むようになる。それでは欠点も出てきて夫婦の健全な刺激とかけ離れてしまう。

被縛の楽しさを体得する課程には、妻にも必ず夫を縛ってみたいと希むことが屢々あるものである。この場合、夫がマゾ的性格の持主なら、その妻が偉大な体格を有っていることがのぞましいかも知れないし、また妻が乗馬服を着たり、動物調教師のような服装や態度を欲するのであるが、私の場合は一般夫婦の愛情の強化と永続を計るための手段であるから、その場の気持と話合でどちらかが縛ったり縛られたりするもので、それには五尺二寸（一五八センチ弱）位までが好ましいのである。



体毛は人によって好み異なるが、私は美的見地から、妻の緊縛された姿を対象とするので、私は私なりに条件がうるさいのだ。

一体、体毛というものを医学的にみると、頭髮は女性ホルモンの作用であり、眉毛は男性ホルモン、睫毛は女性ホルモン、腋毛は男性ホルモンの作用の左右される。



性毛は、男性は男性ホルモン、女性は女性ホルモンによって、男性は三角形の頂点を上に、女性は逆三角形に生えて頂点を下に向けている。

人は男女ともに夫々男女両性のホルモンを生成し、必要な器官に作用させているわけである。

如何なる美女美男といえども、このホルモン作用が理想的バランスを保っているということは有り得ないので、この面から変化があり、更に遺伝とか或る種の刺激とかが更にからんで幾変化し個性美を現出しているわけである。そこで、私の好みを云えば、頭髮は細く、柔かく、数の多いものがよい。腋毛は濃いのを好まない、できれば除毛して欲しい、少くとも加工ぐらいして欲しい。女性ホルモンの理想的配分から考えると、女性の場合、上肢下肢の所謂ムダ毛とか腋毛などは消え去る筈のものであろう。

性毛について云えば、日本人が有色人種であるところから体毛が黒味を帯びているが、女性の美的形態と男性を魅了する印象を与える力が極めて強い。

私の一方的考えかも知れないが、多



くの夫婦は本質的性格異常ではなしに極めて健康な状態に於て、夫婦の秘密として色々な責め遊びをしているのではなからうか。従つて私同様グロテスクな感じを嫌うのが本質であらうと思う。

次に女体の要処を緊縛美という観点から云えば、乳房であるが、乳房全体はあまり大きくなく、半球形でやや堅く締つたのがよい。あまり偉大な乳房はむしろグロテスクなものである。有名なオッパイ小僧のような乳房は異様なもので私の場合、美を感じない。また乳頭は色薄く小さいのを好む、臍は円く小さくあつて欲しい。

#### 四

私は以上のような条件を妻とする女性に求めたいとねがった。しかしこれは全部を希つたところで可能であるとは思われない、そこで、大体こんなところで妥協することにした。

中肉中背、肉の堅締りした、肌色は小麦色程度でよし、性格の單純な女性というわけである。教育程度はあまり高いと女性の場合ではプレイとして体得するよりも批判したり、罪惡視することが多くて誘導しにくいことがあるので、せいぜい高校卒程度を可とするのである。

有名なキンゼイの報告をみても判るように世界的に男性は教養の高い者ほど夫婦生活に於けるテクニクが上手であるし、また熱心でもあるということになっている。

ここで注意しなければならないことは、女性を誘導する場合、彼女が完全にプレイを理解し、それを悦ぶまで男性が努力しなければならいことである。何故ならば、若しプレイが途中で放棄された場合、女性は縛りの妙味を知らずに単に責められる苦痛を感じ冷感症

になったりヒステリー症になったりすることがあるからである。プレイとしての縛りの妙味を覚えた女性は、絶えずこれを要求し而も益々緊縛することに最高の悦びを感じるようになるものである。

そうなったとき女性が妻であり、そして誘導が巧みに軌道に乗つたとき、その妻は夫をも緊縛したいと要求するようになるもので、こうなれば夫婦は最も愛情深く結ばれ、これまでなかった悦びの生活を得ることが出来るのである。

私は多少の経済的余裕と時間を以て第二の妻を求めるべく動いた。

妻を探すといつたところで、的なしに歩いても仕方がないので当然の行き方として各地に旅行して花柳界に手っ取り早く道を求めた。

温泉地の旅館に女性を呼び数日間、その女性を買切つて体験によつて私の条件を勘案したがなかなか当嵌る女性がいなかった。

Y温泉に行ったときである。その地の芸妓静香という女性をY館に呼んだ。少し縛りについての話をするとうかがうと瞳が輝き呼吸が荒くなるのを見た、彼女は一寸席を外してやがて現れると手に風呂敷包を持って私の前に座った。風呂敷包を開けて出したのは細引とビニールの紐である。

彼女は私に云つた『いまお風呂にお入りになるなら、このビニールの紐であたしを緊く縛つて連れて行って頂戴。寝るときはこの細引で縛つてね』静香の要求は頗る強硬なものである。

私は『よし、ネを上げるなよ』と云い乍ら衣服を剥いだ。静香の身体をみるとアチコチに微かながら縄目らしいものの跡がある。だ



からこそ私の一寸した話に強く反応したわけなのだと判った。静香は私に背を向けて座ったので私は彼女の左手を後に廻しビニールの紐を手首に二回巻きつけ更に右手を重ねて二巻きし、両手首を上思い切り上げて二本のビニールをすぐ両腋の下を通して前から両肩にかけて後に送り、右肩の紐を左手首と腋下に通した紐に引掛けて右に引き、左肩の紐を右手首の紐に掛けて左に引いた。それから両方の紐を彼女の両腕に巻いて前に廻し乳房の上側で中央のところで一ひねりして更に後に廻して手首の上で片花輪に結んだ。ビニール紐は、その構造が管になっていて普通の紐のようにコマに結ぶと解くときに骨が折れるので注意しなければならない。それだけで既に彼女は上気して『あなた、縛りお上手ね、たまらないわ』と何とも悩まし気である。私は浴衣を彼女に着せ、そのまま廊下を通り貸切り風呂に入って中から鍵をした。

静香は完全にマゾヒストであった。朝六時、私は目を覚めた。彼女は細引で全身をひしひしと縛られたまま眼を開け、何か物言いたげであった。『さあ解いてやろう、痛かったらう』『いいの、素敵だわ、貴方縛るの、お上手ね』という。細引を解いてやるとクッキリと跡が肌に喰入っている。『さあ湯に入っておいで、跡が消えるから』静香は嬉しそうに出ていった。置き去られた紐をみて私は考えた。

此の女は既にマゾになっていて、これでは私がサディストでないかぎり私が楽しむわけにいかない。彼女は商売柄、客からの要求で何回か縛られているうち被縛の味だけを知ってしまったものである。これでは私の条件に合わない。私は面白い女とは思ったが深入りすることをやめた。

## 五

昭和三十二年の晩秋であった。私は或る仕事のことが高知県の最南部のN市に行った。

私は例に依ってK旅館にM子を呼んだ。彼女は流行っ妓で私の室に來たのは夜半二時頃であった。二十二才、五尺一寸五分、十四貫、やや太った感じの、美しい妓である。私はこのM子を連日呼んだ。既に私に湯上りの肌を見せるだけの親しみと信頼を示していた。単純な性格、我儘なだけに純情でもある。而も彼女はアブノーマル・ゲシュレヒト・リーベに關して全くの白紙である。更に私の条件であるところの体毛の少ない女性であり、乳房も堅くて丸く、身体全体が欧米人型である。

私はM子がすっかり気に入った。この時は十日程で私は再会を約して帰京した。M子は三日目毎に速達で手紙を寄こした。勿論、私もこれに応じた。二人の年齢差は一向気にならなかった。以後、私は毎月十日から半月ぐらいN市に滞在した。約半年程で私はM子を伴って帰京した。彼女こそ現在の私の妻である。

私は幸運にも私の創り出した条件に合う妻を得たのだ、慎重に楽しい夫婦生活の軌道に誘導しなければならない。

私は妻の精神的、肉体的な面を分析し、また彼女の生理的な諸現象を詳細に調査した。

私は彼女を完全に脱皮させ新しい女にするための方法を考え、そして確信を得た。

私は彼女の性感帯が殆んど眠っていることを知った。それは彼女が愛情を以て対等に性の楽しみを与えられなかったことに起因する





ことが判った。先ずそのことから始めなければならない。

一体、女性の性感帯というものは個々の女性によって異なるものである。ある女性に強く反応を与える場所も他の女性では感じないということが相当あるものである。従って、対象とする女性については細かく、験してみなければならぬ。私の計画した誘導への課程は正常な軌道にあるわけだ。私は労力を少しも惜まないし否楽しみでさえあるのだ。

いよいよ私は縛り遊びの楽しさを教えなければならない。どういう具合に誘導しようかと相当考た末、妻の生理的な精神変化にうまく結合させて極く自然に身につけさせるのが一番よい方法だと思った。

妻の自然に発する性的欲求を観察した。そしてその最も強く欲求する時期を数ヵ月に亘って調べた上でその期日を知った。

## 六

女性の性的欲求の高低を曲線で示したグラフが、有名人に依って発表されていることは誰もが御承知のことと思うが、たとえばマリイ・ストープス女史とかヴァンデ・ヴェルデ氏というような欧米人の調査は月経期間中にも強く欲求されるような形になっているが、これは欧米人が一般に女性の月経を単に生理的な現象の一つに過ぎないとしているからである。しかし、日本人は女性の月経というものに一種の嫌忌を感じ、殆どどの夫婦では此の期間中を避けているというのが現実である。従って一般に発表されている性欲曲線は、あま



り当てにならないもので、最も確実なものは自分の妻について各人が実際に観察することである。大体に於て、一般の女性はその周期と周期とのほぼ中間あたりが最も高いカーブを示すものである。

私の妻に対する観察でも大体、中間期が一番強く、次いで排卵期間、それから月経前の数日ということが判った。

私は妻の昂揚期を狙って先ず私自身の経験を語ることにした。

被縛の苦痛が如何に楽しさに変ったか、また女を縛ると如何に彼女は美しくなるか。この遊びによってその味を知ったら他に比類するものがないということを理解させることにした。

妻はやがて恍惚として両眼を閉じている。こうなれば妻は私の話を恍惚の世界に置換え、美しい背景を加え色々の小道具まで添え、夢幻の舞台の上で対手役を務めて呉れるであろう。

私は東京の山の手の一角に医師の家にたった一人の男子として生れた。父の医業はなかなか盛大であった。

父の家には書生が三人、ばあや一人、女中が三人それに母との暮しであった。

当時、医師という職業は上流社会の人として尊敬されていたのである。私は色白のお坊っちゃまとして育ってきた。

女中達は私のからだに興味を有っていたようだ。

仏典に依るとシャーキヤムニのシンボルに弟子達、特に女性たちが興味を有ったので、或る日シャカは殊更に見られるようにしたということがあると書かれているが、私の場合もこれに似たような事であった。また家のお抱え車夫の子を家に呼び寄せ、この子を縛って虐めたことも相当あるが、こういうことは他の機会に話すことにしよう。

私は小学校三年のとき剣道を習いにやらされた。師は当時小野派一刀流近世の名人と云われた高野左三郎氏の高弟であった。このことは私の性格に強く反映している。

中学に入ったとき剣道は三級上という腕前であった。当時は剣道と柔道とどちらか一つが必修科目になっていた。私は学校では柔道部に入った。ここで私は稚子さんというものを実際に知ったのである。

私は上級生から可愛がられた。そしてこのことは級友に誇ることが出来たし大いに顔が売れたものだ。

或る日の放課後であった、柔道部の主将で私の後楯になっているMが、道場から部員を追出して私一人を残した。

彼は私を道場の真中に引っ張り出すと私を簡単に大外刈り一本に極めつけ押え込んだ。彼は微笑しながら『今日ほんとに君を弟にするからね』と囁いた。それから『この方が柔かいな』と独語して彼は自分の大分使い込んで細くなった黒帯で私の両手を後手縛りにし大分固く締めあげた。私はこの時実はホッとした気分であった。何かされるにしても抵抗不能の状態の方が自己を欺瞞することによって肯定することが出来るからである。

## 七

妻は不思議そうな顔を、恍惚の中から浮ばせて私の話を聞いていた。

『君が縛られていたら、もっと、もっと綺麗に見えるんだがなあ』  
『そうかしら、だったら私も、縛って貰おうかしら、だって、そんなことされてる女の人って、いるの?』



『何を云つてゐるんだ、今では縛りゲームといって立派にプレイになつてゐるんだ。それに女の縛られた姿は、昔から美しいとされてゐるだけだぜ』

私は軽くあしらつておいて、本棚から本誌の旧号を何冊か持つて戻つてきて、

『まあ、この写真でも見ようじゃないか』と云つて頁を開いた。

俯向いて眺めている妻は責めの悦慮に引込まれ

『いつかあなたは富士竜つてひとと仲良くなつて変つた遊びしてゐたつて話ね、あれ詳しく話してよ』

『いまそんな話はいいいじゃないか、どうだい縛つてやろうか』

『そうね、じゃあ今度の土曜日にするわ』

約束の土曜日は朝から私の胸は躍つてゐた。妻も何か上気している様である。

午後、私は飛ぶようにして帰宅した。五月の中旬で稍々汗ばむ程の気温である。

私は妻と一緒に買求めた絹麻の六分丸さの細引二本を出させた。

江戸時代、罪人に打つ縄は長さ四尋半だとのことなので、一本は二十七尺（約九メートル）他の一本は十五尺にしておいた。

絹麻はよく締つて具合よく、しかも手首とか腕とか或は胸などに強く当たつても割に肌を痛めない。また直経も六分位あると美的な感じが出せるし苦痛も少ない、紐があまり細いと外観よりも実感遙かに苦痛なものである。私達の緊縛はプレイなのであるから出来得るかぎり苦痛を弱めなければならぬのだ。

また緊縛プレイの重要な点は手際よく、速く縛ることである。被縛者がどんなに苦勞しても自分では絶対に解くことができないよう

に縛ることである。此等の条件を充さないと緊縛遊びは興味のお半を失ふことになるだろう。

この日、妻は始めて縛られるのであるから不安と期待とを有つてゐた。

『どうだい、始めてだから着衣ですか』

『いいえ、脱いでもいいわ、ホラ、あの写真みたいにね』妻は水色のネグリジェを脱いだ。

『さ、後を向いて手をこうして』と妻の手首を後で合せて綱を掛けた。

此の日は三十分間ぐらいずつ、休んでは縛り幾通りにも縛つた。

『どうだい？ 縛られ具合は』

『そうね、まだ夢中でよく判んないけど、いい気持ちいいよ。でも余り長く縛られたらまだ苦しいわ』

『じゃ高手小手縛りをやってみよう、素晴らしいぞ』

妻を一段と緊く縛つて後手首で結んだ綱を二の腕にきりきりと締めつけた。妻は『ああア』という声を出した。そして眼を閉じたまま頷いた。緊縛された妻は普段よりも遙かに可憐で可愛いく見えた。私の妻もどうやら被縛の楽しさを身につけたようだ。

妻は生理日を迎えたときに私に云つた。

『今日はあなたを縛りたいの、思い切りいじめてあげるわ』

そうだ、これで妻は完全に第二の悦びを有つたことが出来たのだ。私は妻の縛りを受けてうっとりとした。

『ねえ、あなた。こんど野外縛りつてのをしないこと？』

『うん、やってみよう、ちょっとしたスリルだね』

『ええ、場所を探してね』



いまでは私達夫婦はお互に縛り合う悦びを有つことになった。私達は決して緊縛プレイ以外の鞭打ち等はしないことにしている。また縛り責めだけで充分楽しく元氣が出るのである。従って私は妻と楽しむ以外に何もいらぬし、妻も私との生活に満足しているのである。

妻は縄捌きも巧みになり、私を色々な型に縛るようになった、ま

た私が妻を緊縛する時間も長くなり前夜から朝まで、そのまま眠らせることもできるようになった。斯くして私達の健全な楽しみは二人を一層固く結付け疲れも知らずに生活をエンジョイしているのである。私の計画した誘導は、この様な課程を以て一応、完成されたのである。(この項終り)



## 海原にありて歌える

——誘拐された美少女の詩——

### 菅谷はるみ

芳彦さん

小さく畳んだハンカチーフが口一杯に詰め込まれ、白い布が私の頬を、くびれる程きつく縛ってるのよ。

赤いベレーを斜めにかぶった

あなたの 佐和子

こうして酷たらしい縛しめのまま、恋人から引き離されて、縄目の痛み、呼吸もできない苦しみと絶望の下、

三千ドルで売られてゆくのよ!

芳彦さん

苦痛と絶望と、怖ろしさに

私は気が遠くなりそうよ、

ほの暗い船倉に押し込められ、浚われて

ゆく同じ運命の人々、

そうよ

私のすぐ隣には——。

白いブラウスの丸襟をのぞかせ、小さなエプロンをつけたままのオレンジ色のワンピース、ローヒールに白手套、ナイロンストッキング、ショートカットの髪にオレンジ色のベレー帽、

上品な仕事着のままの高級喫茶のウェイ  
トレス山本みどりさんが

涙のあふれた眼を、うつろに見開いてる

その横は——

ピンクのスーツ、タイトスカートに大きなポケット、金ボタンのついた制服、同じピンクの制帽に白手套、純白のソックス、白短靴の帝都観光のバスガイド井田あき子さんよ

私の目の前は——

長い柔い髪に白いベレー、大きな眼、水晶のイヤリング、水玉のスカarf、水色のオーバーコート、すそから淡いグリーン、スカートを覗かせた白とチョコレートのコンビのパンプスの長身の女性、ラジオ新東洋の婦人プロデューサー野原かおるさんなの



懸賞「告白と手記と体験」入選

# 奇 妙 な 作 業

島

俊 太 郎  
寺 井 喜 一 画

病院の門をくぐる迄には、ほぼ一ヵ月もの

逡巡があった。患部が患部だけに、譬えそれが専門の医者であっても、小さな僕にはどうしても診察を受ける決心がつかなかった。それがとうとう出掛ける様になったのは、もうどうにも我慢し切れなくなってしまったからなのである。生理が不完全であるという事程、索莫たるものの無い事を僕はこの時始めて教えられた。生きてゆく自信と意慾を完全に喪失し、一日一日がまるで砂を噛む様に味気なくなってしまうていた。そして終に通ったあの病院での羞恥と苦痛、更にあの奇妙な悦楽境は僕の心の記録として、今尚秘密の儘

克明に印されている。

一昨年——八月十五日の事であった。僕は近所の広場を横切って、五、六十糎ばかり高くなった新道路へ、何気なくヒョイと跳び上った。すると運悪く履いていたサンダルが滑り、右足を道路に、左足を広場に残した儘、いわば股を開いた恰好で道路端に、思い切り無様にのびたのである。これ位の失策なら誰にも有り勝ちな事ではあるが、倒れた瞬間、僕は所もあらうに大事な所をセメントの角に容赦なく打ちつけてしまった。脳天をガンと撲られた様な強烈な眩暈を感じ、やっとの思いで立ち上り、取敢えず帰宅して調べてみ

ると、外傷は全然見当らなかったにも拘らず、下着類は鮮血にビッシリと染まりベタベタと肌にくっついていた。内出血が尿道を伝って無意識のうちに噴出していたのだ。それでも僕は医者に診て貰う気にはならなかった。便所に行く度、尿に混ってひどく出血した。と同時に、局部へ錐をもみ込む様な激痛を感じ、排尿の途中でその場に踞んでしまうのが常であった。用が済んでも二、三分は眼を閉じ、痛みの鎮まるのをじっと待たねばならなかった。

三日目に出血は完全に止まったが、痛みは依然、排尿毎に起った。出血が止まってやれ



やれと思う間もなく今度はその一帯がむくんで紫色に腫れ上り、歩く度に重苦しい鈍痛を感じた。五日目にはそれも引いてしまったが、困った事には尿意を催しても殆んど意に任せなくなってしまった事である。というのは、たまった尿が一気に出ないで、滴の様に少量ずつしたたり落ちるのだ。従ってその時間も正常な時の五六倍以上もかかってしまうのである。例えば映画に行つて、ニュースの題字の写ったのを見て便所に行き、用を済まして帰つてみるともうニュースが済んでしまつていた。たまった尿を、一気に排泄出来ないもどかしさ、不愉快さ、実に声をあげておらび度い程のやるせなさである。しかもその不自由な排尿の間中、針で突き刺す様な激痛が始終つきまとうのだ。内部に出来た傷に尿がしみる為であろう。恥かしがらず、直ぐに医者に診て貰えば良かったのだが、その内良くなるだろうと身勝手な判断をして、一日延ばしに延ばしていた。然し十日経つても二十日経つても症状は一向に好転しそうにもなかった。いやそれどころか、寧ろ次第次第に悪化する様に思われた。

一ヵ月目。僕は終に意を決して、市内で泌尿科を持つ唯一の病院S病院のいかめしい門

を恐る恐るくぐつたのである。勝手知らぬ薄暗い廊下を、患者達の好奇の眼に追われ乍らウロウロしている内、一番隅の暗がり、皮膚科・泌尿科・と扉の上に標札がブラ下っているのを発見した。見れば廊下のベンチに四、五人の患者が一樣に黙りこくつて順番のくるのをじっと待っていた。一応、初診である事を知らして置かねばと思いつつ、オドオドし乍らドアを開けると、室内の明るさに一瞬僕はドギマギしてしまつた。ドアの正面奥にテーブルを据え、廻転椅子にのけ反つてゐる三十七、八のデブプリ肥えた医者が科長である事が一目で分つた。僕が小声で事情を話すと、目を丸くしてフムフムと頷き乍ら聞いていた医者は、

「そりゃあ、君、ひどく尿道をやられてるね、尿道拡張作業をせんけりゃあいかんな。まあ一寸、外で待ってて下さい」

と言つて、しきりにカルテを書いてゐた。その時ドアを開けて右手にカルテをひらひらさせ乍ら、一人の看護婦が滑る様に入つて来た。ドアの傍で、すれ違いざまチラッと見ただけであつたが、僕より二つ、三つ年上の二十七、八のエキゾチックな彫りのある、どこか冷い感じのする女であつた。

——あの看護婦にも診られるのだろうか……？

そう思うと俄然、耐えに耐えていた羞恥の念が、まるで奔流の様に全身を渦巻きたぎるのを感じた。

——何故、泌尿科などにあんな美しい看護婦を置くのだろうか？

僕は無意味な憤りと不快の念を抱いた儘、四、五人の患者達に混り、黙りこくつて廊下のベンチに掛けていた。もうこの儘帰つてしまおうかとも思ったが、直ぐその後から、あの不愉快極まりない排尿を思い出し、その踏ん切りをつけかねて、ぐずぐずと躊躇し乍ら坐っていた。名前を呼ばれる度に患者が次々に出入りした。愈々僕の番である。僕は刻々と追いつめられてゆくもどかしさに独り大きな溜息を幾度かついた。

「島さん！」

反射的に僕は立上つた。それは僕にとって将に死の宣告にも等しかった。僕はそのまま戸外に逃げ出してしまひ度い衝動に駆られ乍ら、思い切つてドアを開け、頂垂れて中に入つた。

「どうぞ、こちらへ」

看護婦は治療室との仕切りの白いカーテン



の間から奥へ姿を消した。仕方なく僕もそのあとに従った。治療室には、向って右に水道、その横に、金属製の三脚台に洗面器が乗せられ、白濁色の消毒液がたつぷりと入れられてあった。丁度その上に棚があり、色々な薬品が行儀良く一列に並んでいた。正面は採光の為の硝子窓になり、その中央の柱の上方から棚の端に向って針金が渡され、それに細長い管状の器具類やタオルが掛けられていた。

「下着を取って治療台上って下さい」

そう言いながら看護婦は左手の隅を指さした。見ればそこには散髪屋で使用する様な、頑丈な高い椅子があり、その前面、丁度腿の当る部分に、黒いビニールで包んだ枕様のものが左右に夫々一つずつくっついていた。

——あの椅子に坐って枕の上に両腿を開いてもたせる……

僕は全身の血が一時にカーッと顔に集まるのを感じた。然し今更、子



供の様に逃げ出すわけにもいかなかった。

「ハッ」

僕は観念してズボンとステテコ、そして微かに震えながらパンツを脱ぐと、横に備えつけてあった竹籠の中に入れ、泣き出したい様な気持で恐る恐る治療台上った。

「脚を此の上ののせて！」

看護婦はモゾモゾしている僕の両脚を握ってグッと開いた。するとその反動で僕の身体はのけ反り、丁度、椅子に背中を凭す様になった。情ない恰好——羞恥の為に全身がワナワナと震えた。その眼の前にびっくりする程大きなライトが意地悪く覗いていた。

一体、尿道拡張作業とは、どんな事をするのだらう……？

不安と焦燥に襲われながら、チラッと看護婦の方を盗み視ると、彼女は硝子の浣腸器でしきりに濃紫色の液体を吸入しているところであった。

——浣腸？



「ハイ、済みましたよ、これ位で声を出しちゃ駄目、ほんのシビレ薬よ」

何かガチャガチャいわせていたが、ややあつて、右手に先の曲った金属棒をさげて、ゆつ

僕はもう、恥も外聞もなく、看護婦の手を  
はねのけんばかりに、身体をゆさぶって、も



がき苦しんだ。金属棒はギューギュー中に突っ込まれた。脳天がガンガン鳴り、次第に意識がぼやける様だった。

「いいだろう！」

デブの声と共に金属棒が垂直に立てられ、同時に痛みがスーッと引いてゆくを感じた。

「十分だな」

デブはそう云い残し、消毒液をジャブジャブいわせて、治療室から出て行った。僕は金属棒を突っ立てられた儘、見るも憐れな恰好で坐らされているのだった。

「その儘、動かないで！」

看護婦は、ガーゼで、顔や首筋の汗を丁寧に拭いて呉れた。

「十分間よ……」

と僕に言った時、「ノリちゃん！」と呼ぶデブの声が聞え、彼女はソソクサと出て行った。一人になってはじめて、僕はホーッと深い吐息をついた。一寸うつ向いてみると、すぐ目の前に金属棒の上部が見えた。とその時、僕はひどい尿意を感じはじめて狼狽した。変だなと思っている内、それが刻々と強くなってくる様だった。咄嗟に僕は、突っ込んだ棒の曲った先端が、「膀胱カツヤク筋」

を刺激しているのに気付いた。耐えようとあせればあせる程、それは一層強烈な刺激となつて、僕の全身を嵐の様にゆさぶりはじめた。僕はもう懸命になって、尿を洩らすまいとあせった。当然の生理現象に耐えねばならない苦痛！ それは呵責ない拷問の責苦にのた打つ罪人の、それと何等変る所が無い事を僕は知った。額からタラタラと脂汗が流れはじめ、次第々々に眼がかすみ、やがて、下顎がガクガクと小刻みに震えはじめ、身体が徐徐に冷えてゆく様だった。一刻々々が、生理に耐える必死の闘争であつた。

「マア！ センセ、今夜いらっしゃるの！ 嫌い！」

「ハハハ……」

看護婦とデブの呑気な会話が、地獄の底からの様に空ろに聞えて来た。大声で、「馬鹿野郎！」と叫んでやりたかった。僕には、もう耐え得る極限が来ていた。

「うう……うう……うう……」

僕は眼を天井の一角に引きつらし、絶え間なく微かに呻きはじめていた。と、コツコツと言う靴音と共に、右の方で白衣がゆれるのをボンヤリ感じた。

——もう、やめてえ！

僕は思い切り叫ぼうとしたが、大声を出せば、その拍子に尿を洩らしてしまう事は明らかである。

「ううう……ううう……ううう……」

やるせない呻き声をあげている時、金属棒が、ズルズルと引き抜かれた。すると、まるで嘘の様に、尿意がスーッと引いてしまった。極度の緊張の後に忘我の放心があつた。僕はガククリと首を頂垂れ、深呼吸をし乍ら眼を閉じた。最後迄頑張り通した悦びが、ひたひたと全身を満たした。

「よく辛抱出来たわね！」

突慥貪にそう言うのと、

「じゃあ、今日はこれでいいですよ」

と、看護婦はセカセカと器具を消毒しはじめた。僕はフラフラしながら治療台から降りると、急いで衣類をつけ、治療室を出た。

「次は三日置いて来給え！ ……あと少々出血するかも知れんよ」

そう言いながらデブは、壁に貼ったカレンダーを鉛筆の先でくっていたが、

「あ！ こりやあいかん、丁度日曜になるね」そこへ看護婦が出て来た。

「ノリちゃん！ 君、構わなかったら日曜に出て来てやってくんないか、島さんのは四日



と



目を丸くしてそう注意した。

「ハア……」

僕は生返事をして、逃げる様に廊下に出ると、薄暗がりの中で、始めて自分自身を取り戻した様な安心感が、しみじみとわいて来た。然し、デブのあの言葉を思い出すと、途端に憂うつにならざるを得なかった。

——放っとくとインポテになって、一生困るよ。

何という無情な言葉であつたらう！ それは癡人になると云う事なのだ。逡巡しながら、三日はまたたく内に過ぎた。

——運命の日、敢えて僕はそう呼ぶ。僕にとっては、決してそれは、大袈裟な表現ではないのだ！ 死にも勝る程の羞恥と苦痛の日なのだ。約束の間。僕は屠所に引かれる羊の様に、進まぬ足を引ずって、再び病院の門をくぐった。さしもの構内も閑散として、まるで人気はなかった。ガランとした、薄暗い廊下を、僕は空巢狙いででもあるかの様に、足音を忍ばせてオドオドと歩いた。

——どうか、あの看護婦が来ていませんよ

目が丁度、適当なんだ……三日では一寸無理だし……五日となると穴が又塞がっちゃう恐れがあるんだ。僕は里帰りなんだから……」

「ええ、なんとかしますわ」

と答えて、僕の方を見、

「じゃあ島さん、日曜の十時にいらっしゃって下さいね」

「ハア」

僕はそう答えたが、内心では、もう絶対に来るもんかと思っていた。

「島さん！ この儘だと、益々悪くなるかも知れんからなあ、君のは尿道が、極度に狭くなってるんだ……放っとくとインポテになって、一生困るよ」

デブは、まるで僕の気持を見透した様に、



うに……

僕は心の中で祈りつつけながら、泌尿科の前まで来た。

「島さん！」

突然、室内から例の張りのある声が、とび出して来た。

——しまった！

そう思った瞬間、

「ハ、ハイ」

僕は吃りながら答えていた。

「お待ちしていました、どうぞ！」

その声に応じ、恐る恐るドアを押して入ると、あの看護婦が、まるで支配人の様にデブの廻転椅子に座って、指の爪をつんでいるところであった。お叱りを受ける生徒の様に、僕が頂垂れて突っ立っていると、

「サア、始めましょう！ お脱ぎになって」

と促すのだった。僕は此の広い病院の片隅の一室で、たとえば、看護婦と患者の関係とはいえ、若く美しい女と二人きりでいる事に、重苦しい圧迫を感じた。と同時に、患者を看護婦だけに任せて置くデブ医の無責任さを、なじらずにはいられたかった。看護婦の後に従って、治療室に入った僕は、モゾモゾと下着類を脱ぎ、用意して来たハンカチをポケット

トから取り出し、オズオズと治療台に上って、脚を開いた。

「今日は私一人だから、暴れられると大変！一寸脚を縛るわ、我慢するのよ」

そう言う彼女、二本の短い革バンドを持って来て、僕の両脚を、ギョッと治療台の金具に縛りつけてしまった。僕は羞恥と不安の錯綜とした気持で、彼女のなすが儘になっ

ていなければならなかった。「カチッ」と云う音と共にライトがつけられた。

「今日は少し位、声を出してもいいのよ、誰もいないから」  
彼女は、シビレ薬を吸入しながらそう云うと、ククククと低く笑った。僕はムカッとした。途端にシビレ薬が、ズーズーと尿道を這うのを感じながら、僕は突然、身をよじらした。激痛が次第に強まっていった。

「あ……あ……うう……」

「動かないで！ 駄目じゃないの」

「あ……うう……うあ……」

僕は口をぱいに開け、椅子をゆすって低く呻き続けた。

「それ、それ……もう少しよ……辛抱して」  
彼女はまるで掛声でもかける様に、そんな事を言いながら、腹立たしい程、ゆっくり

ゆっくり注入するのだった。僕はもう目がくらみ、次第に思考の力を喪失してゆくようだった。と急に痛みがなくなったと思うと、例の洗濯バサミでカチンと先をしめ、

「今日は、この前のより大分大きな管よ、泣かないでね」  
彼女はそんな無情な予告をしながら、ガチャガチャと大仰に音をさせていたが、

「これよ」  
と云って、僕の眼前に、火箸大の丸さの金属棒を差し出し、クルクルと廻転させながら「辛抱出来て……？」

と唇に微かな冷笑を浮べた。僕は、棒を見せられた瞬間、もう完全にうちのめされていた。確かにそれは大き過ぎるのだ。洗濯バサミを外した彼女は、その大きな金属棒を、ギョッ、ギョッと段階式に突っ込みはじめた。その痛さ激痛に、クラクラッと視界が暗み、暗黒の底へ、キリキリ舞いながら落下してゆくのだ。あばれても、もがいても、両脚は革バンドの為、ビクともしなかった。

「つつ……ああ……あ……ヒエッ……」  
「しっかり、しっかり、痛い、痛いわね」  
ギョッ、ギョッ、まるで不規則な方向に、容赦なく突っ込むのだ。尿道の傷を、極度に



刺激しているとしか考えられなかった。

「く……うう……あ、あ、もう……もうやめてえ！」

終に僕は泣きながら叫んだ。

「よしよし、泣いちゃ駄目、泣いちゃ駄目、ほらほら、もう少しよ！」

ギョッ、ギョッ、

「あ……うわ……ああ！」

「それぞれ、もう泣かないの、ね」

ギョッ、ギョッ、

「やめて！ やめてえ！」

「ほらほら、もう済んだのよ」

彼女がそう云ったかと思うと、流石の痛みも、潮の引く様にスーッと引いた。然し、それに続いて、以前にもまして、ひどい尿意が襲って来た。僕はギリギリと歯を噛み鳴らした。

「ひどい汗、可哀想に、ハンカチ借してごらん」

然し僕は、唯、猛烈な勢でこみ上げてくる尿意を、懸命に耐えるだけであった。美しい看護婦の目の前で、これ以上、恥かしい思いを繰返したくはなかった。前に、最後迄頑張ったのだから、今度も我慢出来ない事は無い筈だ。しかし……しかし……その決意が

時と共に、次第にぐらつきはじめた。汗がヒ

リヒリと眼にしみ、思考が、かすかに薄れはじめていた。看護婦は真正面の硝子戸に凭れ

て腕を組み、歌の調子でもとる様に、靴先でコツコツと床を踏んでいた。その音を聞きながら、僕は眼を閉じ、呼吸さえ殺して耐えずけた。

「あと三分！ 辛抱して！」

しんかんとした静けさの中で、看護婦の射す様な冷たい眼を全身に感じながら、僕はまるで、呵責ないお仕置を受ける奴隷そのままであった。哀願したところでどうなるう、いや、とてもそんな事は僕には出来ない事であった。最後迄頑張るのだ！ 最後迄！

「うう……うう……」

全身がピクピクと痙攣し、次第に身体が冷えはじめた。下顎が震えながら、無意識の内に前へ出る様だった。

「あと二分！」

僕の意志の力は、もう人間の耐え得る極限すれすれにまで来ていた。看護婦は、尚も腕組みをしたまま、その一部始終を冷然と凝視している様だった。僕は、あられもない振動を阻止しようとあせった。然し、その力ももうゴムの様に、ぐんなりとなっていた。

「あと一分！」

甲高い声が部屋に響いた。

「ううう……うう……ううう……」

傷ついた野獣の様に、僕は呻きつづけた。

金属棒は十握もの距離を、絶えず往復しつづけていた。

「無闇に動かさないで！」

そう言うとき彼女は腕組みをとき、激しく揺れている金属棒を、上方より静かに押えつけた。

「あ！」

瞬間、微かな悲鳴と共に、ああ、とうとう僕は尿を洩らしてしまったのだ。

——恥かしい！

そう思って眼を閉じると、あとからあとから、尿は僕の意志に反して、しまり気もなく、チヨロチヨロチヨロチヨロと流れ始めたのだった。と同時に、一体どうしたと云うのだらう、僕は痺れる様な法悦の中に、次第に自分自身を失ってゆくのだった。例えば、銀色に輝やく無限世界を、甘美な微風に身を委ねフワリフワリと浮いている様な陶醉境……

——このままで……このままで……

僕はうっとり眼を細め、そう願いつづけていた。徐々に排尿は止まっていった。する



と彼女は、押えつけていた金属棒を、今度は、ゆるり、ゆるりと静かに廻転しはじめたのだ。

「アア……」

僕は思わず溜息を洩らしてしまった。尿は再び、チヨロチヨロと流れた。

「時間よ、置きましようね」

彼女の声を空ろに聞きながら、僕は悦楽境の中彷徨していた。

「駄目！ お行儀悪いのね！ フフフ……マ

ア！ 椅子がビシヨビシヨよ」

囁やく様にそう言いながら、ズルズルと金

人々は秋になると野山へハイキングに出

掛けてゆく。私は有名は灸院へ行く。たまらない熱さを求めて。人が聞いたら馬鹿げた話だときっと思うに違いない。大して悪い個所もないのに只熱さを求めて、そしてその後に残るなんとも言い様のない気持。

それは灸マニヤでなくては理解できない境地だと思っている。考えれば自分の生身の肌を焼かれて喜ぶのだから、ヘンと云えばヘンである。しかし直接の刺戟が強いだけに喜びも又大きい。鞭打ちもそして浣腸も経験したが、自分には灸責めが最も適して

属棒を引抜いた。途端に、チカチカッと刺す様な痛みを感じて、僕は霧の晴れる様に陶醉から醒めた。同時に、泣き出したい様な羞恥が、全身を這いはじめた。彼女は脚のバンドを次々に外すと、

「一寸待ってね……フフ……赤ちゃんみたい汚しちゃったから……」

ガーゼを一つかみ持って来た。

「ハイ！ 一寸お臀をすかして……今日は特別よ！」

と云うと、僕の右足をグーッと押し上げ、あちこちを手際良く拭きとって呉れた。僕は

いるらしい。

最初は婦人のお灸をすえられている姿を見てから灸マニヤになったのだが、いつの間にか自分の体に灸をすえて貰うようになった。今では灸による熱さに苦しむ境地は自分にとっては全く恍惚の境といってよい。

或る時、浅草に遊びに行ったついでに吾妻橋にある弘法灸の入口を歩いていたら、丁度二十五六才位の婦人が二人、門の中へ入ってゆくのを見たので、その後が続いて中へ入ってしまった。一人は飲み屋の女中風で他の一人もなんとなく商売女の様であった。入口で

唯、黙って彼女のなすままになっているより外に仕方が無かった。彼女の手から、やっと解放された僕は、滅茶苦茶に犯された後の様に、取り返しのつかない羞恥と、肌寒い悲哀を感じて、ソソクサと衣類を着けた。

カチンと言うライトを消す音を聞きながら、僕は逃げる様にドアを押した。

「三日したら、又いらっしゃい！」

甲高い声が、背後から蛇の様にくるくると、首筋に巻きついた。

(おわり)

札を貰って玄関に入ってきたき、十二帖ぐらの控えの間に上る。隣の部屋を見ると田舎風のジイさんとバアさん、それに中年の夫婦者が窓際に渡してある棒を握って熱さに耐えながら背中と腰から艾の煙をあげている。その後で線香を持ったまだ若い女性が無表情で艾を丸めて火をつけている。

そんな情景をチラリと見ながら、ゆっくり洋服をぬいで籠の中へ入れる。

先の女性が上半身肌ぬぎとなり乳房を両手でかくすようにして隣室の祭壇の前に座して待っている。坊主の前へ行って背中を



向ける。目早く女の背中を見ると、一人はすでに背中に弘法の大きな灸の跡があり、そして驚いたことには、片腕には素人が彫ったのか牡丹の花の刺青があり、私の目を見はらせた。他の一人は初めてなのか、先の女にせき立てられていった。一人宛坊主の前に

座って病氣の様子を言いつて印をつけて貰ってから窓際へ行くと、若い女の人が艾をのつけて火をつけてゆく。

丁度、初めての婦人の横になったので、横目で様子を見ると、スカートを下におろして腰に二カ所、艾をのつけて火をつけるところだった。艾が音をたてて燃えてくる。だんだん熱くなってきたのか恥も外聞も忘れて、目の前の棒をしっかりと強く握りしめ、

「うーん、あつ、あゝあ、あつ……」  
と思わず声を出す。それに誘われたかのように、隣でも

「姉ちゃん、あつ、熱い、あつい！」  
と、うめくと

〔告 白〕

## お灸と私

保 田

徹

「初っちゃん我慢して、あとがいいから」

とはげましている。終ってから洋服を着ながら様子を見てみると、涙さえうかべながら

「お灸って、ほんとうに熱いのねえ、まるで  
お仕置にあっているみたいだわ」

「これに懲りて、これから、あんまり馬鹿飲みをしないことね」

「でも、後がぼかぼかしていい気持だわ」  
等と話しあっていた。

灸の嫌いな人なら、飲み薬でも注射でもしてなおすことが出来るのだから、やはりお灸をすすめる人の心の中には、自分で気がつかないながらも、若干マゾ的な気分がひそんでいるのではなからうか。

前にも誰かが書いていたように、こんな美

しい近代的な人がと思うような若い女性に灸院の中で時々あうことがある。ある夏のことが、バスの中で立っていると、二号さんタイプの二十七八才位の和服姿の後姿が目の前にあり、うしろに大きく抜いた襟元を美しいなあと見ると、大きな灸の跡が背中の上の方にある。バスの揺れるたびに見えかくれるのだ。

灸院ですえたのか、又は主人にすえられたのか、さぞあの美しい顔が熱さのためにひいひい喘いだことだろうと想像すると俄然たのしくなってきた。

婦人とお灸の跡、私にとってはこれ以上のショックなことはない。お灸という言葉だけを聞くだけで心がうずく。全くこんな私こそ灸マニアというのだろう。他にもこんな思いを抱く人がいるだろうか。

こんな広い世の中だから、きっと私と同じように「婦人のお灸」について強い関心を持たれる方がおられるだろうと思う。私はそういう同志の出現を待っている。



ある無惨画絵師の生涯

## 『火 あ ぶ り 女 房』

緑 猛 比 古

## 遊 女 の 図

遊里の白屋は、生気に乏しいもの憂さと、けだるい静けさに包まれて、置忘れられたように味けない。

島原の花扇の二階で、京の画家戸波氣仙は、床柱によりかかつて、昨日この眼でじかに見た、三条河原の、あの血腥ぐさい拷問と、斬首を胸の内反芻していた。

片隅では、夜明け迄枕を共にした花魁の薄雲が、鬚を乱した儘十五、六の禿を相手に、所在なげに三味線の爪ひきをしていた。

薄雲は、くるわ言葉をつかわない女であった。勝ち気で、カンが鋭く、花魁にふさわしくない鉄火な意気があった。やや、つり気味のまなじりに陰があったが、その美貌は島原でも極立っていた。そ

して、氣仙の画の理解者でもあった。

「あらッ、太夫さん、そのお手はどうおしやしたえ——」

禿はフト、三味をひく薄雲の手首を不審げに見つめて、無邪気に訊ねた。

氣仙はハッと我に帰った。夜明け迄、海老責めに縛り上げておいた薄雲の手首に、鮮やかに残る縄目の跡を、今はすっかり忘れていたのであった。

薄雲の朱唇が、微かにわなないた。

「ホホホ、何だね。妙な事を気にして……これはね、旦那様が昨夜、わたしの伽がお気に召さず、腹をお立てになって、きつい折檻をなさったの——。お前もお客さまを大事にせぬと、こんなひどい眼に逢いますぞえ」



「おお、こわやこわや——。恐ろしいきーさんでありんすこと——」  
 気仙は苦笑いして、足許の画帳をとり上げた。昨夜、亥の刻をきいて起きた気仙は、かねての約束通り、湯文字一枚になった薄雲



を、燃える様なしごきや、腰紐で、犇々と海老責に縛り上げた。櫛あとも美しい女の立兵庫の髷は無惨に崩れ、金色に光る前差し、後差しのかんざしは夜具に乱れ落ちた。緋縮緬の総絞りの湯文字の襟

もとは肩をすべって崩れ、胸許までのぞかせた白い肌をくねらせて、乱れ髪のがが組み合せて鹿の子のしごきで縛った両脚に垂れ下り、物狂ほしい妖艶さを撒き散らしていた。遅れ毛を朱唇にくわえ、薄雲は苦悶の形相に次第に変わっていった。

さらさらと絵筆を運ぶ気仙の画帳に、花魁の責めの形相が刻明に写されて行った。

一刻——。気仙は凄まじい女の視線を痛い程感じた。

「薄雲——」

「あい」

「辛抱出来るか、今ひととき——」

「む、むねがく、くるしい」

既に薄雲の顔色は白く変わり、脂汗がにじみ出て、額を頬を濡らしていた。

解いては縛り、再び解いて、更に縛り、こうして海老責めは鶏鳴の頃迄、飽くことなく続けられた。気仙は遊里の拷問や責めを思う様描いて見たかったのである。

江戸の吉原、京の島原、大阪の新町など、遊廓の一隅に息づく娼妓たちは、いわば奴隸



にも等しいものであった。

遊客の機嫌とりを強制し、粗食虐遇に甘んじさせ、若し不平をいったり、氣儘な行動をとったものには当然のこと乍ら、苛酷な私刑を加えていた。

縮緬を捕縄にするやり手婆

うぬはまあまあと遣手は縛り上げ

くたばるほどやしなと遣手いい

など、当時の川柳にもよまれている如く、抱え女への私刑は残酷極まるものであった。

遊女が苛酷な仕打ちに堪えかねて脱走したり、情夫と駈落したのを運悪く見つかったりした時は、その仕置も一入深刻で、『風俗見聞集』によると

「この時の仕置は別して強く、竹篋で絶え入る迄打擲し、又は丸裸にして猿轡を嵌め、五体を四つ手に縛り上げて、梁に吊して弓折れで打ち、時には寒中でも着物をきせず柱にくくりつけて数日食を断ち、水を浴びせるなど、鬼の輩の如き連中に責苦にあう。水湿る時は芋縄縮みてその苦しみ絶えん方なし」と云った状態であった。

花魁、新造、禿の別なく、一旦脱走した者は一様にこうした地獄の責苦にさいまれていたのだ。

この私刑は京の島原でも当然の如く行われ、それがいつしか不文律になって、幕吏も黙認の形であった。

戸波氣仙は敢然とその社会悪に挑み、これを画にした。既に薄雲をモデルとして、吊り責め、ローソク責め、雪責め、水責め、そして最後の一枚、海老責めを一連の作品として、是に『遊女折檻の

図』と題して、京童の異常な心理をゆさぶろうとしていた。

その最後の一枚が遂に暁方完成した。

数刻の責苦で、心身共に困憊した薄雲を相手として、齡四十路を越えた氣仙ではあったが、廓に暮す女の、骨のずい迄しやぶり尽す勢いを失わなかった。

明け烏が二声、三声、静まを破って東に飛んだ――。

### 斬首の図

三条河原は既に潔められていた。斬首と拷問の態が脳裡から消え去らず、氣仙は引き止める薄雲を後に「花扇」を出た。懷ろにした『遊女折檻の図』が完成した今は、彼の頭は早や次の画題で一杯であった。

数日來の雨で、水嵩の増した加茂川には鮒やもろこが群をなして、水面を見えかくれていた。

頭上を舞うとんびの、青空へ吸い込まれるような啼声が、昨日の残酷な処刑も嘘のようで、秋空が、一片の雲もとどめず遠く澄み渡り、冷んやりとした風が静かに吹きわたっている。

氣仙は瞑目して、心を静め、昨日の残酷な処刑の様子を臉に浮べた。

承応元年の五月、幕府は懸賞して、耶蘇宗徒搜捕の令を出した。人は人を疑い、戦々競々の時期が過ぎた――。

四代將軍家綱が三代家光から家督をついだ事始めが、これであった。

前年の慶安四年、由井正雪の乱があつて以来、幕府も一入敏感になっていた。



罪有るも罪無きも一様に耶蘇宗徒の名で牢につながれ、彼等に課せられる拷問の数々が、いつしか都の噂にものぼった。

そして、断罪が下り、彼等の斬首を、氣仙は三条河原で眼の辺りに見ることが出来たのである。

京情緒のあらわれのようにいわれるこの加茂の清流に、三条河原を舞台として、権勢の相剋に散っていった数多の人々の、恨みにみちて血汐がよどんでいた。

殺生関白の妻妾、子供三十余人も遠い昔、この河原に地獄図絵をくりひろげたのだった。

人の世の、有為転変を見守る三条大橋を、五つ刻——。牢屋裏門から、京の刑場にむかう引廻しの一団が渡り始めた。先頭は六尺棒をもった非人二人。次の非人は検札をかかっていた。

刑場の周りは青竹の矢来をめぐらして、衆人にこれを目撃させようとしていた。耶蘇への憎しみが、その日引き出された囚人十五人を殊更に残酷に扱うよう命じられていた。

氣仙の後ろには版元の泉屋が附添って、刑場の異常な雰囲気酔ったようになっていた。

「ねえ氣仙の旦那、拷問は物凄いいという話じゃございませんか。青竹でバシバシ叩かれてあれは痛いやろと思うのはこちらの考えで、叩き責めなど、拷問のうちでもいちばん優しい方だといひませ。責め道具は恐ろしいという話です。石を抱かせるにも、ニヨキニヨキ先の尖った板の上へ坐らせ、それから、手と足をひくくくって、カチカチ山の狸みたいに、天井へつるされるそうです。車がろくろ仕掛で、ギリギリと縄で手足を逆に引き伸ばすそうで——、耶蘇であつてもものうても、一ぺんうらまれたら、もうおしまいです。逆さ

責め、眠り責、くすぐり責め……。なんにもしていなくても、白状して、出鱈目でも嘘でも、皆んな喋べって、早よラクになりたいそうです。そうするとね。なんにもしていなくても、今日みたいに、この三条河原で首斬られる。こら、もう無茶どすなあ——」

泉屋は調子にのってペラペラと喋りまくった。まるでうなされてでもいるように——。

耶蘇に対する苛酷な処刑の時がきた。氣仙の眼はらんらんと輝き、心に絵筆をしっかりと握りしめるように、ぐっと両のこぶしに力をこめた。

刑場に米俵が運び込まれた。老若男女十五人のうち、男九人だけが、不浄縄で改めて両脚を縛られ、荷物でもつめ込むように俵に押し込まれて首だけを出させた。観衆の中から異常などよめきが汐騒のように湧き上った。

女達には、「きり」「し」「たん」の三箇の火中で烙いた鉄印が、皮肉の焦げる悪臭を撒きちらして、顔やだけた胸、乳房に烙印された。更に右手首に藁縄を巻きつけて、片手だけで、柱に吊り下げられた。

形通り改悔の情、ありやなしやを訊ね、なしと見るや、片っ端から右手首をすぱりすぱりと斬り落していった。

血風は腥ぐさく河原にみち、堪え難い苦痛にあられない醜態を演じる女達を、一人一人、掘った穴の淵まで引曳っていった。次から次へと首を斬っていった。

片方、俵につめられた男達は、山と積んだ薪木の上に俵を並べ、めらめらと火焰の熱が、既に男達の首から俵へと、劫火はごうごうと燃え狂っていた。



顔面蒼白の者、眼を蔽う者、悲鳴をあげる者の群衆の中に、気仙は冷然と顔色すら変えず、この世のものとも思われぬ地獄図を深く深く心に刻み込んでいた。いつしかいたたまれなくなつて泉屋も姿を消し、人肉の焦げる臭いにこらえかねて、バラバラと散つていった群衆に振向きもせず、憑かれたように、充血した臉をカッと見開いて、気仙は遂に最後まで佇立していた。

同日、大阪城内の馬場と、堺七道の濠の側でも耶蘇宗徒は一様に惨殺されていた。

四肢は縮まり、心臓を凍らせて、死神に憑かれた幽鬼の如き姿で、気仙は島原の「花扇」へ辿りついた。遣手婆や禿の不審と驚きの中を、ものも云わず、彼は薄雲の部屋に通ると、始めて生気が徐々に蘇ったのだった。

気仙は静かに臉を開いた。加茂の流れは激しく、秋の空は何事もなかったように抜ける程青かった。それでも気仙は長い佇立のうちに、ありありと昨日の血の匂いを嗅ぎとった。

——僕は書いてやる。斬首が、如何に血腥ぐさく、残酷であるかを、僕は一連の五枚もので書くのだ——。

凡そ乱雑きわまる画室に閉じ籠り、気仙は縞紬の小袖の胸をはだ



け、女房、門弟を一切寄せつけず、三日間、寝食を忘れ、懸命に描きまくった。身をのり出した気仙の表情は必死の形相だった。

三日目の夜——、始めて気仙の顔に、残忍な満足の色が流れた。

「ふーむ、我乍らよく描けたわ……」

斬首される瞬間の、男や若い女の恐怖にひきつった顔が、生ある者の如く、気仙をにらんでいた。耶蘇宗徒の処刑とは記していなく



ても、当時の人々は、間もなく泉屋から発刊された『斬首の図』の五連ものを眺めて、直ちに、あの日の残酷な処刑を思い浮べ、今更の如くおぞましくちり毛たつのであった。

## 閼 蛇 の 図

鶏娘、丹波の怪獸、オランダ眼鏡、蛇使い、熊娘、それつけなどの小屋掛けで、太秦の広隆寺の牛まつりは雑沓をきわめていた。

十月十二日の夜――。

摩多羅神に扮した神主が黒い大牛にまたがって現われ、厄除けの青鬼、赤鬼が乱舞すると祭ばやしと共に、牛祭りは最高頂に達した。

本堂の金朱が、たいまつにまぶしく照り映える中を、気仙は氣の入りの門弟氣章を連れて歩いていった。

「先生――ここです」

氣章に云われて気仙は、奇怪な双頭の蛇を極彩色で描いた、蛇遣い小屋の看板を見上げた。

二匹の大蛇が、まるで繩の様にきりきりと美女をしめつけ、蛇と美女がのたうち廻って、あられもない格闘を演じる――と云う、氣章の話にフト惹かれて、彼はわざわざ此処迄足を運んだのであった。

場内は秋半ばとはいえ、人いきれで暑かった。唯一の見世場である、蛇遣いの浮雪太夫と、四尺余もある二包の大蛇との絡み合いが始まった。

女は年の頃二九かはたちの娘盛り、身軽なパッチ姿の軽装で、髪はおすべらかしにして、見事に蛇をあやつった。蛇はしめてはゆるめ、又しめて、緩急自在に、娘の意の儘に動き、蠕動していた。

気仙の眼は輝きを増し、らんらんと光り出した。人の意表に出る

画題が、彼の心を捉え始めた。

どう交渉が成り立ったのか、皮袋に二匹の蛇を入れた深雪が、駕籠に揺られて、――

気仙等をのせた三丁のかごは、夜更けのしじまを破って一路、立売堀の気仙の家へと急いでいた。

それから、いつとき後――。

乱雑な画齋に、気仙と深雪は相對して坐っていた。夥ただしい画籍は傍らにうず高く積み上げられ、滑稽本、こんにやく本、草双紙などが、無雑作に積み重ねてあった。

「儂の描く絵は、どれもこれも一風変わったもの――。既に御存知の通りじゃ。だが、かつて蛇を使ったものは唯の一枚も描かなんだ。どうじゃ、描かしてくれるか――」

「面白いじゃありませんか――」

「面白い？……」

「フフ、自分のしたい事をして、それを描いて貰えば本望です。可愛い蛇と相對ずくでなら、どんな事でもいとやしません。わたし、急に生甲斐を覚えましてよ」

「おまえは、本当に怖くないのか？」

気仙は、深雪の言葉へ、不思議なものを見守るように、視線を据えた――。

女は気仙に云わるる儘、緋縮緬の腰巻一枚になった。ぷりぷりと豊かに揺れる乳房は、乙女のそれを歴然と誇示するかの様に、碗を伏せたように形よく上向いて、乳首は小さく桃色にふくれていた。乱れ髪を垂れ流して、深雪は股をすぼめるように柱にもたれて横坐りになった。



皮袋から採り出した雄蛇は、鎌首をもち上げて、女の言葉を待つ様にのろのろと、足許に来てうずくまった。血走った気仙の眼が、ヒタと深雪の肌にあいつけられ、蛇の一挙一勢を、息を殺して、じっと見守った。

雌蛇はズルズルと皮袋から這い出ると、静かに静かに、女の脚を伝って胸許へと這い上って行った。乳房の谷間に鱗を立て、首筋を廻り、深雪が柱に添って高々と揃えてあげた両手に、柱ごと蛇繩そのままに、ぐるぐると手首から腕の附根まで、犇々と巻きつけた。赤くチラチラと点滅する細い舌が、深雪の黒髪から額をなめ、女の唇を求めて下っていた。

雄の蛇は、くびれた女の胴を二巻きするとぎゅっと締めつけ鎌首を持ちあげて、目の前でチロリチロリと舌を出し入れした。蛇繩の緊縛感による欲喜と陶醉に、深雪の思わず洩らす溜息ともつかぬ愉悅の聲が、気仙の筆勢を駆り立てて行く。

鎌首をもたげ、執拗に朱唇をねらう雌蛇、くびれた腰に二巻きして蠕動する雄蛇――。

「うーむ、そのままの姿勢で、もう少しで出来上るぞ――」

何物も忘れて筆を走らせる気仙の表情も悲痛げに歪んだ、

半刻――、蛇は深雪の全身に絡みついたままで離れなかった。

「よし、描けた――」

荒削りのデッサン人とは云え、その蛇の執拗さ深雪の陶醉を余す処なく描き終えた気仙は、極度の緊張から解放されて、全身から、音を立てて崩れ落ちる虚脱感に、しばし浸っていた。

二匹の蛇は、スルスルと音もなく蛇繩をといて、丸く円を重ねて、深雪の足許に鎌首だけをもたげていた。

深雪の紅潮した顔は元に戻り、長い愉悅と欲喜からさめて、じつと気仙の気魄のこもった絵に見入っていた。

『闘蛇の図』が巷間に大反響をまき起した事は云う迄もない――。

## 密 通 の 図

今日も亦見渡す限りの海原に、たそがれの色が落ちて、遙か彼方の海の青は既に灰色に変わっていた。

淡島明神の燈明に灯が入って、此处、紀州の加太にも夜の幕が垂れつつあった。

余りにも激しい画歴が、気仙の体を壊したのか、近年頓に肉体の衰えを感じた彼は、泉屋のはからいで、加太に居を構え、京都から連れて来た女房のお美和と、門弟の氣章の三人だけの専ら悠々自適の生活を送っていたのである。

彼は淡島明神の樟の大樹にもたれ、遙か彼方の島に沈む、血の色をした夕陽を見るのが好きであった。

もうこれで何カ月、お美和を喜ばせてやれない事か――。身体を壊してしまったということ以外に、彼の異常な性癖が、普通の夫婦生活を味気ないものにしていった。先妻を、彼のあくなき情念と筆の趣く儘に、様々の責めや拷問の手本に使って、果ては生傷の絶え間もなく、身を細らして死なしてしまってから、半年経つや経たずで迎えた今の妻は、彼とは二十歳近くも年下の、京でも選り抜きの美人と云われた女であった。

年の隔たりがお美和には最近とくに物足りなかった。夜毎、自分の身体を持て余しては、転々反測し、フト若い門弟の氣章の、端麗な顔を思い浮べては、心の熱くなる思いで、よこしまな連想に胸を



高鳴らすことがあった。

京では気仙はお美和を縛りの手本にして、よく描いたが、加太にきてからはそれも殆んどなくなり、彼女にとって、寧ろ、苦痛であったあの頃の、気仙の縛りに対する情熱が恋しかった。

微風はもう初夏の匂いである。

その日、気仙は、いつになくフト淡島の景色を描いて見る気になった。

黙って門を立出る時、垣根越しにお美和の行水姿が眼に映り、我が女房に甘い感傷を覚えたが、声はかけず家を出た。

気仙は気附かなかったが、もう一つの眼が、先程から、お美和の行水姿を凝視していた、外ならぬ気章であった。

彼も亦、師匠ゆずりの無残絵、縛り絵を描くことに専念していた。しかし、彼の若さでは所詮、彼の絵の下絵になる女には恵まれなかった。

お美和は知ってか知らずか、行水を終ってたらいからすつくと立上った。まぶしい許りの白い統肌から水滴がしたたり散じた。

気章は憑かれたものの如く、ふらふらと姿を現わした。

「あッ、誰? ——」

妖しい人の気配にお美和は振り向いたが、それが気章だと分ると、慌ててたらいに踞んで胸を押えた。

「いやな人——、黙って突然どうしたの——」

若い気章には、もう彼女が師匠の妻であり、浸し難い人である事も、何もかも打忘れ、その上夕闇が更に彼を大胆にさせた——。

「私は、始めて御厄介になって三年この方、片時も忘れず、貴女様を思い続けました——。たった一度でいい、私の縛り絵の下絵に、

貴女様を描いて見たかった。私は如何に下道とさげすまれようと、今の私には最早、貴女様なしでは生甲斐を感じない男です」

気章は齒の浮く言葉でかき口説いた。夢に迄見た端麗な彼に、こう口説かれては、人妻とはいえ若いお美和は前後を忘れて、気章に総てを捧げる気になった。

「わたしこそ、兼々お前を憎くからず思っていました」

「では、貴女様も……」

「幸い、あるじは淡島まで行つての留守——いっそ、ここでわたしを縛ってくれないか——。さ、気仙殿の帰らぬうち、そなたの好きのように、何なりとなさるがよい——」

ふるえる手に、気章は脱ぎ捨ててあった、お美和の腰紐やしごきをたぐり寄せると、傍らの松に後手に縛りつけた。絵筆をとるのもどかしく、さらさらと薄墨で彼女の縛り絵を素描して行つた——

先刻から、その様子を気仙は息を潜めて、じっと凝視していた、忘れ物を思い出して、とりに戻った矢先、気章とお美和の囁やきを聞いたのである。

お美和が気章に示した狂態を、冷静に、冷酷に、気仙は静かに懷紙に筆を走らせていた。

「密通の図」か、心の中で気仙は淋しくつぶやいた。

## 火 刑 の 図

胸中深く宿った執念をそっと抱いて、一刻の後、戸波気仙は何喰わぬ顔で戻つて来た。

妻を奪われた憤どおりが、じわじわと気仙を押しつつみ、と同時に、今更乍ら、お美和を恋う、切なさが湧いてきたのである。



常になく、気仙は機嫌よくお美和と話した。彼女は心の傷に触れられることなく、ほっとする思いであった。今宵が恐ろしい最後の一夜であることを、夢にも知らず、傍らでお美和は充ち足りた、健康な寝息を立てていた。翌朝はさっぱりとした初夏の快晴だった。



章の連れて来ぬのはその為だったよ——。どれ……」  
と、さり気なく云った。  
美和は別段驚かなかった。身体に自信のある彼女は、  
「着物を脱いで見ましようか——」  
「そうだな、偶にはお前の裸姿もいいだろう。いっそ人目もなし、

「美和——、今日は久方振りに絵心が湧いた。一度ゆっくり戸外でお前を手本に描いて見たい」  
「ほんに京都を離れて久し振りです」と、気章も連れて参りましようか——」  
その時、気仙の瞳はキラリと光った。が、すぐさりげなく、  
「いや、今日は二人きり水いらずで行くことにしよう。それに気章をつれていっては気まずいこともあるのでう。ハハハ」  
袋に必要なものを整えて、二人は駕籠にのった。和歌の浦の先端の雑賀崎の山中へと進み、山のふもとでかごを捨てた。  
畳の様な遙かな海面に、白帆が二つ三つ、止まって動かなかった。陽は昇り段々と暑さを増して来た。  
人目のない処で、気仙は立止った。  
「美和、今日は縛りの絵を描くよ。気



湯文字だけになって見たらどうだ——」

云われる通り、そそくさと美和は白日の下に白い肌を曝した。

「いい体をしているなあ——」

氣仙がフト唇を歪めてお美和のむっちりとした胸のあたりに視線を走らせた。

藹たけた妖しい美しさを、お美和は陽光の下に惜しげもなく曝して、氣仙が袋からとり出した荒縄に易々として身を委ねた。

檜の木にお美和を犇々と縛りつけ、猿轡を嵌めた。両脚も動けぬ様縛りつけると、お美和の体は微動だにしなかった。

徐ろに、氣仙は彼女の着物を手にとって、それを彼女の眼前でビリビリと破り裂いて、谷間に投げ捨てた。帯も下駄も、肌襦袢迄も、続いて谷間に消えた。

唯事でないと見てとったお美和は、顔を蒼白にして何か叫んだが、猿轡が邪魔して、それは声にならなかった。

氣仙はどす黒い唇を歪めて冷笑した。

足許の小枝をとり上げると、肌に喰い入る音はピシリと鳴って、一瞬、小枝のふしのとげが肌にささり、鮮血が白磁の肌をすつと走った。

「フフ、売女奴——これでも喰え！」

叱咤と共に小枝は所きらわず振り降され、更に激しい打擲が、頭へ、肩へ、胸へと仮借なく加えられた。

梢でもずが一声高く啼いて渡った——。

あの柔肌は影もなく、お美和には、ただ死神の迎えを待つ哀れさが、うなだれて緊縛された姿に滲んでいた。

彼は立上ると、お美和の足許の廻りに、枯木や枯葉を山のように

積んで、それに煙草の火を移した。パチパチと枯葉は煙をくすべ

て、やがて音をたてて燃え始めた。最後の氣力を振り絞って、お美和は眼を引きつらせ、恐怖に瞳孔は見開いた儘、声なき声を絶叫していた。

氣仙は絵筆をとり出した。煙に顔をしかめ乍らも、美和の悶絶の瞬間を絵にすべく憑かれたように筆を走らせていた。

## 蛇 足

戸波氣仙の女房殺しは間もなく露頭して、彼は投獄された。火刑の図の生々しい筆跡から、氣仙は遂に隠し切れず白状した。

京の口さがない都雀が噂をまいて好事家の間で、氣仙の絵は、日に日に高値を呼んで、殆んど市中にその姿を見なくなってしまった。不義をしたと云えば、たとえ女房を惨殺しても罪の軽かった時代に、氣仙はとうとう男の恥だと、白洲でもその一事だけは白状しなかった。薄々不義の事実を知った、絵師仲間の嘆願で罪を許され、出獄後彼の随筆集「筆の滴集」で始めてお美和の不義密通の真相を明らかにした。

『世の中に、間男されし男の心こそ、あわれなるものなし。この世なべて憎らしく、心うとし』

流石に老後、三度目の妻にくる女はなかった。余生を淋しく暮らし、一生を縛り絵と、残酷画、責め絵に徹底した明暦の京絵師戸波氣仙——さしづめ、今の伊藤晴雨老に匹敵する天晴れさであると云いたい。

(おわり)



## 或る女のカルテ

藤 山 秀 緒



人は「ざんげ」すると、身も心も軽くなる  
といひます。告白してしまふこと。それが心  
の安らぎを与えてくれるからでしょう。

秀緒も、いままでに、数々の告白を奇クの  
誌上に発表して参りました。或る投書には、  
お前のような露出狂の女は、後樂園のスタジ  
アムでも借切って、公衆の前で、あらゆる醜

態をつくしてみせるといい、と書いてありま  
す。そのような故意に人を困らせる投書に俟  
つまでもなく、私は告白マニアだと自分でも  
思っています。でも、私のこうした告白の文  
章が、皆様の多少でも御参考になったり、お  
慰めしたり出来るのでしたら、秀緒は喜んで  
あからさまに欲望の日々を書きつづけたいと

思います。

—○—

湘南の山々に囲まれたいまの住居は、私に  
とっては、絶好の場所です。都心から、あま  
り遠くありませんのに、人通りのない山や台  
地が連なり、日本軍のざんごうや、トーチカ  
の跡、廃屋、枯倒木などが至る処にあります。

通いの女中さんを七時半に帰してしまえば  
あとは私一人。新開地の住宅街は、まだ空地  
が多く、お隣りは、どのお宅も半丁あまり離  
れていて、私の処は一番山手の奥ですから、  
宵やみにまぎれて山の方へ行けば、誰にも会  
う氣遣いがないのです。でも、この家は、も  
うマニアの方々に氣付かれていゝらしいので  
裏口から出て、間道沿いに山へ行くのです。  
月や星のあかりをたよりに、乗馬靴の音を  
ざく、ざく、とひびかせ、のめるように登っ  
て行く秀緒。

昨夜の豪雨にも秀緒は登って行きました。  
厚地のトレレンチコートのフードもまぶかに、  
乗馬帽のひさしをつたう雫を払いのけながら  
ぷつぷつと肩にあたる大つぶの豪雨の雨あし  
を、うっとりとしめする秀緒。

おののきを泳えながら、まだよ、まだよ、  
と云いきかせながら、喘ぎ喘ぎ登る雨の坂。



一時間の苦行……。そして、トーチカのあとが、黒々と夜空にうかぶ廃墟へ。

私は、ここを発見して以来、この場所で、腹を切ることに、不思議な魅力を感じています。やはり、当時の倂をのこし、敗戦のわびしさ、切なさをもそのままたえてくれるところに魅かれるのでしょうか。

雨水の流れこむにまかせた地下壕。土の香が鼻につき、名も知れぬ草が、胸までも茂っています。恋は人の心を思いがけぬほどに、力強くしてくれるもの。平常の時の私ならば到底ここまで来ることも、またこのような気味のわるい廃墟に立入ることも、出来ないでしょうに、この時ばかりは、なんのためらいも、怖れもなく、どこかと物凄く反響する乗馬靴のひびきを快いもののように聞きながら、地下への階段を下って行くのです。

懐中電灯をつけ、持参のゴム布をしきつめ腰をおろした私の顔は、流石に疲れの色が見えますが、このような激しい雨の夜は、人も決して来ないのですから、思う存分プレイにのたうつことができるのです。

このような場所でのプレイには、私のテキストの中でも「壮烈大和撫子」のような、女スパイの刑死などがふさわしいので、そのよ

うな雰囲気を作るために空想して、奇クにのせられた文章や挿絵を思い浮かべるのです。

三十四年の八月号にのった私の告白をお読みになった方は、もうおわかりでしょうけれど、私の母は戦災死するまで、乗馬ズボンに編上げブーツをはき、男装して居りました。地下壕の中で、祖母の上へ、のしかかるようにしてかばいながら、右足をふんばり、左足との太股に祖母を跨ぐような姿勢で、眼を恐しいほどに見開いて、死んでいた母。

その断末魔の姿が、「壮烈大和撫子」の節子が、割腹の苦痛に堪えながら目を見開いて死んで行くイメージとなったのでした。

私は、そっと、懐中電灯をゴム布に置き、忘れようとしても忘れられない、あの母の最期の姿勢をとります。仰臥させても、母の四肢は、こわばっていて、やはり乗馬ズボンの両あしを踏み開いたままだった……。乗馬ズボンは、硝煙と、汗と脂が滲みこんで異臭を放ち、腹を切ったかと思うように腹部をかかめて死んでいた母。

秀緒は、ゴム布の上に左ヒザをつき、そして右を立て膝してうっとりとなります。

母は、祖母を抱いていたのに、秀緒の両手は、乗馬ズボンのポケットふかく挿入られ

てはいますが、私の血は、母の断末魔を、手にとるように再現してくれるのです。

うっとり物想う秀緒。嵐の前の静けさを思わせるゴム布の上……。

ああ、次の瞬間に、秀緒は、ハッと我に返りました。乗馬ズボンのポケットふかく挿入れていた筈の両手は、もうトレンチコートのボタンをはずしはじめているではありませんか。

ごわごわと雨を吸ったコートが、地下壕の中に、どきりと云う物音と共に脱ぎすてられ、再び、両手は憑かれたようにシャッブラウスのボタンも引きはずしてしまおうです。

革製のコルセットが、ウエストを締めつけていますが、これは、慣れぬ英語をタイプで辿って、イギリスから送らせた特製。黒革の光沢が、懐中電灯の光をうけて妖しく輝く。

コルセットは外さず、持参のペーパーナイフをこの上から引廻すのです。

突き立てようとして、気おくれした秀緒は小走りに地下壕の出口へかけ上る。地上は、胸までも茂る雑草と、木々を打つ激しい雨の音、黒々と聳える老木の梢など、人の気配は全くないのです。

ゴム布の上に戻り、今度は懐中電灯を使っ



て、たんねんに壕の中を偵察。カビくさい臭いのほかは、犬も猫もない。

はじめて、一人になったと実感する。

誰も見ていない。誰もきいていない！

秀緒は、武者ぶるいしてゴム布の上に不動の姿勢……。

執行吏の幻が、秀緒の前に立ち、そして、死刑の執行を告げる。秀緒は、男のように

「日本軍人川崎節子、潔く死に向います。異例の切腹を許され、本望であります。この上は、女乍らも、日本古式の切腹をお目にかは、立派に刑に服する覚悟です……。ただ……切腹は、苦しく、そして長い時間がかかります。どんなに、長くかかって、どんなに苦しんでも、必ず最後まで、一人で死なせて下さい。……さようなら！」

大声では難しい低いトーンも、地下壕の中で、一人つぶやく時は、驚くほど凛々しくひびきます。自分の声におののく秀緒。

片膝立てて私はペーパー・ナイフを逆手にとり上げ、身がまえます。

姿見を置けぬこの場合、私にとって見える処は、胸部から下の半身だけです。それでも、シャップブラウスの衿を立て、耳もとに其の立衿が、がばがばと触れあい、乗馬ズボンの

のヒダが、電灯をうけてうねうねと悩ましい曲線をつくっているのを感じるだけで、秀緒の全身はしびれてしまします。

ひとしきり、激しい呼吸がつづき、そしていよいよ切腹ブレイがはじまるのです。

本当の切腹の場合、ありえぬことですが、

秀緒の左手は、乗馬ズ

ボンのポケットに突込

んだまま、

右手のペー

パーナイフ

が、左脇腹を襲いま

す。

「うっ！」

左脇腹が

ぐっと圧迫

され、革製の

のコルセツ

トは引締

る。

乗馬ズボ

ンのポケッ

トに入れられた左手は汗ばみ、ペーパーナイフは、コルセツの上から挟りたてながら、じりじりと右腹へ移動して行きます。

「う、ううっ……」

自分でも、はつきりわかる頬のほてり。血走る眼。コルセツが、ぎゅうっ、ときしみ





その下で、腹筋が波を打っています。

「ウッ、ウッ、ウッ……ウームッ！」

秀緒の幻は、川崎節子となって、いま、短刀を臍下一寸のあたり、真一文字にかき切って行く。

つめたい、コンクリートと土の香りは、刑死する女スパイの雰囲気、いやが上にも盛りあげてくれるのでした。

秀緒には、乗馬ズボンを伝う血が見え、そして、下腹からのぞく腸が、はつきりと目にかぶのです。

「む、むうっ！ うううっ！」

幻が、苦しげに口をひらけば、秀緒は、切なく喘ぎ、そして押泳えた呻きをあげる。

まだよ、まだよ！ 必死にのぼりつめるのを抑えながら、秀緒は、

「む、むむむッ……」

と、右脇腹まで引廻し、呼吸をはかって、引抜こうとします。……引抜いた刃が、再び双手をかけて鳩尾を襲うとき……。秀緒は、絶叫し、失神するかもしれない……。

どさどさと小走りに地下壕の階段をかけあがる。黒々とした闇と、雨のふる音……。

そうよ、本当に、誰も居ないのだわ！

逆手にペーパーナイフを突立てたまま、お

ずおずと闇の外を覗いた秀緒は、ほんとと安堵して、今度は、よろよると、手負いの足どりでゴム布の上へ引返す。赫らむ顔、くいしばった唇は、燃えつくす寸前の炎のように激しいのだ……。立ったまま、乗馬ズボンの膝をすりあわせ、乗馬靴のツマ先を内輪にして、かかとを浮かせながら、

「ううっ……」

と呻き、一抉りして引抜く。

ああ、これから凄惨な十文字が腹が行われるのです。フィクシオンとは云え、川崎節子は、さぞ苦しかったことでしょう。切なかったことでしょう！

「……こ、これより、お、女、乍らも……十、十、文、字、腹！ むむむむむ……」

荒狂う女豹のように、秀緒は、言葉にもならぬ叫びをあげ、立ったまま、ペーパーナイフを鳩尾に押しあて、そのままぐっ、と力をこめるのです。

「ウ、ウ、ウーッ！」

地下壕をゆすってひびく苦悶の絶叫……。

絶対に、誰も居ない。そして誰にもきこえない……。こんな場所でなければ、許されない迫真のプレイ！

ああ、もう秀緒は、これ以上書きつづける

勇気がなくなってしまうました。

「あうッ！ うむうっ！」

「ウ、ウウ、ウーッ！」

「あうっ、ええッ、ウーッ……ああっ……」

不幸な女の、ナルチシズムの絶叫が、地下壕にこだまし、アブノーマルな夢の象徴が、乗馬服に身を固めた秀緒の肉体に喰入って、はかない仇花を咲かせるのも此の時です。

……ペーパーナイフが投棄てられ、臓腑をつかむ心で握るゴム管。

……この時、十文字腹を仕遂げるために、押下げられた乗馬ズボンが、がばがばと膝にまつわりつき、立っていらなくなった川崎節子の苦悶の幻と共に、秀緒はゴム布の上に横転してしまうのです。

「ウーッ、こ、これが、これが……や、やまと乙女の……ウウッ、あ、あ、あかき……チ、血汐……。お、女乍らも……武、武人の、さ、さ、最期……。こ、この、この……通り……。ウウム、ウウム、ウウウウ、ウーッ！」

臓腑をつかんで抉りたて、絞りあげ、そして、泳えかねた呻きの絶叫……。

……誰か此の姿を見たら、きっと本当の自刃と思うに違いありません。



秀緒は、数秒間、失神し、そして、生き返ります。必死にゴム布をかきむしり、乗馬靴の両足をのたうち乍ら、断末魔の苦悶を、かみしめるのです。

地下壕の冷気が、脂汗にまみれた頬や着衣を、快く吹きぬける頃、秀緒は起上ります。幻の臓腑を、そっくりそのまま乗馬ズボンの奥ふかく包み込んで、秀緒は、ものうげに、ベルトを締直し、ボタンをかけ、レインコートを肩にかけ、ゴム布や持参の器具を取りまとめ、そろそろと地上へ滑り出ます。

雨も小やみになって、草の香が鼻をつく。つかみ出した臓腑が、まだ乗馬ズボンの中に眠っているのを、たとえばもうなくいとしものに感じながら、どさり、どさり、と乗馬靴の音を響かせて山を下る秀緒……。

倅せと、哀しみの両の頬一杯に交錯させながら、フードもかぶらず、ベルトもしめず、乗馬ズボンのポケットへ右手を突込んで、もつれがちな長グツの足もとをいたわりながら我家をさして帰って行く秀緒。

近所の家々の灯も消え果てた道、黒々と迫る山の木々に追われるように裏口の戸をあけて、のめり込む台所の板敷。臓腑をつかみ出すあの陶酔の一瞬を、声も

# 〔告白〕

## 禪に憑かれた男

愛知 輝 一

僕は二十七歳になる一サラリーマンですが、キクの愛読者であり休刊前はもとより復刊後も、ずうっと続けて読んでいます。しかし、僕が好んで読むのは沢山ある記事のうち、禪に関するものであり、その他の記事には全然興味はありません。

僕は中学一年の時、ふとしたことから禪の味を知り、その後年と共に禪に対する関心は強くなり現在の禪に対する執着は、自分でも異常であると思う程強いものになっています。初めのうちは、自分でも心配したり恥しく思ったこともありましたが、キクを読む度に多数の禪マニアの居られることを知り心強く思い安心もしました。

僕が初めて禪を締めたのは越中禪です。しばらくは、それで満足していましたが、しばらくすると物足らなくなり変ったもの

を締めてみたくなりました。モッコ禪、水泳禪、六尺禪と次々と代えてみました。ところが六尺禪の緊縛感のすばらしさと共に何んともいえない快感を知った時から、僕は完全に六尺禪の囚人となってしまいました。

その後、現在に至るまで四六時中、六尺禪を着用しており、そして赤、黄、黒といろいろと色を変えてみましたが、やはり六尺禪はなんといっても白が一番良いようです。真新しいサラシの六尺禪を締めた時は心身共に爽快となり元気が増すのをおぼえます。しかし、六尺禪もサラシの新しい間は、すっかりしてきますが、何度も洗い返すと布が弱ってきます。すると、締めあげた時の快感も、それに従って減るように思えます。

そこで、僕はいろいろ考えた結果、相撲



押休えがちに繰返し、やがて、自虐の手もとが、乗馬ズボンに吸込まれる頃は、再び美酒に酔いしれて、アポロの天下る姿を幻にえがきつつけるのです。

こうして、夜のあける頃、秀緒は、はじめて深い眠りにおちるのです。

○——○

死を決してプレイした入院前の激しい習慣が、体力の恢復と共に、物凄い力で私を引きづります。休えてみましたが、気が狂いそうになります。

姿見にむかって、乗馬服に身を固め、自ら慰めるナルチシスティン秀緒にとっては、語る相手もなく、絵をかいいたり、どぎつい割腹描写を文字にするほか、心のやり場がないのです。

このような恥知らずな告白をおゆるし下さい。もっと、もっと詳しく書きたい欲望にもかられますが、それは許されないことでしよう。いまでも、姿見の中の私が、乗馬服姿で、私のプレイを待ちこがれているのですけれど。

(終)

のケイコ禪を用いることを思いついたのです。早速、運動具店へ行つてケイコ用の禪を買つてきて縮めてみました。ズック製のそのケイコ用禪は、ごわごわとして硬く、厚みがあり、肌になると、ひんやりと冷たい上に、ずっしりとした重みがあつて、如何にも気持良さそうに見えました。しかしいざ縮めてみると布地が硬い上に二重になつてゐるため、ピッシリ肌につかず、しかも自分一人で締め込んだので充分締めあげることができなく、思った程の緊縛感もなくがっかりしました。

そこで禪を一重にし、それをサラシと同じ幅に切つて細くし、それで六尺禪を作り縮めてみましたが、これは大成功でした。ズックの布地は一重にしたことによつて、硬さも適当となり、しっとりとした湿め具合と共に、快い冷たさがあり、しかも、二重の時と違って十分に締めあげることが出来ます。その上、一度締め込むとズックであるので、ゆるむことはありません。僕は締め込んだ時の、何ともいえぬ快い緊縛感に、しばらくは我を忘れたほどでした。しかし、困つたことにはズック製であ

るため、長時間続けて縮めていことが出来ないのが残念です。緊縛感が強ければ強い程、下腹や太股などの肌の弱い部分を傷つける恐れがあるからです。そこで僕は、勤務の終つた土曜日の午後から月曜日の朝にかけて締めることにしていますが、土曜日が待ち遠しくてたまりません。一重ですら、汚れても洗濯が割合に簡単にできるのも便利です。

本誌九月号の読者通信の鎌倉SA生様はじめ、禪マニアの皆様の御意見、並に着用された時の感想をお待ちしております。また同じく、東京KM生様の御意見ですが、僕も全く同感です。中でも男性の六尺禪の写真が少しもないのは本当に残念です。毎号二三葉ずつ位は、写真を掲載されるよう編集部へお願い致します。

次に青木密様の挿画のことですが、僕もKM生様と同意見です。大変上手に画けてはおりますが、前垂れがあることによつて六尺禪としての緊縛感が少くなると共に、越中禪と間違えられる恐れもありますので前垂れはない方がよいと思います。



## 松井籟子悦虐小説シリーズ

## 妖

(ようか)

## 花

松井籟子

瀧れい子画

## 一

鹿島川にかけられた新しい橋が、幻のように夜霧の中に見えていた。

とんぼの羽のような螢光燈の、青白い色がこの山裾の村には不似合だった。

それは関西電力が黒部溪谷開発の為、特に開いた道路だったし、橋も又、都会の様相をみせているのだったが、それがかえって、物音一つしない夜のしじまの中で、まして二千米以上の北アルプスが屏風のようにそびえている場所では、夢の中の橋としか思えない感じなのだ。

幻の橋だった。

いや、橋の上に妖気が漂っていた。  
それがすでに、菅谷研吉の、それから出あわした怪奇な情景を予告していたのかもしれない。

しかし、その時は、研吉はただ青白い螢光燈の幻のような美しさを、美しいと思っただけだった。

そして、その美しさに、山へ登るまでもなく心が洗われるような気がして、はるばる汽車に乗って来た甲斐があったと思ったものだった。

研吉は都会の混濁の中から逃れてきたのだ。

ブツブツと、溝が醗酵するように、都会という所は男と女が妙に汚れて、奇体な臭気を漂わす。

研吉は都会の恋に疲れていた。



一人の女を二人の男が争うことはよくあることだが、大抵は女の態度がどちらかに傾く筈なのに、白川弓子の場合は二人の男が二人とも愛された。或いは二人とも愛されなかったといえるかもしれない。

研吉は年齢のねばりに負けた。

若さは彼を気短かにする。いつまでも勝ち負けのわからない勝負を、彼はなげてしまったのだ。

何年間も背負ったことのないリュックサックを背負って、中央線に乗ってしまったのも、つまりは白川弓子を忘れる為だった。

針の木に登ってみようと思ったのは、学生の頃にきいた伝説が研吉の頭に根強く残っていたからかもしれない。

恰度まだ中学生の頃だった。

大沢小屋で雨にふりこめられて、富山から登って来た人夫達と炉をかこんで話の花を咲かせたことがある。

その時、戦国時代の武将佐々成政が、針の木峠へ軍用金を埋めたという話をきいたのだ。夏というのに肌寒い小屋の中で、まことしやかに語られた軍用金埋没の話は研吉の頭にこびりついてしまった。

今でも彼は、その時の人夫の顔も、人夫の話振まで思い出すことが出来る。

それはこういう話なのだ。

天正十年十一月のことである。

富山の城主佐々成政は、織田信長が亡きあとに、豊臣秀吉が天下をとったのを心よく思わず、立山から針ノ木を通り、美濃へ出て、浜松で家康に会い、秀吉と一戦することをすすめた。

夏でさえ雪の消えないこの辺の山は、十一月も末という季節に、雪になやまなければどうかしている。

軍勢は猛烈な吹雪におそわれて、荷を軽くしなければ、人も馬も進むことが出来なくなってしまうのだ。

そこで針ノ木峠の近くへ軍用金を埋めたというのである。

同じような縦の木が三本並んでいる所の、三本目からその木の背の高さだけ、朝陽が夕陽に影をおとした所だという云い伝えがある。堀り出した人があるともいうし、又、成政の愛妾の早百合の方の霊がたたって、堀り出すのを邪魔するのだともいう。

ふと研吉は橋の青い灯の中に、黒髪を長くたれた早百合の方の亡霊が浮かんでくるように思った。

「わらわは知らぬ、身におぼえないことじゃ」

そう訴えるくやしそうな女の顔を、まざまざみるように思ったのも、同じ時に聞いた成政の愛妾惨殺の話が印象深かったからかもしれない。

## 二

話を再び天正年間のことに戻らせてもらおう。

「知りませぬ、お許しを……」

早百合の方は髪をつかまれてずるずるひきずられながら、同じことをくりかえした。

成政の血は嫉妬で狂っていた。

彼は早百合の大きな腹が、不義の証拠のように思えて、憎くてならなかった。

「この子はお殿さま、あなたのお子です。どうぞわらわの言葉をお



信じあそばして……」

早百合がどんなに哀願しても、成政の耳には、そっとささやかれた佞臣の讒言の方が、真実のひびきをもって座をしめていたのだ。

早百合のお腹の子は、殿のお子ではなく、小姓の竹沢熊四郎の子だという……。

男の目から見ても熊四郎が美しく思えるのだから、まして女がみたら……と成政は思ったのだ。熊四郎の美しさがよけいに成政の血をわかせた。

二人を引き出した成政は言い訳も聞かず、熊四郎を斬った。

「ああっ！」

と熊四郎は叫びながら、ふき出る血の中で、

「違います、殿のお考え違い……」

とくりかえし、傷ついた身で早百合の方の楯になろうとさえた。

それが成政には熊四郎の愛情とうつつた。

「おのれ」

と、斬りおろし、ブスブスと熊四郎の体をめちやめちやに突いた。人間の体を突いているというよりは、成政自身の怒りの塊を突き通しているようだった。



熊四郎は血に汚れて息が絶えた。

庭土を赤くそめて、水たまりのように、血の流れが丸く輪になっていた。

「いとしい男の血だ、吸ってやるがよい」



悪鬼のようになった成政は、早百合の方の長い髪を、手の中へくるくるとからげて握ると、彼女の顔をその血だまりの中へつけたのだ。

蒼白になった早百合の頬が、切られたように血でいろどられた。血は彼女の涙とまじって、頬から衿へと伝わっていく。

「熊四郎の子に、父の死にざまをみせてやろう」

成政はもがく早百合をとっておさえて、帯をとき、肌をひろげてみせた。

臨月近いお腹が、青い静脈をみせて丸くふくらんでいる。その腹を、成政は太刀で割ってしまったのだ。

それでも成政の嫉妬に狂った胸はおさまらなかった。早百合の肌を目のあたり見れば、彼の狂気は昇るばかりだ。

成政は早百合の方の首をはねて、その黒髪を木の枝にくくりつけ、さらしものにして、鳥がついばむのにまかせたのだ。

早百合の方の血がしたたって、百合の花を黒く染めた。

成政が珍らしい黒百合の花を、秀吉の北政所に献上して淀君の怒りをかい、佐々家滅亡の端緒となったのも、早百合の方の恨みがこもっていたからだという。

歴史の一コマの幻影に、佇んでいた菅谷研吉は、早百合の方の笑い声を聞いたように思った。

そして、その笑い声が、北アルプスの峰々へすわれていくと同時に、夜がしらじらと明けてきたのだ。

### 三

菅谷研吉は、針の木峠から烏帽子岳を通して、葛温泉へぬける最

初の予定を変更して、爺ヶ岳から源海か鹿島へおりてみようと思つた。峠の小屋の登山者達が同じようなコースをとるのをさけたからだ。彼は山へ来てまで都会の声を聞きたくなかった。

時間はずれの登山路には人の姿はなかったが、山の上はシーズンで賑わっていて、槍ヶ岳へ縦走する群も多く、立山から富山へぬける組もある。

ふと研吉は、佐々成政が松本から東美濃へ出たのはわかっているが、松本までのコースには種々な説があることを考えた。

鹿島の村落は平家の落武者が住んだという伝説があつて、旧家のなげしに槍がかけてあつたのを思い出した。

源平の頃と、戦国時代では年代的に違うが、落武者がはたして平家だったのか、成政の軍勢の脱落者かわからないような気がした。

研吉は都塵を洗うつもりで、埋没金を考えていることに、矛盾を感じなかった。

埋没金は童話なのだ。

研吉の心が大人から子供にかえっている証拠ともいえる。

山の上は夏でも雪におおわれている岩場だから、樅の木などというものはない。同じような背の高い樅の木が三本並んではえているとしたら、針葉樹林へ入ってからだろう。

しかし、研吉の童話は、やはり童話に終りそうに天氣が崩れてきた。

おとぎ話をたのしむような、明るい陽ざしではなくなってきたのだ。

霧がだんだんに深く濃くなっていく。

爺ヶ岳の頂上に立った時は、もう針ノ木も立山も霧のとばりの彼



方に姿をかくしていた。

しかし、尾根を歩いていけば、わりに道を迷わないものなのだ。近くに小屋もある筈だと思った。

研吉はビッケルを握り直すと、霧の中を歩いていった。

ふと、靴に打った鋏が石をふみそこなったのか、ツルリとすべった。

転ぶ筈がないのに転んだのは、疲労か空腹か、それとも、それが何か人間の力ではどうにもならない偶然だったのかもしれない。

転落するような場所を歩いていたとは思えないのに、研吉の体は宙に浮いたのだ。

「しまった！」

という観念だけ尾を引きながら、研吉の意識は失われていってしまったのだ。

甘い陶酔が彼を包んだ。

何ともいえないいい香りが漂っていた。

水の中に浮いているような女の長い脚が目の前にあった。

「美しいな」

研吉は思わず声をあげた。

その声で我にかえった。

それでもまだ一瞬、傍の女性を東京で別れてきた白川弓子だと思っ

た。

習慣のように片手を女の胸にまわした。

その手に女の皮膚が、マシマローにさわったようなやわらかさと弾力をもっているのを知ったが、無意識に手に力を入れていた。

そして又眠った。

しばらくすると胸のあたりが重くなった。

重ねられた唇を、のどの渴きをいやすように激しく吸った。自然、手が胸の上のものをかかえた。

又してもマシマローのような触感である。

研吉のぼんやりした顔に、

(どうして彼女は裸になっているんだろう)

という思いが、シヤボン玉のように浮いて消えた。

長い黒髪が女の肩から研吉の首へ蛇のようにまきついた。

(弓子はいつのまに髪を長くしたのだろう)

研吉の頭から少しづつ霧がはれていった。

「あっ！」

と、彼は驚いて身をおこそうとした。

女は見知らぬ人だったのだ。

「そのまま、そのまま……」

女は甘くささやいた。

夕闇に咲く白芙蓉のように、女の顔は白く気高かった。

女は研吉の耳もとで、たえず彼の心をそるような言葉を、小さくささやきつづけた。それは見えない舌で、耳をねぶられているような快さだった。

彼は女を押しつけることが出来なかった。むしろ、すすんで女を

愛撫した。

「本望じゃ」

ふと、つぶやいた女の言葉に、研吉は聞き耳をたてた。

再び……。





「わらわは満足に思いますぞ」  
女は云った。

研吉はやっぱり夢を見ているのだと思  
った。

彼は夢のつづきを見るように、再び目  
をつむった。

#### 四

研吉がはっきり目覚めたのは、それか  
らどの位の時間がたっていたのか、自分  
には解らなかった。

部屋の中は暗い。

彼はどこにいいのかさえ判断出来な  
かったのだ。

どのやら物の像が見えるのは、奥の間  
の明るさが研吉の寝ている部屋まで流れ  
て来ているかららしい。

研吉はまだ夢を見ているような気がし  
た。

しかし、立ち上ると、光をたよりに奥  
へ進んでいった。

そこは、洞窟の中でもあるのか、太  
い木で組まれた建物全体が窓がなく、し  
めった苔の匂が漂っていた。

奥の突き当りは祭壇になっていて、お



びただしいろろそくがきらめいている。

白い絹の着物を着て、髪を長く後にたらしめた女が、何ごとか口の中で念じながら、祈っていた。

後を向けているのに、研吉が近よったのを気配で知ったのか、

「お目がさめられたか？」

ときいた。

「いったいあなたはどなたです？ 此処はどこなのですか？」

研吉が聞くと、

「わらわには名前はない。名前というものは、それをつけなんだから不便な時にみつけるのである。いわば符号のようなものじゃ。

此処ではそのようなものはいらぬ。家来どもには名があるが、わらは姫とよばれるだけじゃ。又、此処をいずこと云えばよいのかわらわは知らぬ。わらわはただ、母の意志を奉じ、我が子にそれを伝えればよいのじゃ。そなたがわらわに子を作ってくれるであろう。それまでそなたは此処にとどまらなければならぬのじゃ」

研吉が無言でいると、女はそれにかまわず、「そして、そなたにしてもらわなければならぬことがある。さあ、これをとってたもと、祭壇の前においてあった篠竹の鞭を研吉の手に渡すと、白い衣を絹ずれの音をさせてスルッとぬいだ。

ろろそくの光の中で、ゆで卵をむいたような裸身がまぶしく研吉の目を射った。

「さあ、これでわらわを打つのじゃ。わらわが十数えるだけ打つたも。さあ、はよう」

研吉は云われた通りに鞭を手にとると、女の背をハッシと打った。そうすることによって、これが夢ならさめるだろうという気がし

たのだ。

「一つ……」

女は歯をくいしばったような声音で呻いた。

ピシッ！

と又、うちおろす下で、

「二つ……」

と女が数える。

白い肌は一瞬更に白くなって、次の瞬間にはその白い筋の奥底から赤味がにじみ出てはっきりした赤い線になった。

「三つ……四つ……」

女の息づかいが荒くなる。

打っている研吉も荒い息をしていた。

もう、ことの善悪も、夢かうつつかも考えなかった。

鞭の下でうごめく女は、見知らぬ女でもあったし、白川弓子でもあった。

そして又、女体というようなものではなく、研吉の鬱積の塊が目のあるのかもしれない。

ふりおろす鞭に、女の黒髪がからんで、手をふりあげると、髪を引きあげるようになる。

「ああ……」

と、女は悲鳴をあげた。

蛇のようにからんだ黒髪を鞭からはずして、又、ピシッと打つ。はずしきれなかった髪が、二、三本引きぬかれて鞭にまつわっていた。

「七つ……ううっ！ 八つ……ウ！」



女は両手で乳房をかかえ、横ざまにうづくまって、魚のように、ピクッ、ピクッと体をふるわせた。

「十ッ……！」

数え終ると、そのまま足を長くのばし、顔をおおって伏してしまつた。

幾すじもの赤い線が、女の背中で生きもののようになうごめいていた。

女の裸身は、太いみみずをまとっているようだった。

## 五

何不自由ない生活だった。

僅かに不自由なものといえば、電気がないことだった。

此処では奇妙に大時代の生活様式と、現代のそれとがたくみにまじり合っていた。

姫と呼ばれる女は、成政の手にかかつてはてた早百合の方の末裔だということだ。

腹をたち割られた水子を、早百合の腰元が抱いて逃げて育てたのだという。

爾来、数人の家来と共に、この山の中の洞窟にかくれ住んで、子孫を残して来た。

佐々成政の軍用金は、成政の子孫を三百年以上養ってもまだ余っているらしい。

早百合の方のはらんでいた子供は、不義の相手の男のものではなく、成政その人の子供だったのだ。勿論、不義ということがすでに云いがかかりだったからだ。

しかし、早百合の方の霊は、自分の子でありながら、自分を惨殺した成政の子でもある因果の結晶が、育っていくことに苦しみを感じた。

それでいつとはなく、子をもつ為に男と通じた女は、この早百合をまつた祭壇の前で、我と我が体を苦しめて、早百合の霊をしずめなければならぬタブーが生じたのだ。

そして、生れた子が女なら、次の子の為に優秀な若者を広く世に求めて、何らかの方法で家来達がこの洞窟へつれてくるのだ。

生れた子が男なら、次の子の母となれる女をさがす。

そして、数人の家来はひとりの子を作ることだけを許されて来た。ただひとりの子を……。

だから、洞窟の人数はいつも同じで、血は純粹に現代まで三百七十年の歳月を流れつづけてきたのだ。

すると、研吉の運命はどうなるのだろうか。

子が出来たと解ったら、追放されるのか、それとも、殺されるのか……。

原則が殺すことであっても、腰元の中には殺すとみせて里へ逃した男もあったろう。

三本の樫の木の前は、そうした男の口から世の中へ伝えられていったのかもしれない。

しかし、この洞窟がどういう位置にあるのか、研吉には見当がつかなかった。

洞窟をとりまいて、何本もの道が迷路のように走っている。

逃げようとしても、歩いて、歩いて、歩き疲れて出てくるのは、同じ洞窟の前だと女は語った。



だから逃げても無駄だというのだ。

一日、二日と、たえず酔っているような日が続いた。

女の体はすばらしかった。

それは天性のすばらしい美しさを、体のあらゆる細部にまで持っているという感じだった。

男を知らない体は、技巧というものを知る筈はない。それなのに、天性の器が無技巧の技巧で男をとらえてしまう。

研吉にとって、東京の女の指のしなやかさは、消し切れない記憶を彼の頭よりも、体に残していたが、姫のすばらしさの前には、比



較も出来なかった。

麝香鹿は、牡が牝をよぶのに特種な芳香を放つというが、姫の体から放つ香氣は、牝が牡をわがものとする為に、生れつきそなわったものなのか。

姫の体が燃えてくると、むせかえるような香りが漂い出すのだった。

こうして、夢は夢につづき、日のたつのも忘れた。

そして、姫は妊娠したことを研吉に告げ、早百合の方にそれを知らせる儀式をあげるといった。

女が二人、男が三人の家来が集った。

薄いかたびらに着かえた姫の体は、罪人のように縛しめられた。

早百合の方が、神通川のほとりで仕置にあった通りの姿にされたわけだ。

姫は跣足のまま洞窟からひき出された。

山岳地帯の荒い道は、跣足の足のうらにきつくあたった。

日頃から絹の肌をほこりにしている姫の蹠が、岩角で傷つき、針葉樹の枯葉に刺され、赤い血をにじませた。

縄尻は研吉がとった。

それが研吉の役だった。

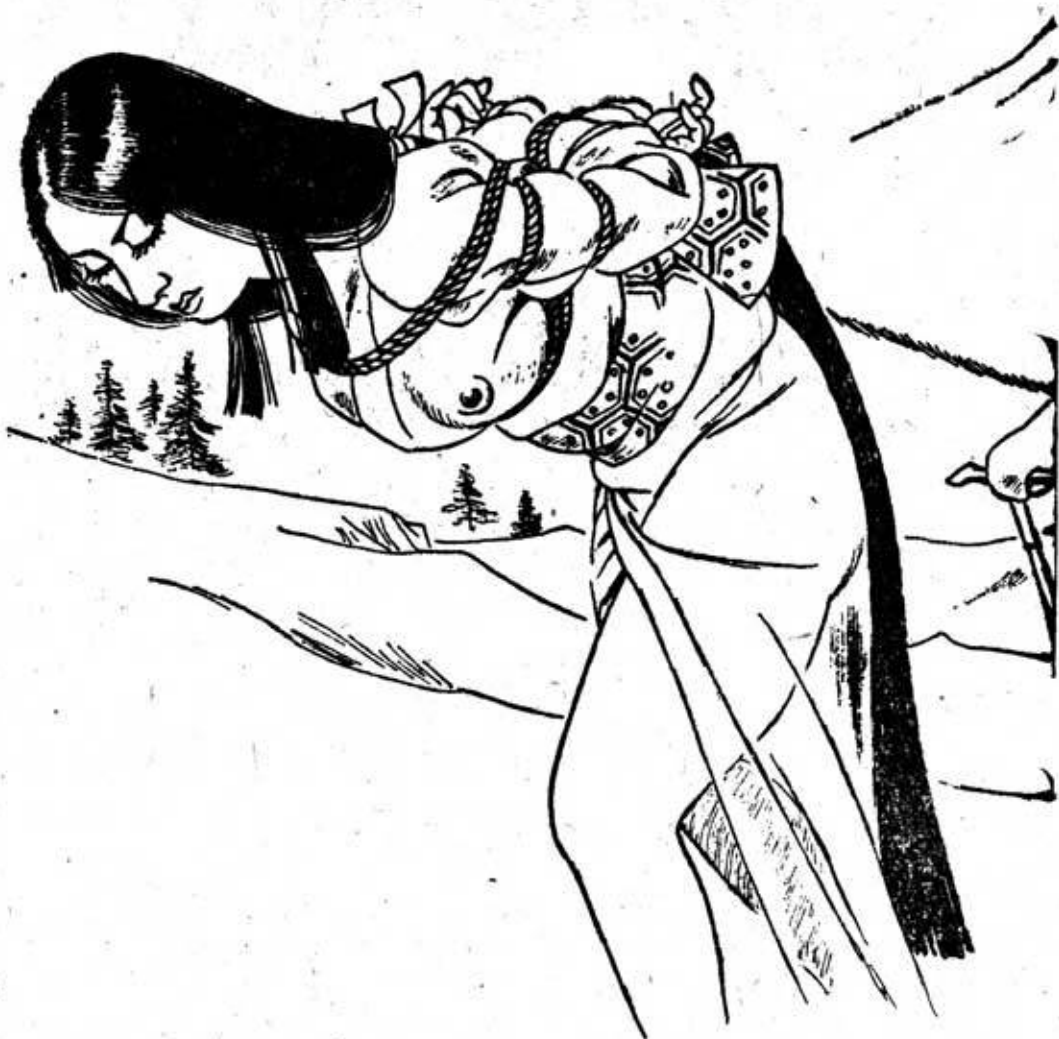
やがて、道を上ったり下ったりして、溪川へ出ると、三人の男達が姫の体を川の中へはこんだ。

縛られたまま彼女は幾度か水につけられた。

うすいかたびらから乳房の形がはっきりみえた。

冷たい谷の水は彼女の体をふるわせたが、三人の男はかわりがわりに彼女の頭を押さえて水の中へ顔をつけるのだ。





もう呼吸が出来ないというぎりぎりまで、水に面をつけていなければならぬ。

水面から浮く姫の顔が苦痛にゆがんだ。

研吉は姫が妊娠したといっていたのに、こんなに水で体を冷やしては、流産してしまうのではないかと思ったが、ちゃんと頃合いがあるのか、姫の体は再び岸へうつされ、焚火によって温められた。

しかし儀式はそれだけでは終わらないのだ。

早百合の方が、その黒髪を木にくくられてさらし首にあったように、姫は生きながらにさらされなければならないのだ。

姫の髪が木の枝に結ばれた。

目がつるし上って、夜叉の面のようにみえる。

研吉はもう手をかさなかつたが、男も女も無言でこの惨酷な刑を執行していった。

その男達の冷酷な顔を見ているうちに、ふと研吉は背中に悪寒が走った。

姫に子供が出来れば自分は用のない体になる。すると……。

研吉は急に恐怖が全身を走るのを知った。

いかに相手の男を抹殺するのが規律であっても、肉体を通じ合えば未練があるう。

まして女心は男をかばうだろう。

姫は今、研吉をかばいたくてもかばえない状態にいるのだ。

もしかしたら、このさらしもの前で、自分は血祭りにあげられるのではないだろうか。

悪霊には、悪霊に対する方式があるだろう。

悪霊を喜ばせるには残忍であればある程いいわけだ。

研吉は逃げようと思った。

逃げ切れなくても逃げるより他にない。

姫の肉体に執着している時ではなかった。

研吉は五人の家来達のすきを見て、がむしやらに簪をくぐった。とに角、尾根へ出ることだ。上へ上へ登れば何とかなるだろう。

後に叫び声がおこった。

ふり向くひまはなかった。

何でもいい、ただ這い上った。

足音が追ってくる。





## 愛好家の記録

——あの香りは  
私を魅了する——

とやま・かづひこ

本業のほうの、宣伝技術書を高いところから取ってもらったために、顔なじみのみよちゃんを呼ぶ。「ハイ……」と答えた彼女が、例

散歩のついでにH書店へ立寄る。学生街のワセダでも、本の数では一番のH書店は、昼も夜も大繁盛である。店番の、みよちゃんは、小柄のきれいな女の子、背が低いので、上段の本を取るときは下の雑誌ダナの上に乗って手をのばさなければならぬ、だから、何かという

のとおり、ヒョイと雑誌の上に乗る、そのきれいな素足が、きょうは新刊の映画雑誌をギユウと踏んだ。多少、足フェチもあるかづひこが、このチャンスに逃がす筈はない。「ついでに、これももらおうよ」彼女が下りるのを待ちかねて、その雑誌も手に取ってしまう。「奥に、きれいながありますから……」「いいヨ、いそぐんだから！」あわてて、それをひったくり、表へ飛び出す。

(この雑誌が、彼女の足にふれたんだ)あふれる情感をおさえられず、みちみちソツとくちづけする。おみあしのウラへの間接のくちづけだ。

## 終章

獣を狩りたてるような声が追ってくる。やっと目の前が開けた。見はらしのきく所へ出たのだった。しかし、研吉がほっとするとたんに、後の足音が近づいた。「あっ！」

という悲鳴を残して、研吉の体はつきとばされて、前のめりに深い谷へ転り落ちていったのだった。

研吉は大町の病院で気がついた。

爺ヶ岳から少し下った藪の中に気を失っていたという。一週間も混沌とした状態がつづいていて、もう生命はないものと思われていたという。佐々成政の子孫が生きているといっても、誰も本気にしてはくれなかった。それは研吉が気を失っている間の夢か、妄想のたぐいだとわらわ山に妖気にあてられたのだろうか。病院の窓から仰ぐ北アルプスは、雪の衣をまとって、千古の謎を秘めているばかりだった。



ビニールを引いた、表紙には、おそらく、みちゃんの足のうらの脂とアカと、そしてにおいが移されているにちがいない。

### 少女の仕返し

作家遠藤周作氏の書かれるものには、目立って「固形物」をテーマとするものがあり、吾々として注目し価値すると云える。

この人が、目下（七月二十八日現在）内外タイムス紙に連載している『不法法随筆、狐狸庵閑話、なんじゃやら』というエッセイにも、再々固形が顔をだしてたのしませてくれる。なかでも七月十四日の少女の仕返しはとても興味があつた――。

そのあらすじは、つぎのとおり。

あるバアのマダム（年は三十くらい、顔のキリッとしたやせ形）の少女の頃の思い出で、

少女のころ、このマダムが近所の男の子にいじめられた口惜しさに、しかえしを考へる、いろいろと考へたすえ、ある日、肉屋で肉を包む竹の皮を一枚手に入れ、それをのばして、『……その中にアレをしてやったの、アレ？ 客は小首をかしげてマダムをみた。アレよ、ウソコ。へえ……』ということになり、マダムは、それをデパートの美しい包装紙で包み、リボンをかけて、男の子の遊ぶ路上にソッと置く。子どもたちがこれを見つけて『アッ、落ものだ、

デパートの包紙だぞ、なまアッたけ、なんだろな、なんだか柔らけえもんだぞ、開けろ、開けろ』ということになる。バリバリと包装紙を破り、竹の皮をあけて、ゲッ、ひゃあ、ウソコだ、くそだ、お前の指に黄色いのがくっついとるぞ、仰天し、騒ぐのを、彼女は物かげから、ニッコリと笑いつつながら見ていたというのである。

惜しくも、この項は、ここで終り、傍点がかづひこが、ふつたのだが、なまあたたかいと云わせるあたり、いかにも固形を生々と描写し、さすがだと思う。この作家に、大谷崎をしのぐ、コプロ小説を書いてもらいたいものである。

### 貼り札

バスを降りたところに薬局がある。そこに、短冊型の貼り札。何やら文字が書いてある。曰く、

検尿いたします

検便いたします

薬局のサービスとして、近頃これが流行しているということは、ある製薬会社のPR雑誌にて紹介されてあつた。

お医者さまと、薬局さんは、かづひこのあこがれの職業のひとつ。

お引受けした検尿材料も、その依頼者のいかに、吾々に、スリルと、魔の味を提供してくれるのだ――。

『それがねえ、からだのなかまで、ええ、ウンチや、オシッコまで、実にくわしく調べられるのよ、恥づかしいなんてものじゃないのよ、あたし、前の日に食べたモノまであてられて、参っちゃったわ』

これは、さいきん人間ドック入りした、ある画伯のマダムの秘話だが、かづひこだったら面倒な検査など必要じゃない。その『お味』を舌先でピタリと当ててみせるものを、まして、前の日食べたものなど、間違いなく当ててみせられるのに、とおもいつつ興味ふかく開いたのだった。

### ハンドバッグ

近頃、新宿の西口に、夜な夜な立つ女性でこれはと思う相手をキャッチすると、然るべきところにさそい、やおら、ハンドバッグから、ナワやムチを取出し、

『叩かせてくれたら、お小使いあげる』

と口説くそうな、これは、あるジャーナリストの話で、真偽は不明だが、ありそうな気もある。

ある娼婦をさそったなら、

『今夜は、あたし、あなたを買ったげる、あたしのいいなりになって……』

と、アベコベに、男を馬にしたり、タイコにしたり、あげくには嬉々として、便器にして、もてあそんだ女性に出会した、と、これは、同友、H君のはなし。





# フアンタジヤ・マゾヒスティカ 山本節夫

## 女性の話法について

日曜日の午近く、こどもの日とてラジオは坪田譲二の「善太と三平」の朗読だ。少し太目のよく通る声の主は夏川静江。

義絶関係にある祖父が馬に乗ってやってくる。三平はおじいちゃんの前輪で馬に乗せてもらう。この辺りで「馬の背にまたがって」「またがると」「どっかりまたがり」……四、五回美しい女性の声で「跨る」という発音がきかれて心持よかった。

三平は父から馬乗りを厳禁される。そこで家で飼っている牛を代用しようとする。牛の角をつかまえて「こら、おとなしくしろ、こいつめ」「そーいながら」「牛の首筋近くに馬乗りにまたがり」「やーい、牛乗りだい」

とはしゃぐが、牛がたち上って首をふると振りおとされて気を失う。

その夜はペギー葉山の出演で西部ものはつきりと「栗毛の馬にまたがって……」と歌われた。

ああ皆様方、読んだり歌ったりするだけでなく私めを馬にしてまたがって下さいませ。

「マゾ的替え歌黄色い桜んぼ」

(一) 馬乗り娘は ウウン

大きな男を ウウン

いじめて ウウン

なかせて

こいつめあたいの馬になれ

背中にまたがり ハイ

あんよでしめつけ シイ  
お尻をたたいて ドウ

ハイシ ハイドウ

ああお馬はいい 気持

(二) お馬のお首に ウウン

どっかとまたがり ウウン

いばって ウウン

しめつけ

やいこら やせ馬 まいったか

お顔にまたがり キュウ

お腿でしめつけ ギュウ

息の根ふさいで バカ



キユウ ギユウ バカく

ああ 顔乗り たまんない

## 架空インタビュー

(記者) 一般に馬乗り姫方は対象の男性をいじめる場合、或る程度の抵抗があることを喜ばれる様ですが……。

(馬乗り姫) そうね、たしかに、それは事実だわ、だけど、全然逆のケースもあるんじゃないかしら。

(記) と申しますと?

(姫) つまり完全服従 完全無抵抗の状態ね。相手が全く意志というものを失って、いわば無生物化しちゃうとでも表現するかな。

(記) もう少し、具体的にいつて頂きたいのですが。

(姫) 例えば退屈して急に馬乗りがしたくなる様な場合があるでしょ、そんな時にぐっと一睨みして、私の前に正坐してかしこまっている奴の首すじに無難作にまたがっちゃう。そうすると奴隷は自然に四這いになって馬になるわ。そうしたら一たん首から降りて、じつとくまる馬の背中にどっかり馬乗りになってハイシノと責めてやる。

(記) ははあ、仰せの通り全然抵抗なしですね。

(姫) そう、馬乗りに限らないわ、どういう風に料理してやろうかと考えながら上から見据えてやるでしょ。相手はもう諦め切った顔をして無気力な淋しそうな眼で女王様を上目づかいに見上げている。よし、顔乗りだときめて足であごのあたりを蹴上げてやると、降参した犬が、手足をすくめて地べたへ寝ころぶ様に仰向けに寝るわ。そいつの上にかまわずに大股ひらいてまたがって、おもむろにどしんと乗っかっちゃう。じいっと我慢して女王様の重みを顔一杯うけとめている奴をわざと力んでうんうんと押え込んでやると、さすがに苦しがってものがくでしょ。それがきつかけよ。〃こいつめ、抵抗するか、もがくと承知しないぞ、おとなしくしないか〃そういういながら股に力を入れて顔と首すじをはさみ上げてやる。

(記) いわば抵抗の動機を女王様の方でつくられる訳ですね。

(姫) 〃う、その通り、お前はなかなか判りがいいわ、可愛がって上げようか。

## 一里バツタリ

週刊誌をよんでいたら、こんな見出しにぶつかった。競輪女選手が自転車に跨ってペダルを踏んでいるとサドルとの摩擦で一里も走るとバツタリとまってしまうというという記事が内容で、引用として、だから乗馬の際も女性用の鞍は、またがらぬ様横乗りになっていると説明があった。

## 広重

江戸時代、大井川や阿倍川での川越えには人の肩によったということはよく知られている。〃私のキタ・セクシュアリスで明日待子が舞台の上で川越人足に肩車して出てくる場面を紹介したが、広重の有名な東海道五十三次には二、三興味ふかい画面がある。府中(今の静岡)の宿附近が多いのだが、女性が肩車で川をわたるところがある。

中でも面白いのは肩車に乗る手順で、之は残念ながら男性の客だが、大股に足をひらいて立つ、その股の間を、後から人足が四這いになって首を突込むのである。遠景になるとまるで馬にして首乗りをしている図と間違えそうでもある。恐らく女性もこの恰好で肩にまたがったものであろう。庶民の女は知らず奥女中クラスになると相当いばって乗った



たのではあるまいか。

「こりや下郎、しっかり歩け」

「お藤さま、わらわの馬はなかなか乗り心地がよろしゅうございます」

多勢が喜々として打またがり川を渡った事であらう。

### 象徴詩「バァー」

夕方六時。

盛装をこらした女騎士達はきりっとした乗馬靴に身をかため

拍車の光もまばゆく、手には鞭を持ち放牧の馬達の帰りを待っている

やがて美しい騎手達の巧みな責め

にあこがれて、男馬どもが二匹、三匹牧場の柵に戻って来る。

騎士達はすばやく裸馬にひらりと

またがり、手綱をかませ、脚でしめつけ

首に平手打ちを喰らわせ、打跨った

まま、水々を飲ませる

なかには云うことを聞かない馬もいる

そんな時は騎士達は力を合わせて

或は二人でまたがり、或は三人で押えつけ

それでもいけない時はソファァーに組み

伏せ、腹乗り胸乗り、首乗り、

顔乗り思いのまま。やがてあわれな

降参の声を股の下に聞きながら

女騎士は馬上ゆたかに乾杯する

馴れた馬は面白くない

騎士達はたっぷり水を飲んで、責めぬかれてヒョロヒョロになった馬の背に跨り

拍車をいれながら、もっと張りのいい馬の来るのを待っている。

そして新しい馬が入口にくるや否やすばやく乗り替えて乗り潰してしまふ

女騎士達の女王様は全ての馬を征服

する。それも一匹ずつ、一寸の間

跨ってやつてお情けをかけてやるだけだ

すでに乗り潰されて重い乗り手を背中

にハアハアいつている奴の首筋に

ほんの一寸、跨ってやる。ただそれ丈で

馬は無上の幸福感を味う。

もっとも特に御氣に入りの馬やどうしても

つかまりにくい馬の時は女王様が妙技を

お振いになる、それはすばらしい高等

馬術。どんな馬でもすぐにおとなしく

なるから不思議である。

### 幻想

ウィークデーの馬場には人が居なかった。

漸く昼に近い初夏の太陽が樹々の緑に映えてさわやかそのものであった。若駒、晴海号の

歩みも軽快そのものであった。広い馬場でただ独り思いきり馬を走らせる醍醐味に私は酔っていた。

その時、厩舎の方から馬場に乗り入れて来る一人の女騎士があった。まだ十七八才であ

ろうか。乙女の固さを尚残しながらどこかに肉づきのよい柔かさもあるという、そんな年

令であった。無雑作に束ねた髪も形よく、その下に白晳な明眸皓齒がくっきりうつり、姿

体の線もすっきりと品よく、胸をはって正規の乗り方であった。新調に近いのであるう

か、ピンク色の上衣も、白い乗馬ズボンも、真赤な乗馬靴もピカピカであった。

馬は栗毛の紅花号と思われ、ゆったりとした歩き方が、それと知れた。乗り手はややギョ

チなく並足で馬場を一周したとみると拍車を

入れて速歩にうつるかにみえたが、馬は云うことを聞かなかつた。馬場の真中で立往生の

形になった令嬢は美しい額に眉をよせ、拍車



をいれつづけ手綱をひくが、どうしても馬は動かない。私は馬を近づけて軽く会釈をしなから、

「動きませんか」と声をかけた。

「うん、こいつ、ちっとも云うことかかないの、コラ、ハイシ、ハイシ」

「一寸おまちなさい。手綱をゆるめ具合にして、そう、拍車がそれでは当たっていません。かかとの先を内に向ける位にして、そうそういいですか、一むちくれますよ」

私が鞭の音をさせると、馬はやっと動き出した。暫く速足をつづけた馬はまた停止してしまった。令嬢は今度はじっと馬上で跨ったまま私が近づくの待っている様であった。「馬が少し疲れている様ですね、私の馬に乗って御らんになりますか。それより少し若いし調教もいいですから」

令嬢は「うん」と軽く頷くと下馬した。

私も急いで下馬すると紅花の手綱をとり柵に結ぶと、晴海の轡を持って御乗りになるのを待った。令嬢はヒラリと跨ると、脚を開いたまま「鎧!」とひとこと。あぶみを直せとの命令に私は慌てて調節する。鞍の上で体をきめると

「この馬、ほっそりして、またがり具合がい

いわ。さあ走るのよ」

そういつて拍車で馬腹をけると馬は勢よく走り出した。勿論、紅花とて私が御せばなかない馬だ。二人はぐるぐると馬場騎乗を楽しんだが令嬢の方はまだ初歩とみえて馬に引きずられている形だった。

やがて二人は殆ど同時に下馬したが、令嬢は「着替えてくる」といつてロッカーにはいる。その間、私も服装を替えて待っていた。涼しそうなワンピースに着替えた、その人は一入美しく見えた。

「こちらにはよくお出かけですか」

「もうどれ位乗馬していますか」

という話しかけたが返事はなく

「名前は？」

とひとこと。

「山本と申します」

「ふん、家は」

「青山の方で」

出口にいくと大型のキャデラックがまわっていて、きびきびした青年が戸を開いた。令嬢はまごつく私にあごで乗れという仕ぐさ。私は遠慮しつつも何か抗し切れないものを感じて前部にはいこんだ。令嬢は後部のシートに独りふかぶかと身を沈めて「ギンザ」プルニ

エにつくまで一言も会話はなかった。いきつけの所らしく応待も丁寧。静まった別室でおいしい魚料理が数々出された。固くなりながら私も御相伴していると

「さっきの馬ったら、ほんとに乗りいいわ、あんな馬を買おっと」

「はい、でも初めの方も乗り方によってはい馬です」

私はつい余計な事をいつてしまった。

「山本、お前は一寸生意氣よ、覚えてらっしゃい」

私はその涼しい瞳にいくめられて頭をたれた。デザートになると令嬢は美しい手で煙草を一本ケースから出される。すかさずライターをつけておつけするが、ありがとうひとついつてくれない。

再び車に乗ると、白銀三光町附近の静まった邸宅の前でとまった。大きな表札には「伊達」とだけ書いてある。ついて来いという合図で御供すると大きな玄関、女中、書生五、六人が式台に手をついて

「おひいさま、お帰り遊ばせ」

おやおや、お大名の御邸へまぎれこんでしまったらしい。

広い応接間に独りポツンとまたされること



約半時間。ショートパンツ姿の令嬢がお出ましになった。

「さっきの仇をとってやる。こっちへおいで」  
長い廊下をぐるぐる廻って広い屋内運動場の様な所になると、先にきて待っている女中に「馬の用意」と命令される。あっけにとられている私を尻目に女中はビシビシと私の服を脱がせ、両手を特製三輪車にくくりつけ、背中には鞍を置く。その間僅かに二、三分。令嬢はいつ現われたのか、さっきの書生の一人の肩車にまたがってしずしずと歩ませながら馬にされる私を見下していたが、「準備出来ました」という女中の報告に「よし」とうなずき、しゃがんだ書生の首から下りると私の横につかつかと進み、  
「山本、覚悟はいいか。私の乗り方がうまいか下手か思いしらせてやる」

そういうしながら、ヒラリと背中にまたがると、ぐいと手綱をしぼり、両の脚で之でもかと私の腹を締め上げ、鞭でビシビシと尻を叩き始めた。

「歩け、もっと走れ、コラ、ハイシ、ハイシ」  
そのすさまじさ。私は無我夢中で汗を流しながら広いマホガニー敷きの部屋を走り廻った。

その中に疲れの為か足がもつれて片膝をついてしまった。乗り手はガクンとゆれたが、それでも、しっかりとまたがって落馬はしなかった。

「こいつ、よくもやったな」

令嬢は鞍から尻を浮かせて私の首つ玉にまたがると全身の力でエイエイと押えつけ、鞭で脇腹や肩の辺りを打ちのめした。スラリとした裸の太腿と両脚が小気味よく私の頬の両側にのび切って、それに時折り力が加えられた。ぜいぜいと息を切らす馬の額から滝の汗が流れた。

「今度つまづいたら生命がないぞ」

やっと首乗りを許され、またまた背中に馬乗りされて、ハイドウハイドウと乗り廻され心臓が破裂する寸前に、やっと人間馬から解放された。それでも令嬢の運動欲は、まだみたまされないらしく

「西川、少しせめてやる。馬になれ」

西川とよばれるさっきの書生は「ハッ」と答え、例の女中は再びテキパキと馬装準備をする。西川君は毎日調教されているのか、なかなか巧みな人間馬ぶりで、乗り手の呼吸ともピッタリ合ってまことに美しい眺めであった。人と馬と一しきり疾走すると、片隅の扉

の影に消えてしまった。私は風呂場に案内された。女中（といっても目もと涼しい理智的なお嬢さんだが）にお二人の行方をきくと、  
「頭のめぐりが悪いのね、これよ」

そういつつ彼女は私をひざまづかせ、その前に立ちほだかり、片足を私の肩にかけると、全身で押し倒し、顔の上にピッタリとまたがった。アッと驚いているすきに彼女はひらりとスカートをはくがえすと戸口から消えた。

令嬢にお会いしたい時は週末の午前例の馬場に行けばいいのだ。その日は他のお稽古ごとがないからだ。いまでは私も西川君や瀬口君並に紀子御嬢さまの愛馬の一匹に数えられている。ちなみにあの女中さん——君子さんとも時々デートをしている次第である。

### 「跨り動作」の意義

月刊誌「写真サロン」の五月号に西南アフリカの或る種族の生態のルポがある。その一葉に「レスリングの勝者」というのがあり、大柄な土人が素っ裸で之も裸の仲間が地面に四這いにかがみこんでいる。その首の上に悠然と馬乗りにもたがっている写真があった。説明がないので情景はよく判らないが、馬乗



りに乗っかっているのが勝者であることは間違いない。馬になっっているのが敗者かそれとも単なる仲間かははっきりしないが、問題は、どうして勝った者が相手の首の上にいぼってまたがらねばならないかである。背景には部落民の見物がたくさんおり、すぐ横には若い女達が英雄のまたがりっぷりをうれしそうにみ上げている。未開人のこの様な行動は文明人の意識下にも潜在しているのではあるまいか。

猿——未開人——小供——文明人

この体系で馬乗り動作が征服という抽象概念を象徴するのではあるまいか。

× × ×

「跨る」＝脚の間に挟んで乗る。

「脚の間」＝最も汚れの多い部分であると共に反面最も神秘的な部分。

× × ×

故に征服は跨ることによって……。

ああ、私の拙い論理は之以上にはつづかな

い。またがられたい。馬にされたい、美しい女性に。

### 韓信の故事

「股くぐり」といえば支那の古典で有名な韓信のそれがある。之などは前回に記した「脚の間」の解釈のうち前者の方であろう。一番不潔とされ、人には見せない箇所の下を、一番尊い頭を先にして、しかも犬の様に地面をはってくぐり抜ける。その屈辱の裏を返せば

「力あるもの」「強きもの」「勝利者」は傲然と脚をひらいてつつ立ち、自分の股倉の間をくぐらせる事によって征服感、勝利感に酔うのである。馬乗り姫は云う。何遍もくぐらせる間には、一度ぐらいいは腰をおろすのでもいい。首の上なら首乗り。背中なら馬乗り。またがったら馬なみに歩かせてもいいではないか。いうことをきかなければそのまま潰してしまえばいい。相手は弱いのだ。うつぶせにして背中に乗ろうが、俯向けにして腹や胸に

跨がろうが構うことはない。料理は御心次第、いっそ顔の上に馬乗りして窒息させてやれ。「ありがたいと思え。奴隷め、おなさをかけてやるのだぞ。さあ、之でもか、畜生。尊い女神様のお尻の下で往生しやがれ」

× × ×

この頃の若い女性はスタイルもいいし、活潑だ。電車をまつ間でも両足をそろえておとなしくうつむいてなどいない。思い切り脚をひらいて、短いスカートをなびかせて肩で風をきっている。

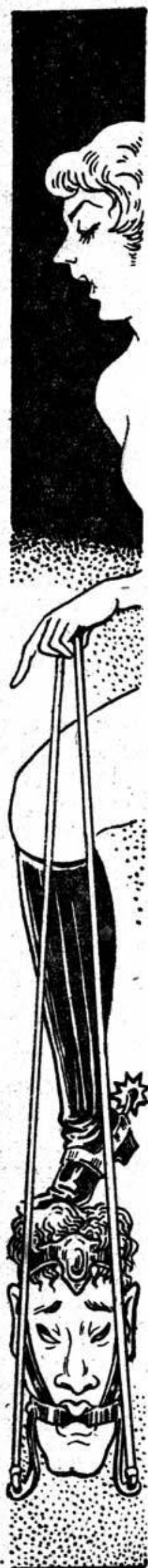
「どう、そのマゾ男。私の股をおくぐり、馬にして可愛がってやるわ」

そういつて、私をまっぴらっしゃるのではないかという錯覚につい陥ってしまう。

股をおくぐるのは韓信と同じ男でも、現代ではくぐらせるのは女性なのである。

そして私は、このように活潑な女性の股の下をくぐりたいと願っているのである。

(この項終り)





懸賞応募作品

柔<sup>やわ</sup>肌<sup>はだ</sup>地<sup>じ</sup>獄<sup>ごく</sup>

花 卷 京 太 郎

## お美津の受難

「成程、いや、旦那の話は、よくわかりやした」

助五郎は、大川義十郎の杯に酒を満たし、大きくうなずいた。

「その、お美津という娘と、清次郎という若侍、必ず、二三日のうち、ひっ捕まえて、御連絡致しますから、万事この助五郎に任しておいておくんなせえ」

助五郎は、先程から酸っぱい顔をして杯に口をつける知行所役人の義十郎を元氣ずかすようにいうのである。

助五郎——この飯岡に三百からの乾分を持ち、近郷近在の渡世人誰一人として楯つく者はないだけの勢力を持つに至った彼だが、この義十郎の頼みだけは、どうしても聞かなくてはならない。というのは、助五郎は、ちょっと前に、この義十郎の世話で、銚子の陣屋

から、十手取縄を預ることが出来、いわゆる二足の草鞋をはく渡世人となったのである。

何しろ、賭場を持ち、喧嘩を売物にして勢力を広げていく人間が、自分是他人のそうした行動を取締り、検挙することが出来るという権限を握ったのだから、当然、十手風にものをいわせ、色々と我儘が振舞えることになる。そういう点で、義十郎に対しては、助五郎は心から感謝しているのだった。

折入って、頼みたいことがある、と突然、知行所の義十郎が助五郎の家を訪れたのは、こういうわけだ。義十郎は、三浦の鳴海屋という海産物問屋の一人娘、お美津と祝言し、鳴海屋の入贅になることになっていた。が、それは、親同士のきめた話で、お美津は、徹底して義十郎を嫌いぬいていた。嫌いぬくのも無理はない話で、お美津は、三浦小町とまでいわれるほどの器量良し、それにくらべて



義十郎の方は、物凄くあばた面、鼻は、ゆがんで天井を向き、金壺眼は、両眼とも、どちらを向いてるのかわからぬという醜男で、男でさえも、彼と一緒に飯を食うと飯がまずくなる、とかげ口をいつている。だが、義十郎の方は、お美津と見合いをしてからというもののは、それこそ、寝ては覚め、起きては、うつつ幻の、というわけで、お美津の美しい容貌が一時も脳裡から消えたことはなく、ほとんど毎日恋々とした手紙を書いて三浦へ送り、それは、はた目にはいじらしい位のものだったが、勿論、お美津の方からは何らの返信もない。そうしているうちに、今度は、お美津の父親、卯兵衛から、婚約解消致したし、との通知が来た。卯兵衛にしてみれば、可愛い一人娘のお美津が、それ程、毛嫌いする男を無理にまで押しつけたくはなかった。だが、義十郎は、卯兵衛の手紙を読んで、体を震わせるほどに怒った。それでは、約束が違ふと、お美津の不実、卯兵衛の変心をとがめ、使いをたてて、鳴海屋とかけ合ったが、卯兵衛が答えるには、娘は、清次郎という寺小姓と駈落ちをしてしまい、家には居らぬというのである。卯兵衛にしてみれば、そうでもないわなければ、おさまりがつかぬと思ったのであろうが、義十郎の使い、仲間の勘助が念入りに調べたところ、お美津と清次郎が駈落したというのは、やっぱり事実であるらしく、前々から二人は人眼をさける仲であって、二人が駈落するのを卯兵衛は黙認というより、むしろ、援護した形であつたらしい。

使いから戻った勘助の報告を聞き、義十郎は狂わんばかりに激怒した。更に、勘助のいうには、卯兵衛は、昔、笹川の繁蔵の面倒を見たことがあり、そうした関係から、繁蔵に手紙をやり、お美津と清次郎をどこかへ隠させているのではないか、ということである。

それで、義十郎は、飯岡の助五郎に頼む気になったのだ。

「お美津は、俺を裏切った憎い女だ。今更、よりを戻そうなどと考へぬが、裏切者に制裁を与えねば、俺の腹の虫がおさまらぬ。察してくれ。助五郎」

義十郎は、そういう風にいうのだった。

助五郎は二つ返事で引受けた。

先にも、いったように、この義十郎には、十手捕縄預りの恩義がある。それに、どうやら、お美津と清次郎をかくまうのは笹川の繁蔵。最近、めきめきと売り出してきた渡世人で、一度、何かのきっかけで、出鼻をくじいてやりたいと思っていた男でもある。

義十郎が帰ると、助五郎は、さっそく、五人の乾分を笹川の方へ隠密に出した。夕方になると、助五郎は、妾の一人、お銀のところへ行き、酒を飲み直すのである。

考えてみれば、義十郎も、哀れな男だと、助五郎は、何となく、義十郎と自分とが、よく似ていると思うのであった。というのは、助五郎も、一人の女に、義十郎以上に狂うほどのぼせたことがあった。それは、お浜という元は掛茶屋に働いていた女で、その妖しいまでの艶々しさは、今もはっきりと助五郎の脳裡にきざみこまれている。そのお浜は、助五郎を嫌い、利根川を越えて、笹川に走り、今は、繁蔵の世話になって、小料理屋の女将におさまっているということだ。いくら何でも、人の女になったお浜を利根川を渡つてまで奪いかえしにいく事も出来ず、そのままになったが、当時の腹立たしさは今もはっきりと胸に残っている。それだけに、笹川の繁蔵に対する憎しみも大きいわけだ。

「お前さん。また、お浜のことを想い出しているんだね」



お銀に凶星をさされて、ぼんやり、畳の上に眼を落としてい助五郎は、ハッと首をあげた。

お銀は、皮肉めいた笑い方をして、

「ほんとに、あのお浜というのは、女の私が見ても、惚れ惚れするような、いい女だったからね」

といった。助五郎も、苦笑いして、

「ま。お浜に逃げられて、かえってよかったと思うよ。お浜のかわり、おめえのような、気つぶのいい女を手に入れることが出来たんだからな」

「まあ、今夜は、お口のお上手なこと」

お銀は笑って、助五郎の膝にしなだれかかるようにし、助五郎の杯を口にするので、そこへ、

「親分」

と、乾分の一人、源太という男が、庭の方へ廻って、膝を折り、障子越しに助五郎を呼ぶのである。

「只今、帰って参りやした」

「おう。馬鹿に早えじゃねえか。首尾はどうだった」

「へい。お美津という娘、連れて参りましたが――」

「なに。お美津を連れて来た」と。

助五郎は反射的に立上り、障子を開け、縁先へ出た。



五郎重

見れば、庭の柴折戸のそばに一挺の駕籠が置かれ、屋間、笹川へ隠密に出た乾分四人がその駕籠を取囲むようにして控えている。

「お美津は、あの中か」

「へい。左様で」

源太は仲間のところへかけ寄り、駕籠に巻きつかせてある縄を下



スで切つて、ふたを開けた。艶のある、黒々とした高島田の髪は、無残にがっくりとくずれ、黄八丈を着た、お美津が、嚴重に猿轡をかまされた上、荒々しく後手に縛られて入っている。雪のようにスベスベした首筋をはっきり浮き立たせた桜色の艶めかしい鹿の子絞りの半襟も乱れて、それは、ここまで連れて来られるまでの激しい抵抗を物語っている。

富士額で、にじんだような眉をしている、お美津は、成程、三浦小町と騒がれるだけの美人で、義十郎が、あれほど、カンカンにほせ上るのも無理はないと助五郎は思った。

「とにかく、土蔵の中へ運んでおけ。大事な娘なんだから、粗末にあつかうんじやねえぞ」

そして、この連中の中では、兄貴株の源太に、

「御苦労だった。まあ、上って、一杯やれ」と座敷へ上らせる。

源太の説明によると、ちょうど、今日は、笹川諏訪明神の祭礼で、お美津が清次郎と一緒に、境内の夜店を見て廻っているところを見つけてあとをつけ、お美津が人混みの中で清次郎とちよつとはぐれた隙につけこんで、清次郎はこっちにいる、とだまして、連れ出し、うまく舟の中へかつぎこみ、ここまで運ぶことが出来たというわけらしかった。

「そいつは大手柄だ。まあ、一杯やんな」

大機嫌の助五郎は源太に酌をしてやる。

「ところで、親分。あの娘を義十郎旦那のところへとどけるのですか」

源太が杯の滴をきって、助五郎へ返し、酌をしながらいうと、

「うん、とにかく、義十郎旦那にあ知らせなきゃならねえが、あわてることもあるめえ。二三日、こつちで預っておこうよ」

意味ありげにニヤリと笑った。色好みの親分を知っている源太は、ちらと台所の方で、酒の燗をしているお銀の方をさぐるように見、

「成程、えっへへへ」と嫌な笑い方をするのだった。

### 生き弁天の開帳

一方、助五郎の命を受けた乾分達は、お美津を肩の上へかつぎあげ、柔肌の感触を楽しみながら、土蔵の中へ運び入れていた。

「宿場の女郎なんかと違って、さすがに、大家のお嬢さんだ。いい匂いがするぜ。畜生、たまらねえや」

野卑な男達は、そんなことをいいながら、肩の上のお美津をごろりと土間の上へ転がす。

着物の裾がはねて、真白い足が艶めかしく見えた。お美津は、恐怖に眼を大きく見開き、周囲の男達を睨むように見るのだ。

一人が、外れかかっているお美津の猿轡をしっかりと締め直し、

「ちよつと、触って、楽しむぐらいならいいだろう」仲間の者達の顔を見、上体を起こして後すざりするお美津のふくよかな肩をつかんだ。

「う、うう」

お美津は猿轡の中で、声にならぬ悲鳴をあげる。一人がお美津を横倒しにし、必死になって体をくの字に曲げるお美津を別の一人が両足首を抱きかかえるようにして、真直にのぼしてしまふ。

「ふふふ、どうでい。暴れられるものなら、暴れてみな」



上体を押さえつけている一人は、お美津の乱れた襟の間に毛むくじやらの手をさしこもうとするのだ。

お美津は、狂気したように体を悶えさす。

「可愛い顔をしているくせに案外、力は強いんだな」

ばたばたさせる足を押さえこんでいる男は、お美津の裾を割って、手をさし入れようとした。

「あっ、親分！」

お美津を騷りものにすることで夢中になっていた一人が、何時の間にか土蔵の中へ入って来ている助五郎と源太の二人に気づき、バネのように飛び上って叫んだ。他の連中も、ハッと我にかえったようにお美津の体から手をひっこめる。

皆、助五郎から頭ごなしに叱りつけられると思って、体を硬わばらせて突っ立ってしまったが、助五郎は、思いの外、上機嫌で、横倒しにされたまま、髪の毛を震わせて、この屈辱に泣きじゃくっているお美津の傍にしゃがむのであった。

「お嬢さん。お前さんと一緒に駆落して来た清次郎という若けえ男は、何処にかくまわれているんだえ。今のような目に逢いたくなくちゃ素直に答えるんだな」

助五郎は、お美津の頬に喰いこんでいる猿轡を外してやる。

お美津は、恐怖にひきつった顔をし、

「ど、どうして私をこんな目に逢わすのです。帰して、帰して下さい」

だが、助五郎は、ニタニタ笑いながら、

「わっしは、義十郎旦那に頼まれて、お前さんをここへ運びこんだのさ」

義十郎と聞くと、瞬間、お美津はハッと青ざめた。それを見てとった助五郎、なおも、ねちねちした口調で、

「死ぬほど惚れたお前さんを、義十郎旦那は清次郎っていう青白い侍に寝取られたってわけだ。不義は天下の御法度。二人揃って、義十郎旦那の御仕置を受けなきゃいけねえ」

「嫌です。そんな無法なこと！」

「さあ清次郎は、繁蔵の奴に何処へかくまわれたか、それを白状するんだ」

「知りません！」

お美津は、恐しさに肩を震わせながら、しかし、きっぱりした口調でいい切った。

「そうかい。俺は義十郎旦那の許しを得てるんだ。どうしても白状しねえと痛い目を見なきゃならないが、それでもいいか」

助五郎は舌打ちしていったが、お美津は固く唇を噛み、うつ向いてしまっている。

「仕方がねえ。なるだけ俺は荒療治はしたくねえのだが……」

助五郎はニタリと顔をくずしていった。

「おい。野郎共、このお嬢さんの着物を脱がしな」

ぼんやりと突っ立っていた乾分達は、待ってました、とばかり、お美津に襲いかかる。

「なにをするのです。は、離してっ」

悲鳴をあげて、お美津は後ずざりをしたが男達の毛むくじやらの腕は、お美津の両肩、白くすべやかな足首をがっしり押さえこんでしまった。

一人が、お美津の帯を解き、くるくるまわして外し取ると、パッ



と横手へ投げ、続いて緋のしごきも解き離してしまった。幾つもの腰紐が男達の手で次々とほどけていく。お美津は血が逆流するような恥しさで、

「助けてっ、清次郎さま、助けて！」

と絶叫する。

「その清次郎の居所をいわねえから、こんな目に逢うんだ。恨むなら、清次郎を恨みな」

助五郎は、せせら笑うようにいう。

男達は、一旦、お美津の縄を解く。自由になった手で、お美津は必死になって、はだけた着物の前を合わせようとしたが、そうはさせじ、と身をちぢめるお美津の後襟を屈強な男達の手がからみ合っ

てつかんだ。

「や、やめて、かんにんして！」

お美津は、あえぐようにして叫んだが、男達は、ひっぺ返すように黄八丈を剥ぎ取った。燃えるような緋の長襦袢が男達の眼を刺激し、一層彼等を狂暴なものにする。帯は、すべて抜き取られているため、大きく割れた長襦袢の裾から、雪をあざむく脛腓がこぼれ出

ていた。ごくりと唾を呑みこんだ助五郎は、

「かまわねえ。その長襦袢も剥いでしまいな」

その言葉を待つまでもなく、乾分達は、お美津の身から長襦袢、

そして、肌襦袢まで剥ぎ取ってしまった。

気が狂うばかりの羞恥にお美津は必死になって身をちぢめ、双つの乳房を片手で隠し、片手は、最後の楯に残った、たった一枚の湯文字の紐を押さえている。

「さすがは、大家のお嬢さんだけあって、きれいな肌をしていやが

る。それに、どうでい、このいい匂い」

男達は、思わず手を休め、ふくよかな雪の起伏をしぼし、蕩然と見つめるのであった。

お美津は、うつぶしたまま、肉ずきのいい肩を震わして屈辱に泣きじゃくっている。乾分の一人が、そっと、手をのばして、お美津の薄紅色の湯文字をいきなりひき剥がそうとした。お美津は、わあっと泣きながら、その手へ噛みつく。いてっ、とお美津に噛まれた乾分が顔をしかめて飛び上ると、助五郎は、笑いながらいった。

「なかなか気の強いお嬢さんだ。野郎共、暴れられないようも一度この娘を縛り上げな」

承知しやした、と源太が麻縄を取って、お美津の背後にまわった。

「何をするのです。嫌、嫌」

お美津のふくよかな白い両腕は、乱暴に源太のため背後にねじ曲げられる。

「誰か来て、助けて！」

お美津は狂気したようくずれた長い黒髪をゆすって叫ぶのだったが、腕を伏せたような形のいい乳房の上下には、どす黒い麻縄が情容赦なく二巻三巻と嚴重にかけられてしまった。

「ふふふ、お嬢さん、もう観念するんだな」

源太に縛りあげられたお美津が、再び、がっくり頭を土間に落とし、すすり泣きを始めると助五郎は淫らな笑いをしているのだった。

「どうでい。清次郎の居所をいう気になったかい。お美津さん」

助五郎にしてみれば、お美津がなおも強情を張りつづけてくれたほうが、楽しみが長いだけに、あっさり口を割られることを恐れている。



泣きじゃくっていたお美津は、ふと首をもたげ、美しい眉をキリリとふるわせていった。

「貴方達は、清次郎様をどうしようというのです」

お美津は我が身より清次郎のことを気にしている。どんないい男か知らないが、こんな可愛い娘によくもそこまで惚れられたものだ。助五郎は、妙にヤキモチめいた気分になってきて、

「知れたことよ。清次郎って奴は、人の女を盗んだ罪で、一寸試し、五分試しの鬨り殺しさ。お前さんは、義十郎さんと嫌でも、この土蔵の中で夫婦の契りを結び、義十郎さんを鳴海屋の賀養子にするんだ」

「嫌です。そんなこと死んだって——」

「まあいい。俺達は、お前さんがウンと返事するまで折檻をつづけるだけさ」

いくら助五郎でも、義十郎の想い女に手をつけるわけにはいかな。いから、清次郎の隠れ場を白状させるという名目で、淫虐な責めをお美津に加え、楽しみ抜こうというはらなのだ。

そのまま、お美津は、土蔵真中の大黒柱に立ったままの姿で縛りつけられた。髪の毛は切れ、房々した長い黒髪は、むっちりとした双つの乳房の左右へ垂れ下がり、薄桃色の簪や銀色の櫛が、柔肌を伝わって、お美津の可愛い足首の上に落ちた。

宿場女郎の荒れ果てた肌かしらぬ助五郎の乾分達は、深窓に育った箱入娘のキラキラと輝くばかりに白い肌を正面から見、皆、口のなかをカラカラにして呆然としてしまっている。

「おい、三吉、拾三、手前達、お銀のところへ行って、酒を取って来い。手前ら、この娘を首尾よく運んで来た褒美に、今夜はゆっく

り生き弁天を拝ませてやらあ」

助五郎にそういわれると、さすがに親分はものわかりがいい、と乾分達はいそいそとして酒盛りの支度を始めるのだった。

百目蠟燭が、お美津の足の周囲に二本三本と立てられて、ぬめぬめとお美津の肌を薄桃色に照らすのだ。

助五郎は、乾分の一人に注がせた茶碗酒を飲みながら、どっかとお美津の前にあぐらを組む。乾分達も助五郎にならって、皆、お美津をとり囲むようにしてあぐらを組み、お美津を酒の肴にしながら酒をくみ合うのである。

「お美津さん、お前さんはもう清次郎と出来てるのかい」

助五郎は、茶碗酒を手を持ったまま、のっそりと立上り、がっくりと首を垂れ屈辱にすすり泣くお美津の頬を指でつつき、白い顎に手をやって、ぐいと正面を向かせる。唇を血の出る程噛み、しっかと閉じたお美津の長い睫毛には、しっとりと涙がにじんでいる。

お美津は、体中に這いまわる助五郎の視線を必死にこらえるより仕方がなかった。背に縛り合わされている手を汗ばむ程、固く握りしめ、羞恥をこらえている。駈落したとはいえ、お美津は未だ清次郎に肌すら見せていない。それを、こんな野卑な男達の眼に晒らされている口惜しさ。お美津はキリキリと歯を噛み鳴らし、嗚咽するのだった。

「全くの上玉だ。何だか、義十郎の旦那に手渡すのが惜しくなってきたぜ」

助五郎は乾分達の方を見て苦笑した。

「親分、つまみ食いという手がありやすぜ。丁度、この土蔵の二階には、おあつらい向きの布団が一重ね積んであります。何なら、こ



五郎 画



のお嬢さん、二階へひっかついで行きやしようか。どうも、このままじゃ、親分、体に毒でさあ」

源太が世辞笑いをしながらいった。

助五郎、我が意を得たとばかり、ニヤリとしてうなずき、

「じゃ、手前達は、ここでゆっくり飲んでいろ。俺は、二階で、

ちよつとこの娘と遊んで来る」

そういうと助五郎は、お美津の縄尻を大黒柱から外した。

「やめてえ、お願い、ああ、誰か来てえ」

お美津は再び、縛られたままで、一旦は助五郎の手の下をくぐって逃げたが、すぐに源太に縄尻をひったくられ、助五郎の大きな体の中に抱きすくめられた。そのまま、助五郎は軽々とお美津を肩の上へかっぎあげる。

「さあ、二階で、ゆっくり料理してやるぜ」

助五郎が二階へ上ろうとした時、いきなり、ガラリと土蔵の網戸が開いた。

### 木馬 責め

「あっ」

助五郎は、お美津を肩にしたまま、突然、土蔵の中へ侵入して来た人物に驚き、棒立ちになってしまった。助五郎の乾分達もギョツとして、立ちすくむ。

助五郎の妾、お銀の背に短銃をつきつけながら、髪の上に手拭を垂らした一人の年増女が入って来たのだ。

「お銀さんの命が惜しければ、お美津さんをこちへ渡すのさ」女は助五郎に向かってそういった。

「て、手前は、お浜だな」



助五郎が驚いたのは、短銃ではなく、相手が、かつて、自分肘鉄を喰らわして、笹川方へ走ったお浜であったからだ。

笹川の繁蔵の世話で、小料理屋を持ち、ここ一、二年、水商売で磨きあげたお浜の皮膚は、以前よりもずっと艶っぽくなった感じ、助五郎はお浜の持つ短銃など気にならず、妙に懐かしいような気分になってきた。

「久しぶりだな、お浜」

助五郎は、ようやく、肩の上のお美津をごろりと土間の上に転がして、不敵な笑いをし、お浜を見る。

「なるほど。おめえが繁蔵に頼まれて、このお美津と清次郎を預っていたというわけか」

「そういうわけさ、助五郎親分」

お浜は、短銃を抜目なくかまえながら、

「繁蔵親分に頼まれたお嬢さんを色気狂いの助五郎親分に奪われたとあっちゃあ、女の私だって、顔が立たないからね。清次郎さんと二人で奪いかえしに來たのさ。清次郎さんは助五郎親分の御本宅、私じゃ、御妾宅と、二手にわかれて來たのだが、やっぱり、この土蔵だったのか」

お浜は、座敷にいたお銀を短銃でおどして、ここへ案内させて來たものらしかった。

「仕方がねえ、あっさり俺はカブトを脱ぐぜ」

助五郎は、土間に横倒しになっているお美津をひき起し、ドンとお浜の方へつき出す。

「畜生、何て、ひどいことを——」

お浜は、お美津のあられもない縛られた姿に、煮えたぎるような

怒りを感じて、

「お美津さん、もう心配しなくてもいいよ。もうすぐここへ清次郎さんも來るからね」

そういうわれて、お美津は、これまでの屈辱に身も心もくたくたになりながらも、助かったという嬉しさで、お浜の懷に身を埋めるようにして泣きじゃくるのであった。

「お銀さん。お美津さんの縄を解くんだ。早くおし」

お浜は、なおも周囲に気を配りながら、お銀にそういった。お美津の救出に十中八まで成功したと思うものの、まだ、ここは敵中だ。手に固く握る短銃一つが頼りなのである。お美津の縄を解けば、着物を着せなければならぬ。そうした時間が、お浜には息のつまるほど長いものに感じられる。

お銀は、お浜の短銃におどされて、しぶしぶお美津の背後にまわった。

高く背中にねじ曲げられ、縛り合わされているお美津の可憐な二つのこぶしは、しっとりと汗ばんでいる。お銀は、その縄を解くと見せかけ、いきなり、お浜の短銃を持つ手へしがみついて行った。

「あっ、何をするのさっ」

不意をつかれて、お浜はうろたえ、お銀の体を突きとばそうとしたが、そこをすかさず助五郎の乾分達が襲いかかり、お浜の手から短銃をもぎ取ってしまった。

「あっ、畜生」

お浜は、必死になって暴れたが、屈強な数人の男達にかかつてはかなわない。忽ち、その場に、逆腕をとられて、ねじ伏せられてしまった。



もうあと一步で、お美津を救出出来るところまでいっただけに、お浜は口惜しくてならず、キリリと齒を噛み鳴らし、憎惡のこもった切れ長の瞳を助五郎に向けるのである。

再び、奈落の底につき落された形のお美津は、縄尻を源太にまたもや取られ、助五郎のところへ引き立てられるのだった。

「飛んで火にいる夏の虫たあ手前のことだ。やい、お浜、この助五郎に楯をつくだけあって覚悟は出来てるだろうな」

助五郎が、凄んで見せると、お銀も、今までお浜に短銃でおどかされ続けたいた憤懣が熱っぽく胸元にこみあげて来て、

「助五郎一家の折檻というものが、どんなに手きびしいものか、よく味あうがいいよ」

お浜に毒づくのであった。

「野郎共、この阿女をお美津と同じよう素っ裸に剝いじまえ」

助五郎にいわれて、乾分達は、

「どうも、今夜は、女の肌がよく見られるぜ。ついてるんだな」

といいながら、お浜に襲いかかる。

「なにをするんだよ」

お浜は、男達の手を噛みつき、死に者狂いで暴れたが、

「やい、お浜、じたばたせず、素直に着物を脱ぐんだ。さもねえと、やい、これを見ろ」

助五郎は、片手で抱き寄せているお美津のふっくらとした乳房と乳房の谷間に匕首を当て、

「ズブリとお美津のきれいな肌に穴をあけるぜ」

「ああ、畜生、鬼！」

お浜は、男達の手に組み敷かれたまま、観念の眼を閉じた。自分

一人なら、舌を噛んででも、この屈辱から逃がられるが、どうしても、お美津だけは助けなければ、繁蔵親分に、死んでも申しわけが立たない。ただ、一つの望みは、助五郎の自宅へ様子を見に行つた清次郎が、ここへ救援にかけつけてくれるかも知れないということだった。たとえ、卑劣な男達の騷りものになつても、時を稼いで、何とかお美津だけは助けなければならぬと決心したお浜は、がつくりと力を抜き、男達のなすがままに任す。

紫色の織縮緬が、唐織の丸帯を解かれて、ひっぺ返すようにして剝ぎ取られる。つづいて、長襦袢、肌襦袢と男達に剝がされて、遂に、白梅模様の湯文字一枚を残す姿にされてしまった。

お美津の透き通るように白い、すべすべした生娘の肌と違い、お浜のそれは、しっとりとした脂の乗った、肉づきのいい年増の餅肌である。

源太が、助五郎の命を受けて、麻縄を持ち、うつぶしているお浜の傍へ膝を折った。

「縄をかけるんだ。起きな」

男達も手伝って、お浜の上体を起こしにかかる。お浜は、必死になつて、激しく、嫌、嫌、と首を振るのであったが、その両手も乱暴に男達にひたたくられて背後へねじ曲げられ、なれた手つきで、源太は、お浜の豊かな乳房の上下へ縄をかけた。

ついさっきまでは、これらの悪党を短銃でおどし、堂々とお美津の救援に乗りこんで来た気丈なお浜ではあったが、哀れにも、今は悪党達の虜となり、ひしひしと麻縄で縛しめられていくのである。

「さあ、立つんだ」

源太は、お浜の縄尻をとって、ひっぱった。



お浜をようやく立ち上がらせると、お銀が嗜虐的な笑いを口元に浮かべて、

「お浜さん、さっきの元気はどうしたのさ、ふふふ」

お浜とお美津は、再び、大黒柱に背中合わせに立ったまま縛りつけられる。

「さあ、飲み直しだ」

今度は、お銀も加わって、哀れな二人の鬨り者を取り囲むように円陣を組んで坐るのだった。

なめらかな雪の起伏を思わせる生娘と、ムクムクと脂肪の乗った色気たっぷりの年増女の餅肌が酒の肴だ。

お浜とお美津は、揃って、がっくりとうなだれて、お互に両脚を固く閉ざし、無念さとおぞましさに乳房まで垂れ下がる黒髪を固く噛んでいる。

助五郎は、二年前に自分に肘鉄砲を喰わしたお浜を満座の中で、さらし者にするという恥辱をかかし、充分、復讐はしたと満足に思うのだったが、それだけでは、やはり物足りない。二年來の想いをとげたい、と、先程から、わいわい騒いで酒を飲む乾分達とは別に無口となり、お浜の見事な肉の盛り上りに目を向けたまま、ちびりちびりと酒を飲むのであった。

「親分、お前さんの気持はわかるよ。長年、想いがれていたお浜だものね。今夜だけは目に見てあげる。遠慮せず、お浜としっぽり、濡れるがいいよ」

お銀が、じっとお浜に見とれてしまっている助五郎の膝をつついていった。

思っていることの凶星をさされた助五郎は

「へっへへ、さすがにお前は物わかりがいい」

などといって、照れ臭そうに笑う。

「だけど、お前さん、私は、さっき、このお浜から随分おどかされたのだからね。その仕返しに少しお浜を責めさせてもらうよ」

お銀は、そういうと、源太に木馬を持ち出して来るようにいった。

この土蔵の隅には、十手を預る身になった助五郎が、罪人を折檻するときのためにと、大工に作らした真新しい木馬が置かれてあった。お銀は、その木馬の使いはじめに、まずお浜をまたがせようというのだった。

「年増女の木馬責めか。こいつは、こたえられねえや」

乾分達は、ぞくぞくする気持で、大きな木馬をひき出して来る。

今まで、ぐったりと首を垂れ、気が遠くなるほどの羞恥をこらえてきたお浜は、眼の前に引き出された木馬をちらと見て、体中の血が暴れ出すような戦慄をおぼえた。

お銀は、荒筵を二枚、とがらしてある木馬の背にかけて、

「このまま、これに乗ったんじゃ、あとにさしつかえちゃ困るから、特別に今夜のところは、筵を敷いてやるよ。有難く思いな」

木馬の荒けずりの背には、筵がかぶせられ、乗ったところで、さほど痛みは感じないようだが、腰巻一枚のままで、この大きな木馬に馬乗りになる女の羞恥は、最高のものであるう。

「ついでのことだ。お美津もお浜につき合って、仲良く木馬に乗っかな」

助五郎は、一息に茶碗酒を口へ流しこむとそういった。

「お願いだ。私じゃあ何でもいう通りにするから、お美津さんだけは勘忍しておくれ」



お浜は、長い睫毛に涙をにじませて、お銀に哀願する。

「よし、何でもいう通りにするとうのだね」

お銀は、もうかなり酩酊して、足もともおぼつかないぐらいだが、キッと鋭い眼つきをしている。

「さあ、みんな、お浜をとにかく木馬の上へ乗っけておくれ」

わめくようにいい、完全な毒婦の姐御に変じてしまった。

お浜は、柱から外され、しかし、縄は解かれることなく、そのまま、木馬のところへ突き立てられ、

「さあ、しっかり、木馬にまたがるんだぜ、おい、皆んな、手を貸せ」

源太以下助五郎の乾分達は、ヨイショヨイショ、とお浜の体をかつぎ上げた。

「お浜姐さん、何をおしとやかにしているんだい。ちゃんと、木馬にまたがらなきゃあ、おっこちるぜ」

お浜の肉ずきのいい両足をかつぐ男達は、叱りながら、ようやく、木馬にがっぷりと馬乗りにさせる。

「ああ、繁蔵親分、助けて——」

木馬にまたがせられたお浜は、心の中で何度も叫ぶのだった。

木馬の上から、大きく左右へ垂れたお浜の白粉をとかしたような太股には、血管が青く浮かび出て、地図のように美しい。

言語に絶する恥しさを木馬の上で必死にこらえ、身悶えしているお浜を、助五郎をはじめ、乾分達はニヤニヤしながら、木馬のまわりをぐるぐる廻って眺めるのであった。

お銀は、一人で酒を飲みながら、

「お浜さん、さっき、お前さんは、お美津の身代りになんでもする

といったね。一つ、お酒の余興に、そこで、小唄をうたってもらおうか。お前さんは、滅法、いい声をしているという噂じゃないか」

お浜は、眼を閉じ、唇を噛んで、一言も発っしない。そうしたお浜の凄惨なばかりの美しい横顔をお銀は憎々しげに見て、

「唄うのか、唄わないのか、はっきりおしよ。お美津はどうなってもいいのかい」

全く、酒乱の傾向を帯びてきたお銀は、立上ると、柱に縛りつけられているお美津の太股をひねりあげた。

「ヒイ——」

お美津は思わず悲鳴をあげる。

「唄います。唄うから、お美津さんには手を出さないで——」

お浜は、木馬の上から、必死な声で叫んだ。

「うんと色っぽいやつを頼むぜ」

男達は、待ってました、と手をたたきながら、木馬に寄りかかるようにして見上げるのだった。

「早く唄わねえか」

お浜は、すすりあげながら、蚊の鳴くような声で、小唄を唄う。

「馬鹿野郎、声がかからきし聞こえねえじゃねえか」

助五郎はどなり、再び、木馬のお浜の背中を大きな音を立てさせてひっぱたいたのであった。

「ああ——」

お浜は、あまりの口惜しさに、肩を震わせて、激しく嗚咽する。と、その時、土蔵の外が急に騒がしくなってきた。



「なんだ？」

助五郎が網戸を開けて、表へ出ると、助五郎の身内の者が数人、一人の侍、といつても、十七八の未だ前髪をした小姓姿の美少年であるが、それを高手小手に縛りあげ、ひき立てて来たのである。

「親分、この野郎が、お美津を出せ、なんていいやがって、だしぬけになぐりこんで来やがったんです」

引き立てられて来た前髪姿の少年は、清次郎なのであった。

「なんでい。清次郎ってのは、こんな若造かい」

助五郎は、まるで女のような容貌をしている清次郎を見て、拍子ぬけがしたようにいった。

清次郎のふっくらとした下ぶくれの白い頬は、縄目を受けた恥辱に紅潮し、だが、負けぬ気の黒い瞳をキッと助五郎に向けて、

「この縄を解けっ、お美津殿を返せっ、下郎の分際で、武士に縄をうつとは何事かっ」

わめくようにどなるのである。そしてしきりに身をもんで、縄をひきちぎろうとあせり出す。

「馬鹿な野郎さ。こっちが探しに行く前に自分の方から飛びこんで来やがった。こう手間がはぶけるとは思わなかったぜ」

助五郎は、顔を皺だらけにくずして喜び、

「やい。若造、おめえの探しているお美津もお浜もこの土蔵の中においでになるぜ」

というと、清次郎は、眼の色を変え、

「なに、お浜どのまでが——」

お浜も敵の虜になったことに気づいて茫然とするのだった。

「そうよ。二人とも、可哀そうに素っ裸にされてな」

「な、なにっ」

清次郎は、かっとなったのか、縛られたままの姿で、助五郎に体当りしようとする。

「野郎、じたばたするねえ」

助五郎の乾分達は、清次郎の縄尻をひっぱり、地面の上に組み伏せてしまった。

「この若造を裸にしる。それから、お美津に逢わしてやる」

助五郎は、そういう捨てると、土蔵の中へ入って行った。

助五郎は、木馬にまたがっているお浜と、柱に縛りつけられているお美津の涙にうるんだ顔を交互に見ながら、

「清次郎が来たぜ。どうでい、お美津さん、嬉しいだろう」

お美津も、お浜も、ハッとして首をあげる。

やっぱり、清次郎も、助五郎の罠にかかったのかと知ると、お浜は、絶望に眼を閉じ、再び、すすり泣くのであった。

寸時の後——土蔵の網戸が開き、助五郎の手下達にこつきまわされるようにして入って来た清次郎は、無残にも、禪一つの姿で高手小手に縛り上げられていた。

柱を背に、素肌を縛められているお美津は恋しい清次郎の無残な姿を見るや、長い黒髪を激しく左右に振って泣き出した。

「あっ、お美津どの」

清次郎は、お美津のあられない姿を見ると、我を忘れて、傍へ走り寄ろうとしたが、

「おっと、そうあわてるんじゃないやねえ」

乾分の一人が清次郎の縄尻をぐいと引っ張った。

「おのれ、は、はなせ、貴様達は、お美津どのやお浜どのをどうす

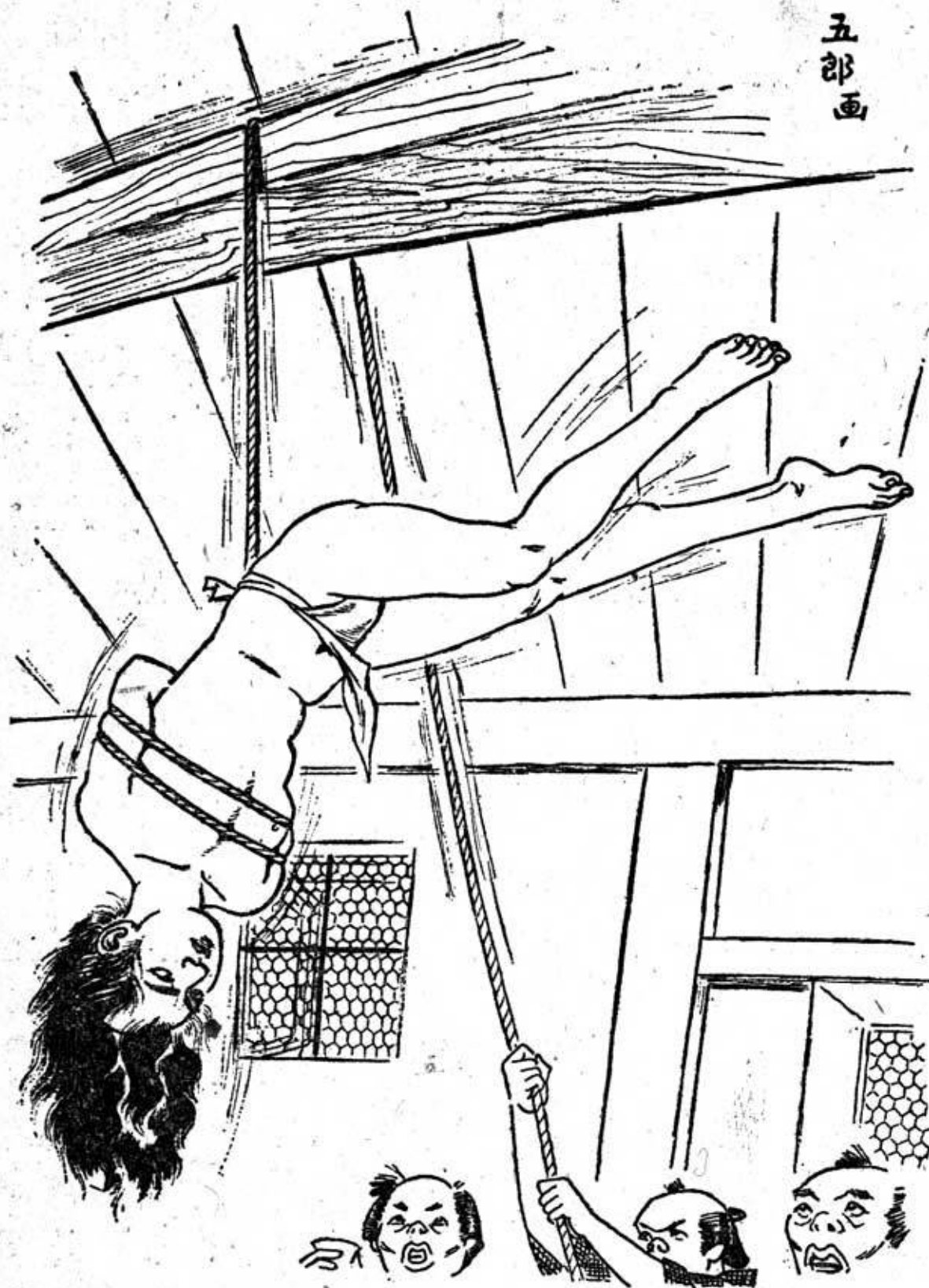


る気なのだ」

と、わめきたてる。前髪の元結も切れて、ざんばら髪になった清次郎を、酔いが廻りすぎて、眼のすわったお銀が、

「可愛いお小姓さんだね。どれ、私が少し可愛がってあげるよ」  
ふらふら立上り、清次郎の締めている六尺縄に手をかけるのだ。

五郎画



「な、なにをする！」

清次郎は、カッと顔に朱をそそいで、お銀を蹴飛ばした。

もんどりうって土間に転んだお銀は、打ち所が悪かったのか、泥酔の極に達ったのか、そのまま、のびてしまった。

「畜生、手加減してやれば、つけ上りやがって、よくも姐さんをけりやがったな。もう容赦はしねえぞ」

腹を立てた乾分達は、新しい縄を持ち出して来ると、天井の梁に通し、その縄の先端を清次郎の六尺縄に通すのだ。上へつり上げようというのである。

「おのれっ、離せ、この縄を解けっ」  
ざんばら髪を振り乱し、清次郎は必死に暴れるのだったが、やくざ達は揃って、ヨイショ、ヨイショと縄をひっぱり出す。ぐっと、縄は締まり全身が浮き上る激痛に、清次郎は、ううう、と苦痛のうめきを発つするのだったが、ギリギリ梁を滑る縄のきしみと共に、両足は地上を離れた。

清次郎をつり上げる縄は、彼の六尺縄につながれているため、重心は腰のあたりとなり、上半身の重みで、段々とつり上る毎、彼の頭部は



下へさがり、尻の方が上へ浮き上がるのである。

「はっはは、いい恰好だ。ざまあみやがれ」

縄をひきながら、やくざ達は、ゲラゲラ笑うのだった。

「降ろせつ、悪党共、俺を降ろせつ」

清次郎は、宙づりになったまま、気が狂ったように足をばたつかすのであった。

「へっへへ、そのまま、おとなしくぶら下がっていな。これから、お美津とお浜を料理するんだ。上から、ゆっくり見物しているがいぜ」

助五郎は、無残な姿で宙づりになっている清次郎を眺めていった。

その時――

「親分！」

と、一人の三下が、土蔵の中へ飛び込んで来た。

「大変だ。笹川一家が、なぐりこみに来やすぜ」

知らせを持って来た三下は、仙太という飯岡一家の飯たきなどやっているうだつの上らない男なのである。

「そりゃ、本当か、仙太」

助五郎は、酔いも一氣にけし飛んだようにひきつった顔をする。

「へい、奴等は、利根川を十艘ぐらいの舟でこちらへ渡って来ます。わっしがこの眼で見たのだから、間違いはごさいやせん」

仙太にそういわれると、助五郎は、ますますうろたえ、

「野郎共、すぐ家へ引返すんだ。おい、お銀、笹川一家がなぐり込みに来やがったんだ。手前は、この仙太と一緒に土蔵の見張りをしている」

そうわめきながら乾分達を連れ、一目散に家へ戻るのだった。

助五郎達の姿が見えなくなると、

「へっへへ、うまくひっかかりやがった」

と仙太は舌を出すのである。

ギョツとして立ちすくむお銀に、仙太は、

「へっへへ、お銀姐さん、わっしをただの三下と思ってなさるようだが、実は、わっしは笹川方の隠密カモなんぞさあ」

お銀は驚いて、素早く逃げようとしたが、おっと、どっこい、と仙太は、お銀を羽交い締めにし、落ちていた縄を取って、縛りあげ、猿轡をかました。そのまま、お銀をつき転がすと、

「さぞ、辛かったでござんしよ。今、お助け申しあげます」

仙太は、宙ぶらりんになっている清次郎をゆっくりと降ろし、縄を解くと、すぐ、お浜とお美津の縄を解いた。

おぞましい木馬から、やっと降ろしてもらうことの出来たお浜は、しばらくは立てないくらいであった。

「さっ、早く、早く」

仙太にせかされて、先に着物をまとったお美津は、あわて、お浜に着物を着せにかかった。

「さあ、出かけやしょう。奴等、嘘と知ったら、すぐここへ引返して来やがるにきまっています。急ぎやしょう」

仙太にそういわれて、三人は感謝で一杯の顔を仙太に向けて、うなずき、土蔵の外へ出た。

「おっと、忘れものだ」

仙太は、も一度、土蔵の中へ引きかえし、縛られて、転がされているお銀の傍にしゃがむと、

「お前さんをここへつるし上げておきてえところだが、閑がねえ。」



奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第19號	復刊第18號	復刊第17號	復刊第16號	復刊第15號	復刊第14號	復刊第13號	復刊第12號	復刊第11號	復刊第10號	復刊第9號	復刊第8號	復刊第7號	復刊第6號	復刊第5號	復刊第4號	復刊第3號	復刊第2號	復刊第1號
(昭和32年10月號)	(昭和32年9月號)	(昭和32年8月號)	(昭和32年7月號)	(昭和32年6月號)	(昭和32年4月號)	(昭和32年3月號)	(昭和32年2月號)	(昭和32年1月號)	(昭和31年12月號)	(昭和31年10月號)	(昭和31年9月號)	(昭和31年8月號)	(昭和31年7月號)	(昭和31年6月號)	(昭和31年5月號)	(昭和31年4月號)	(昭和31年11月號)	(昭和30年10月號)
定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	△売却▽	定価二百円	△売却▽	定価二百円	定価二百円	定価二百円	△売却▽	△売却▽	定価二百円	△売却▽	△売却▽	△売却▽	△売却▽

復刊第41号	復刊第40号	復刊第39号	復刊第38号	復刊第37号	復刊第36号	復刊第35号	復刊第34号	復刊第33号	復刊第32号	復刊第31号	復刊第30号	復刊第29号	復刊第28号	復刊第27号	復刊第26号	復刊第25号	復刊第24号	復刊第23号	復刊第22号	復刊第21号	復刊第20号
(昭和34年4月号)	(昭和34年3月号)	(昭和34年2月号)	(悦虚小説と緊縛写真)	(昭和34年1月号)	(昭和33年12月号)	(増刊号青い廃院)	(昭和33年11月号)	(昭和33年10月号)	(昭和33年9月号)	(昭和33年8月号)	(サド特集号)	(昭和33年7月号)	(昭和33年6月号)	(昭和33年5月号)	(昭和33年4月号)	(昭和33年3月号)	(昭和33年2月号)	(臨時増刊号)	(昭和33年1月号)	(昭和32年12月号)	(昭和32年11月号)
定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価三百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	△売切▽	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	△売切▽	定価二百円	定価二百円	定価二百円

復復復復復復復復復復復復復復復復復復復復復復復復  
刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊刊  
第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第  
656463626160595857565554535251504948474645444342  
号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号号  
  
昭昭昭悦昭昭悦昭サ昭昭悦昭昭サ昭昭悦昭昭サ  
和和和特和和特和ト和和特和和ト和和特和和ト  
353535第3535第3534特3434343634第3434特  
年年年五年年四年集年年三年年年集年年年年二年年集  
987集65集4第32集112第1110987集65第  
月月月)月月月)月月月)月月月)月月月)  
月号月号月号月号月号月号月号月号月号月号月号月号月号  
  
定定定定定定定定三定定定定定三定定定定定三定定定定  
価価価価価価価価百価価価価価価百価価価価価価百価価価  
三百三百三百三百二百三百二百五十二百二百二十二百五十  
円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円円

これだけで、勘忍してやらあ」  
と、お銀の猿轡を外し、手に持っていた消炭で、お銀の鼻の下へ  
ひげを描いた。  
「へっへへへ、助五郎親分によろしくな」  
仙太は笑いながら、その上へもう一度、猿轡をはめ、「あばよ」  
と出ていった。  
仙太に導かれて、三人は、利根川岸へ出、用意してあった舟に乗  
る。

「ここまで来たら、大丈夫だ」

仙太は艀を漕ぎながら、舟の中で、ようやく人心地を取り戻した三人が、ものもいわず抱き合っているのを、ほっとした氣持で見ながら、ゆるやかな舟唄を唄い出した。

——笹川の繁蔵と飯岡の助五郎とが、利根川をはさんで血の雨を降らせたのは、それから、間もなくであった。

(終)



## 女相撲と女闘美

## — 福ノ里と巴川の遺恨相撲 —

雪 崎 京 人



私が生れて育ったのは、東北の片田舎だった。小学校に入ると同級生は殆んど農家の子女だった。その同級の女生徒の一人に千代ちゃんという子が居た。中農の家の娘で小麦色の肌をして個性的な顔立の可愛らしい子で、成績もよく、いつも二、三番を下らず、運動も得意で鉄棒や跳馬など男の子も及ばぬ程巧く、級中の人気を一身に集めていた。

私の所と家が近かったこともあり、学校から帰ると私達は色々のことをして遊んだ。彼女は何しろお転婆で、男の子のやることは何でもやり、しかも男の子に負けなかった。小川での水泳や裏山での木登り遊びは勿論、私達に混って相撲を取ったのだ。これが又、技がうまく、私など仲々勝てず口惜しかったものである。

私の父は小学校の教師だったので私が五年を終る頃、転任して程近い町に倅む様になり、千代ちゃんとも遊べなくなったが、町の

小学校では又新しい友達が沢山出来た。その中に武志君という子と一番よく遊んだ。武志君は、お父さんが居なくて母親と姉さんの三人暮りで色が白くて可愛い顔をしていた。農村の子供ばかり見て居た私には少年雑誌の口絵から抜け出た様な美少年に見えた。この武志君と相撲を取って遊んだことを思い出す。六年の夏休、近所の草っ原で二人共、裸に黒い兵児帯を褌にして取組んだ。小肥りで色が白い裸身に黒い褌がよく似合う武志君と汗みずくになって揉合っていると、ふと四、五年生の頃、千代ちゃんと相撲を取ったことを思い出したものだった。

勿論、千代ちゃんとは裸で取組んだことはないのだが、この美少年の武志君が女の子を連想させたのだったろう。町の中学校へ入ってから、たぶん二年生の時だったと思う。私は始めて女相撲というものを見たのだ。町の辻々に張られたビラ（ポスター）でそれを



知って早速、放課後にかけてつけた。ポスターには化粧褌を着けて取組む二人の女力士の姿が錦絵風に画かれその下には土俵入り姿や、四つに組み合った女力士の写真が入り、朝日山とか立川とか女力士の櫓落しの相撲髷の顔だけの写真が並んでいた。取組みの合間に、はいちゃん節や相撲甚句など歌ったり踊ったり、いろいろな力芸を見せたりした。今まで三味線を引いて美声を張り上げていた娘がパッと印判天を脱ぎ棄てて、土俵に上り大相撲を取ったり、小柄な女が四斗俵を歯でくわえて持上げて見せたりした。一番最後には一人の女力士が土俵の上に仰向けに寝て、その腹の上に白をのせ、更に長い板を置いた上にも一つ白をのせて、その板の上に二人の女力士が乗って三味線に合わせて餅をつき、出来上った餅を見物席へ投げたりした。

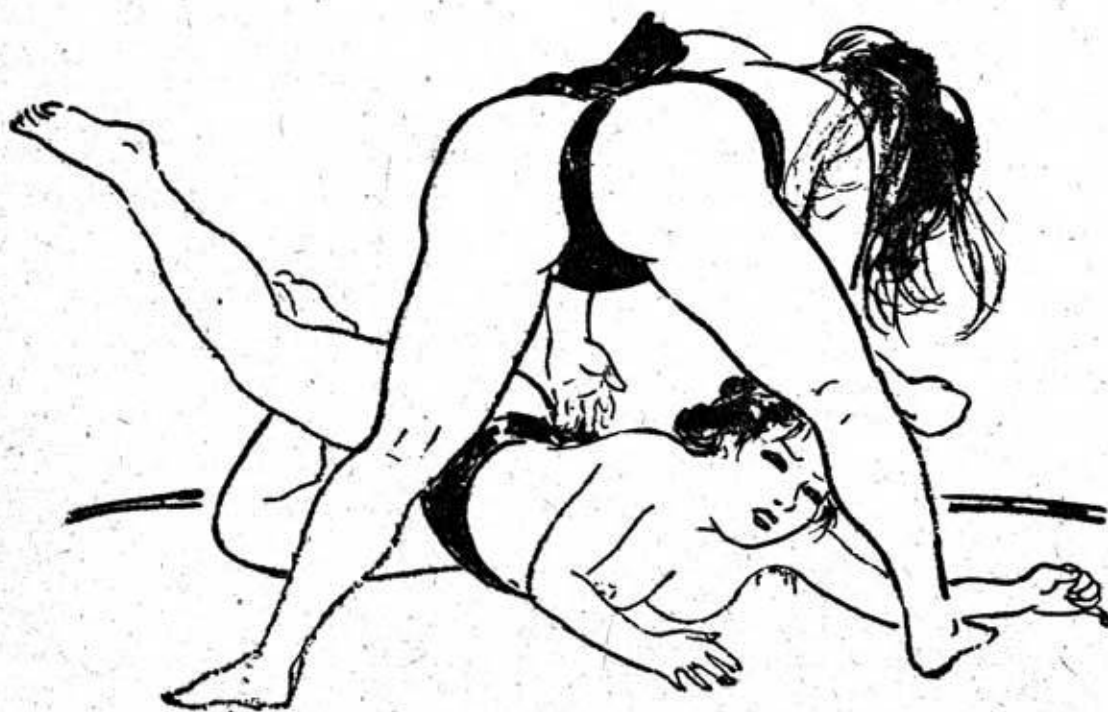
私は自分が少年だったせいとか女力士達が皆、自分の母親位の年輩のおばさんに見えた。白いシャツとパンツを着け、丁度志摩の海女の様な姿の上から相撲褌を締め込んでいるのだが、しょっきりの時だけ裸に褌をしめただけの姿で土俵せましとばかり暴れ廻って見せた。私は生れて初めて女の裸の、しかもなりふり構わず取組み合うのを見て驚嘆した。白い肌が相手の激しい突張りに遇って見る見る真赤になって行く美しさに見とれたものである。

お婆さんの様な女相撲達の中で一人十七、八の若い娘力士が私の目を引いた。女学生の様な感じの娘で相撲はそんなに強くはなかったが姿がよく、私は彼女が見たくてそれから一週間の間、毎日見に行った。この一行が次の土地で興行する為に行ってしまったからも暫くの間は追っかけて見に行きたくて耐らなかったものである。思えば私の女相撲マニアもこれから始まったものと思う。

中学を終って東京に出て上級学校へ進む様になってから、ふとした事から知合った友人がEで、これが又、私に輪をかけた様な女相撲マニアである。Eは若い時女相撲の一行について歩いたこともあり、色々面白い話を聞かせてくれたのだが、女力士同志が恋人を争う時のすさまじさは類がない様である。たださえ女同志の恋人の争奪戦は壮なもので、いわゆる女性的な陰にこもったそれだけに、すごさもあるというもののだが、女相撲の場合は恋仇同志が毎日、土俵の上で裸で勝負を争うのであるから、恋の戦はそのものズバリで、相手を土俵にたたきつけた方が即ち恋も勝利

者となるのだ。山形の庄内地方では遠来の珍客をもてなすのに、若い娘が裸で相撲をとって勝った方がお客のお相手をする風習があるとか。Eから聞いた女相撲の恋愛合戦が丁度、これと同じである。

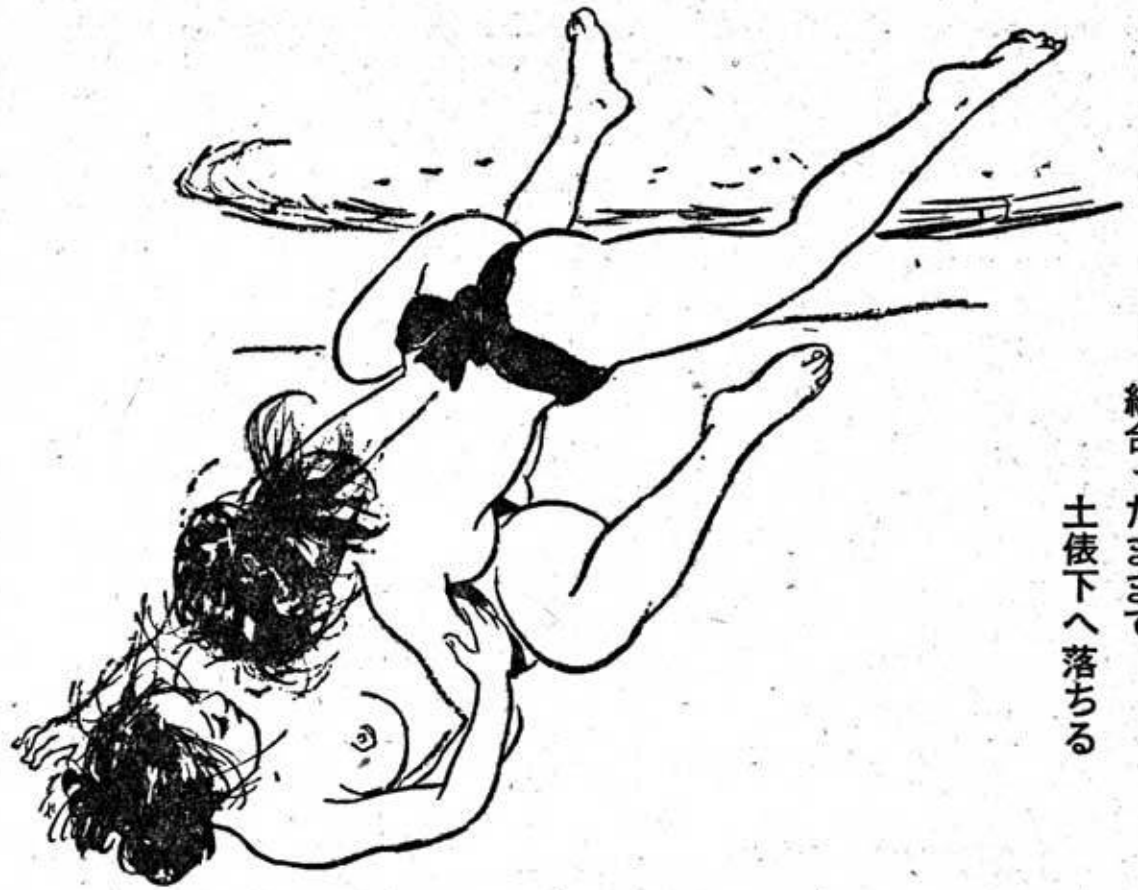
巴川ひで子は今年二十五歳で美人ではある





組合ったままで

土俵下へ落ちる



が、年よりも二つ三つ老けて見える。一七八センチ、六〇キロ。引きしまった体、小麦色の肌をした目の澄んだ美人。少女の頃サーカスに居たのだが、相撲が好きで好きでとうとう女相撲になってしまった女。好きなだけあって幾分非力ではあるが、それをカバーする

技の巧さで東の大関を張っている。これに対して西の大関は福の里ふさえ、二十四歳、一七二センチで七一キロの豊満な肉体美人。色が白くてポッチャリしていて可愛らしく愛嬌のある女。腕力が強く腕相撲なら誰にも負けないのだが、相撲の方では思わぬ相手にコロリと負けたりする。底抜けに人が善く、いつもニコニコしていて皆から好かれる女だ。酒が好きで酔うとパンテイ一つになり太鼓腹を叩いて証証寺の狸を歌って踊って見せる人気者。仲間の女力士達からも「ふーちゃん」という愛称で人気があり信頼されていた。一行十人余りの女力士が各地を巡業して歩く。その合間を見ては激しい稽古を続けて行く。新らしく加わった女が漸く禪を締めることにもなれて来て相撲がわかる様になっても、なかなか物質的に酬われることが少ない為か。巴川の様なのは別だがサーカスへ引抜かれて行く娘も多い。男性との接触も案外に堅く、女性としての欲望をおさえつけられている場合が多い。さて、この一行に興行主の甥という二十四、五の若い男が加わって来た。松本という

名前でなかなかの男前、腕に入墨などあり気の弱そうな所があったが、やくざっぽい魅力があり、一行の女力士たちから、たちまち大騒をされることになった。中でも巴川と福の里は、はたの目もおかしい程この松本に熱を上げてしまった。それぞれ小遣をはたいては煙草、ポケットウイスキーや菓子などを入れ上げ、つけ文などを送り、日一日とこの競争が激しくなり露骨になって行った。

松本の方でもこの両スターから惚れられて両手に花と、ニヤニヤして居たに違いない。両大関の取組は普通は一日交替に勝ったり負けたりして見せるのが習慣になって居り、もともと好色男を喜ばせるシヨウ的な面を多分に持っている女相撲であるから、如何にも激しい勝負の如く演出される場合が多かったのだが、この恋争いが始まってから土俵は一変してしまった。巴川も福の里も互に相手に対し激しい敵意を燃やし、火の出る様な本気の相撲で毎日毎日が真剣勝負、喧嘩相撲だ。殊に松本が一寸でも見て居ようものなら二人共、緊張して目は吊り上り、歯を喰いしばって、はらはらする様な相撲をとる。このままほっといたら、どちらかが大怪我をするのではないかと周りのものが心配する様になっ

た。

一日一日とその度が激しくなり、二人は仕度部屋でも口も聞かない。何かきっかけがあれば掴み合いの大喧嘩になりそうな全く一触即発となった状態。これが昼夜二回の興行で一日に必ず二回は土俵の上で顔を合わせるのだから、その時には必死の喧嘩相撲になるのも又止むを得ないというものだ。張り手の応酬はもとより乳房の突き合い掴み合い、嫉妬の炎で逆上した禪一つの女の肌と肌が力の限りぶつかり合い秘術を尽して相手を打倒そうとする女の執念の、すさまじさそのものであった。ある時などは福の里の激しい張手を食って髷の元結が切れて、さんばら髪になった巴川、怒って福の里の前袋を掴んで強引に振り廻し引倒してしまったので前袋は抜けてしまい、見物の目の前で土俵に這わされてしまった。

「大事な嫁入道具をよくもひどい目に合わせたわね」と前袋をはさむや巴川に武者ぶりつこうとするのを行司や呼出しに引止められて、この場は漸く治まったが次の日に至って遂に土俵の上でこの恋合戦は爆発点に達したのだった。激しい憎悪に燃えた両力士、殊に昨日の女力士として最大の恥辱の前外れに遇

った福の里は怒りを込めて立ち上るや猛烈な張り手を巴川の頬へ二、三発、続け様に見舞った。

大力の福の里の力一杯の張手を食った巴川、クラクラとしたらしく足もとがもつれ加減になった所を福の里、巴川の左腕を取るより早く一本背負、見事にきまって巴川の美しい体が大きく半円を画いたと見る間に土俵の真中、砂も埋もれよとばかり地響たてて叩きつけられてしまった。いつもなら一本背負をかけられても受身の体勢で体を丸くして落ちるから怪我もなくすむ所なのだが、この時は強い張手を受けてグロッキーになっている所をあまりにも鮮かに投げつけられ背すじを強打したので巴川完全にのびてしまい、土俵上に大の字に倒れたまま意識を失ってしまった。

行司や控力士等大勢で仕度部屋へかつぎ込み手当を加えたがなかなか意識が回復しない。巴川、その間に尿を漏らし紫繻子の禪をよごしてしまふなどとい

う騒ぎもあった。漸く手当の末、気がついた巴川「福の里の卑怯者！こんな目に遇わせて覚えておいで！明日の土俵できつと仇を討つから」と叫び乍ら大声を挙げて、おんおんと泣き続け、なだめ様もない有様。このままにして置いては仕度部屋でこの上どんな騒ぎが持上るかもしれないというので、巴川はそのまま寝かせて置き、福の里は近所の安旅



福の里一本背負いで巴川を投げる



館へ一時避難させるということになった。

この騒動も一夜明けて翌朝、意外な結末を以て終止符を打つことになった。当の相手の松本が会計の金を盗み、一行中の一番年若の女力士の若駒はな枝と、かけ落ちをしてしまったのだ。若駒は母親の綾瀬川と母子して女

相撲で、十七歳になったばかり、あどけなく小柄で華奢で非力な上に相撲が嫌いでいつも母親の綾瀬川からこっぴどくどなられてばかり居た娘で、女相撲を止めたい止めたい、いやだなアと口ぐせの様に言っていた娘。鳶に油揚げをさらわれた様なこの事件で、巴川も

福の里も、おこりが落ちた様な気分で、今までの張りつめた気もゆるみ、どちらからともなく仲なおりをし、又、一日交替の勝ったり負けたり相撲を取り乍ら巡業の旅を続けるのだった。

(完)



〔読者投稿〕

## 奇クベからず集

林 寿 夫

### 一、醜悪怪奇に陥るべからず

最近愚生は、本郷のとある古本屋で、大正末期に出た「ぐるてすく」なる雑誌と「変態資料」なる雑誌を、夫々何冊か見掛けた。これを手にして、パラパラと眺めると、例えば後者では、第一次大戦で顔を半分、吹き飛ばされた人の横顔写真が載って居る。顔の中央部が、鼻だけでなく頬の部分迄完全にえぐれてしまつて、残って居るのは頭と目と耳と下

顎だけ、恰度三日月と云うか、或は狼が大きい口を開けて遠吠えをして居ると云った方が適切であるが、兎に角、首から上の顔の部分が面積にして四分の一は欠けており、説明には、「これで生きて居るのですよ」とある。それから、これもドイツ人らしいが、口が無くて、ゴム管で流動食を美人看護婦から貰って居る写真。説明には「王侯も及ばぬ生活云々」それから、ミイラの写真等々。ぐるて

すくの方も、高田義一郎とか杉田直樹とか当時の大家が関係して居るので、真面目な雑誌ではあるらしいが、小人が出て来たり、怪奇な生き物が現われたり、題名の通りグロテスクなものだ。

又、最近、別の店頭で新刊雑誌をパラパラとめくると、人間のミイラか何かゾッとする様な顔の写真が大きく載って居た。愚生は、もうそれ丈で、匆々に書店を飛び出してしまった。その他、殺人や暴行の現場写真的なものとか、蛇や蜘蛛をあしらったものとか、思ひ出すだけで食事が不味くなる様な写真を載せて居る雑誌がよくあるものだ。

幸いにして、奇クは美の探究を主眼として居るらしく、従つて、以上の様なものは無かつたと思うが、唯、奇クでも、気を付けなくてはならないのは男性関係の写真だ。挿画や文章では大抵、構わないが、男性のヌード写



真となるとどうもグロになり勝ちだ。一体、物を配置するのに、普通の家でも玄関に置くもの、床の間に飾るもの、台所に備え付けるもの、押し入れに入れとくもの、夫々置場所と云うものがあるだろう。漬け物桶や洗濯桶が玄関に置いてあったら困るだろう。雑誌も、最初のグラビアは、玄関口の様なものだから、臭いものやおかしなものは、どうしても載せるのだったら、読者通信の近辺に写真頁を設けるとか、何か工夫の余地は無いものか。

## 二、少数者に迎合べからず

奇クは少数者の特異誌である云う。或いは然うかも知れない。奇クの座標は、ピラミットで云えば八合目位のところだろう。此処を水平に切った切り口が今の読者層だ。一合目や二合目の雑誌に比べると少数者であることは確かだろう。扱て、もっと刺戟を強くせよとの一部の切なる願いをかなえて、座標を九合目に移すことは、其の人達は満足するだろうが、読者層はぐっと狭まる。百人を満足させる代りに、千人の読者を失うことを覚悟す可し。もっと刺戟を強くして頂上に近付くと、読者は更に稀少となり、最後には、取

り締りを招くに至る。

それで、愚生としては、寧ろ七合目位に下りて、より多くの読者を獲得することを考えた方が良いのではないかと思う位だ。特異誌なればこそ、内容的に特異な貴重な事項が多いただけ、それ丈余計に人に知ってもらいたいのだ。尤も、誤解の無い様に付言するが、何も特徴の無い一般誌に近付くと云うのでは無い。事項的には、サド、マゾは勿論の事、浣腸、切腹、ふんどし、女装、ふんのように至るまで、多々益々弁ず、唯其の表現や取り扱いに注意して、全体としての調子をやわらげ、一般に親しめる様にすることを主張するのだ。誤解の無い様に。

## 三、無意味なものは載せるべからず

名士遊興伝、赤線・魔窟探訪記的なものの要求あるが如きも、奇クには無意味。嘗て、新聞記事からの転載として、国電内でのモモ切り、教師が生徒をバットで殴った、平手打ちした、中学生に売春させたなど一連の記事が可成り大きく取り扱われて載ってたこともあるが、この種のもものは、敢えて奇クで取り上げるのは無意味と思うが如何。

## 四、未成年者の女学生を扱うべからず

モデルに年少者との希望ある如きも、記事、挿画は別として、写真には避けた方が無難。この点、奇クの従来の行き方に賛成。

尚、奇クはモデルと読者との繋がりが大きな強みとなって居るのだから、モデルは或程度、永続させる可し。新人を追求する余り、永続性不確かな人迄敢えて追う要なし。スイ星モデルお断わり。

## 五、誤字誤植をすべからず

奇クには割に少いが、それでも写真の説明に、益田さんの何枚かの写真が全部愛川さんと説明されて居たり、大塚さんの身体の一部が絹川さんのところに紛れ込んで居たり、その他アラを探せば無いわけでは無い。まあ此の程度の事は、飯の中に小石が粗がある程度の事で、大した事では無いかも知れないが、念には念を入れて戴き度い。

以上、分り切った事を書きましたが、要は奇クを読んだ人々が、奇クの中から美を感じ、微笑ましい愉悦を感じ、更に一人でも多くの人達が奇クを愛する様にしたい一念から記しました。

# 新稿 ある夢想家の手帖から

## 第二〇章 人力車夫

苦力たちを馬代りに走らせる様訓練  
するのは造作なかった。

アナンド「苦力」

近代奴隷下の輓奴は、然し、輓奴として最初のものでは勿論ない。人類文明史の初めから、捕虜は常に輓奴として使用せられたことをエジプトの壁画は語っている。オリエント古代においては凱旋車に敵王を繋ぐのが例だった。ゴーチエは「ミイラ物語」で、ヴァレリーは「楽劇セミラミス」でそういう凱旋車を美しく描いた。それはギリシヤ・ローマの古典的古代の風俗でもあった。ヘリオガバルスの有名な四美女輓車もこの俗を踏えて考案されたものだ。もう少し下つての、もっと有名な例をマールロウの史詩「帖木児大王」から引こう。敗れた六人の王を——二人宛戦車を輓かせ、四人を替馬と

沼 正 三

して——馬代用にしてアスファルティからバビロンに向う肌白の（ラムの引用による当代のアラビア史家の記述では「チムール肌は白い」とあるそうだ）英雄帖木児は、馬にされた王達にこう呼び掛ける——

ホリヤ、お前ら甘やかされた東洋駄馬達！ 何と、お前らは一

日たったの二〇哩しか輓けんのか、

かくも（馬にとって）誇りとすべき戦車に繋がれ

大帖木児タメルランほどの馭者に御されながら

儂がお前らを征服したアスファルティスからこうして儂がお前らに（儂の馬となる）名誉を与えるこのバビロンまで、たったの？

この場面は、ハロルド・ラムの研究書Tamerlaneによると、史実の根拠はないらしいが、伝説が生じたとすればオリエント世界の右の伝説があったからだし、詩人の空想の産物としても、西欧人の伝統的観念としての捕虜輓車思想の表現とは言える筈である。



こういう伝統の下で、奴隷制は輓奴車を生んだし、植民地では、それが人力車になった。植民地にとって原住民は被征服者即ち捕虜に等しい存在だったからだ。

インド人作家アナンドの「苦力」によると、聖マルコ教会の牧師、J・フォーデイス師が、『信者たちの魂が肉体の不便に苦しむことのない様に』家と教会との間を往復するのに適当な乗物として、人力車を発明した。そして、『苦力たちを馬代りに走らせる様訓練するのは造作なかったので』、それ迄の駕籠はまもなく人力車に取って代られたのであった。——宗教家が発明したということは注目される事実だ。インドの聖者ガンジーは、人間の輓く車で運ばれると魂が傷つくからと言って、生涯人力車には乗らなかったというが、車夫の魂と自分の魂とを平等と見る限り、そうなるのが当然で、宗教家は信者たちに向ってそういう乗物の使用を禁止し、魂の平安を保持せよと呼びかけるべきものだ。所が、フォーデイス師は逆に、信者達（白人！）の魂の為に、そういう乗物を発明し、有色人達を馬の代りに訓練することで、信者の肉体と魂とを救済しようとしたのだ。この牧師にとっては、車夫の魂が全然問題にならなかったことは明かである。

フックスの「女天下」には、一八六七年（明治三年）のパリ万国博覧会の風景として、婦人が二人轆ひきの三輪人力車に乗っているタルジュウ筆の絵が出ているから、東洋植民地では明治以前から普及していたのだろうが、これが明治開国と共に日本に輸入せられると、俄然流行風俗となり、明治十年代には、車体を改良して国外へ輸出せられる迄に至り、リキシャ及びリキシャマン（リックショウマンとも言う）の名は世界的になって、欧州語彙に取り入れられた（附



記第二）。中国では洋車ヤンチヨ（東洋車即ち日本車の意）と呼ばれたが、白人は洋車苦力をも ricksha-coolie, Rickshaw-kuli 等と称したかを見ると、日本における人力車乗用の経験が、明治初年の外人達にど



んなに印象的なものだったか、思い半ばに過ぎる。そして、彼等の目に映じた人力車夫が、奴隷制下における輓奴を見るに異ならなかったことは、前米大統領グラントが、明治十二年来朝した際、人力車夫を見てハネスト・マン(harnessed man) (輓具を以て車に付けられた人間)と呼んだという話からも推察できる。彼等にとっては、人力車乗用は、植民地気分を満喫し得る愉快な行為だったに違いない。殆んど三世代を経て、GI達が再びその愉快を味わっていた様に私には思われた。

今でも、アジアに勤務する米国人は自動車の運転手を備って後の席に坐ることにアジア気分を味うと言われるが、当時の日本では、それを人力車でもっと強く味えたのだ。ジープを使えるGIがわざわざ遅い人力車を使った心理にはサディスティックな優越感があったに違いない。私達には馴れっこになってそんな気持は湧かないのだが、自国にこの種の乗物を持たぬ彼等にとっては、これは奴隷的労働を意味するからだ(附記第二)。

人力車を発明したのは、有色人を家畜視する白人の精神だった。然し、発明せられた人力車が輸入されて完全な日本風俗になると、それは当代の日本の支配階級にとっても便利な乗物になった。大家(たいけ)では御抱え車夫を一家眷属諸共、身ぐるみ家ぐるみ丸抱えにして長屋に住わせていた。これでは独立の人権意識など生れる筈がない。使う方でも、今日は馬車にしようか、人力車にしようか、という時の気持は、車夫を馬より高い存在と見たとは言えまい。——お抱え車夫は輓奴と言うに近い存在であった。

岩崎弥太郎は二人曳の車を愛用したが、急ぐと車上からステッキ

でビシビシ撲って走らせたので、恨みを受けたことがあったという。黒人輓奴と違いのない取扱いである。——下って、今の皇后陛下がまだ宮家にあつて女子学習院に通学なさっていた頃、三年間毎日その人力車の後押しをし、乗降に侍ってお膝に毛布を掛けたりした男の思い出話だが、その間唯の一度も声を掛けられたことがなかった、という(新潮三三年二月号「皇后様の車引き」)。これは、岩崎とは別の意味で、人力車夫を輓奴視していたと言えよう。彼女にとっては、車夫は全く人力車という車体の一部だったので、声を掛けてやる、即ち独立の人間として認めてやるという気持が、全然念頭に浮ばなかったであろう。さすが宮家のお姫様よ、皇后となられる方よと、私の貴婦人崇拜心を刺戟させる話ではある。——階級の差が種族の差に等しい程の異別感をもたらすこと、この認識と共に、白人崇拜の主題を離れて奴隷の觀念に目を向けて見よう。

附記第一 「無法松の一生」がカンヌでグランプリを獲った時の翻訳題名がリクシヨウマンであったことは、考えさせるものを含んでいる。

附記第二 モルのあげているあの嗜虐女性(サド女性)——富裕な名門に生まれた教養ある三〇歳の貴女とモルは註している——の好みの遊びは、青年紳士を奴隷化して、馬車ごっこ(Pferd und Wagen spielen)をすることだった。室内でやる場合の模擬方法(男が裸になり足台に両手をついて四本足の馬になぞらえ、その後にはテールの上に安楽椅子を置いて馬車になぞらえて女が坐り手綱、鞭等を馭者の様に使う)が録せられているだけだが、別荘などでは、人目も避けられるから、室外で実現できたであろう。「人力によつて人の乗る車を輓く」ということは、人力車的存在に鈍感



になつていない西欧人にとっては、そういった心理的效果を伴うものであることを忘れてはなるまい。

## 第二章 召使願望と侍童願望

私は御婦人に惚れます。私の惚れるとは犬馬の勞をつくし尊敬の限りをつくすことで、私は下僕となる喜びによってわが恋をみたすタテマエなんです。

——坂口安吾「ジロリの女」

ヒルシュフェルトは、「性病理学」において、<sup>メタトロピスム</sup>倒錯男性は何になりたいたと欲するかとの題下に、次の五つを分類挙示している。

- (i) セルヴィリズム Servilismus
- (ii) 小児化倒錯 Pueriler Metatropismus
- (iii) 変装(女性化)倒錯 transvestitischer M
- (iv) 畜化倒錯 zoominischer M
- (v) 物化倒錯 im personeller M

これらは、成熟した社会人たる男性から、地位、年齢、男性、人間性、生命等の属性をそれぞれ剝奪した場合に到達するものと考えられる。本項で説明しようとするのは、右の中、最初のセルヴィリズムである。

これはservus即ちラテン語における奴隸、召使を示す語から造語されたものであり(英語のservantはservusから来ている)、一応は、奴隷願望と訳して良い。然し、多少問題がある。

最広義に考えれば、奴隷願望という概念は、正統マゾヒズムの全分野を包摂すると言える。マゾヒズムとは、女性に支配される無力感に屈辱の喜びを感じることであり、女性に<sup>ドミナ</sup>domina即ち<sup>ミスレス</sup>mistress

を見ることである。幼児は母親に対して無力である。母はドミナである。生徒は女教師に支配される。彼女は文字通りドミナである。

ここに、例えば河真田子路氏(本誌二九年一〇月号)の様な小児化倒錯(ii)が成立する。ジャン・ジャック・ルソーにもこれがあったことは有名だ。黒田史朗氏のように痴愚者を伴う一派も、これによって相手の女性を指導的ないし侮辱的に行動させるのが狙いだから、やはりドミナを求めていると言える。夫のことを主人<sup>ドミナ</sup>というのでも分る様に、妻の立場は従属的である。そこに、性も交換して、妻を主人(女主人)としたいという変装倒錯(iii)が出現する(変装願望にはマゾヒズムとは無関係のものもあることは勿論である)。家畜の女飼主(iv)、家具(擬人化した場合)の女使用者(v)……それに、畜化、物化と言っても、完全な転身変形空想は別として、現実に立脚する限り、この人間の肉体は捨てることのできないのだから、結局、人間の人間に対する支配関係を想定することが必要となり、その意味でも男はドミナを持たねばならない。

ところで、女主人に対するものは奴隷である。結局、マゾヒストの各種の空想はドミナを前提とする関係上、奴隷願望が凡てを蔽つてしまふと言えるのである。侍童願望は小児化倒錯の様だが奴隷願望の一種であり、エプロン亭主願望は変装倒錯の様だが奴隷願望の変形である。ソフィアの足を舐めるジャンにおいては(本誌二八年五月号「マゾヒストの会」)大願望が、ジェインの車を轆くコンラッドにおいては馬願望が、それぞれ奴隷願望と結合している。第九章で引用した投書者は、学生時代に、自分の好きな友達数名のグループの共同の召使になり、彼等がマージャンをしている卓の下に坐つて、尿意を覚えた者があれば、奉仕作業をして、誰も途中で便所に



立つことなしに楽しくマージャンを続けられる様に要求されることを空想したと述べているが、これは奴隷願望と便器願望とが結合した例である。その他一々の検討は省略するが、正に奴隷の観念こそ、マゾ的空想における万能石と言えるのである。

然し、それでは少々広過ぎる。畜化、物化などに並ぶ、否、むしろそれらへの入門を成す狭義のマゾ的空想分野を示す為に、ヒルシ



ユフェルトはセルヴィリズムの概念を立てたのであるから、その意を汲み、右の広義の奴隷願望と区別する意味で、これを召使願望と訳すことにしよう。——召使願望といったからとて内容に奴隷を含まぬのでないことは勿論である。その奉仕の内容が家内奴隷の本来の奉仕に止まり、それ以上の畜化、物化に至らない場合、という約束と承知されたい。

召使願望はマゾヒズムに含まれる支配被支配の契機が一番ありふれた日常的な形を取ったもので、常識的な、故にまた、正常に近い願望形式である。「僕は貴女の奴隷です、召使です」といった言葉は、恋人に対して囁かれる場合、決して変態的でない。恋人（妾に転義されるが）を mistress と呼ぶのも、それが一般化したからだ。行動においても男性が騎士的に女性をいたわり、奉仕する態度は外見上召使同然のことが少なくないが、正常感を失わない。それが異常視されるのは、その奉仕が屈辱の表現として自己目的化し、性感と結び附く場合のみである。だから、正常な恋愛形式から、マゾヒズムのこの入門的段階への移行は比較的容易である（第二八章で性的隷属について述べるところと考え合されたい）。

召使願望者は女の召使<sup>サバード</sup>になって、女に使わたいのである。奉仕したいのである。ヒルシユフェルトの前掲書における記述を引用すれば



部屋の整頓、掃除、窓硝子磨き、寝台作り（シーツを整えること）、飯炊き、皿洗い等々の家事から、長靴を穿かせたり磨いたり、足を洗ったり、買物に行ったりする。御仕着せと給仕服を着るのを喜ぶ。結髪を得意にするのもある。……腰元、女中の役に就きたがる連中は、姉さん冠りに前掛のいでたちで腰元の仕事をしたり、掃除婦になったりする。縫物、編物などの婦人手芸をしたがるのもある。……

参考として、映画「北ホテル」の一場面があげられよう。ダビの原作にない「女王様ごっこ」の場面をカルネが附加している。アルレティの演ずるすれっからしの年増の街娼レイモンドは、同棲していたエドモン（ルイ・ジューベ）に捨てられ、仕方なくエドモンの代用品として、今迄求愛されていたがいつも振って来たデブ（俳優名失念）を採用するが、売手市場だから難かしい注文をつける。奴隷の奉仕を命じるのだ。男は勿論承諾する。彼女が日も高くなつて目を覚すと、彼はベット傍に侍っている。「櫛」「ハイ、女王様」と渡し、「化粧着」「ハイ、女王様」と捧げる。ベッドで身づくろい終って、「靴」「ハイ、女王様」とて跪いて、彼女の足（アルレティは脚が美しい）を手にとって穿かせる。と、そこへ彼女の客がやって来る。彼女は、靴を穿かせ終った男を「奴隷にもう用はないよ」と追いやる。男は残念そうに、然し口答えもできず、出てゆく……。

マゾ・プレイと云ってしまえばそれまでだが、しかもこんなお芝居が、女性への奉仕衝動に憑かれた男にとっては、臥床を共にしての喋々囁々の数刻よりも楽しいのだ。マゾッホの名作「毛皮を着たヴェヌス」も、この段階におけるマゾヒズムの作品である、後に述

べる様に、マゾッホは自身この小説の内容を實踐している。お芝居と云っても、実生活を賭けるに値するお芝居なのだ、ということとを彼の行動が語っているとも言えよう。

さて、このセルヴィリズムをもう少しマゾ的に精鍊するとパジズム（Pagismus）になる。侍童を意味する Page の語から、クラフト・エビングが造語したものであるが、セルヴィリズムとの最大の相違点は、女主人との肉体的交渉を概念上全くオミットしている点にある。

侍童を使うのは貴婦人、それも女王とか領主の奥方といった最も尊貴の女性であるから、パジズムは貴婦人崇拜と略一致する。ドミナ必ずしも貴婦人とは限らぬのだから、この点も勿論無視すべきでないが、既に女主人対召使という対立を取り、しかも卑下感と快感とが正比例する場合、それが女王対奴隷の両分極に迄発展して行くのは、むしろ論理の必然であつて、貴婦人崇拜はセルヴィリズムに内在しているとも言えるのである。

これに反して、肉体的交渉の問題は由来が異なる。召使願望の場合、女主人の性格によつては、奉仕の裏面に正常な肉体交渉を秘めていることが少くないことは、セルヴィリストの理想像とも言うべき谷崎の「春琴抄」の佐助が、一方で春琴に子を生ませているのも分ろう。

然し、ドミナに対する崇敬の情の嵩ずるところ、マゾヒストは彼女から一切の地上的要素を失くして、女神にしてしまおうとする。精神分析者の言う様に、性を解せぬ子供の目から見た母親は、聖处女であるが、マゾヒストはドミナを聖处女にしようとするのである。そこに子供の視点が出て来る。即ち侍童である。侍童は性を解

しないから、女主人との間に肉体的交渉の持ちようがない。だから、実際はどうあろうと、彼にとっては彼女は処女と同じ意味をもつ。身分的には逆であつても谷崎の「恋を知る頃」がパジズム的色彩を帯びているのは、少年伸太郎にとって淫女おきんが清純な女性として仰ぎ慕われているからである。舟橋聖一の「破れた花詩集」とか「雪夫人絵図」とかは、この種の、少年の年長婦人への清純な献身的愛慕を描いている点でパジストには興味のあるものである。佐藤春夫の「のんしゃらん記録」も——少年の草花への転身という点で、物化空想を含むが、鉢植の持主たる女性への思慕の基調にお

いては明らかに——パジズム的作品の一種といひ得よう。こう見て来ると、パジズムというのは、その年齢より、むしろ女主人への清純な奉仕に本質があることが分らう。貴婦人崇拜と多く一致するのも、身分の相違が肉体的交渉の障壁になっているという点で、清純な奉仕へ導き易いからであつて、かりに下賤の女性でも、肉体的交渉をあきらめてゐる場合には、これをパジズム的と称して差支えあるまい。前記の「北ホテル」にせよ、「毛皮のヴェヌス」にせよ、その意味では、パジズムの例にあげてよいかも知れない。

## 歌集みだれ繩

### 無茶野歌子

夜の帳にいましめられてさるぐつわ囚われ  
びとの鬢のほつれよ

繩五尺くくれば肌にひしひしの繩目ごこち  
は秘めて放たじ

繩にきけな我れのくくるを否むとはしほら  
しきかな春罪もつ子

肌それも繩もさなりき白かりきわれをくく  
らば繩桃色に見る

その子二十肌はたちにくいこむ黒繩の繩目の色の  
うつくしきかな

堂の鐘に吊されし夕べ前髪はだかみの桃の肌身に鞭  
たまへ君

紫にのこりしあざのみだれ繩かくしわづら  
ふ宵の春かな

堅繩たてなわは誰にかたらむ血のゆらぎ春のおもひ  
のさかりの命

紫の濃きしごきもてさるぐつわされし少女  
の眉毛かほそき



くくる繩に灯あかき宵を打ちたまへ女はら  
から後手に泣く

床にふし紅のしごきのさるぐつわ我れもだ  
えしを人にかたるな

今はゆかむさらばと云ひてわが君は後にま  
わりわが手くくりぬ

細きわがかひなにかゝる繩のきびしゆるさ  
せ給へ責むるわが君

枝々へ女を吊す桜月夜こよひのモデルみな  
うつくしき

繩はきびし春のゆふべを裸体にて二十五菩  
薩鞭うけたまへ

荒繩のくい込む肌にふれもせでさびしから  
ずや繩を解く君

繩尻をとられて庭に引出され小羊のごとと  
らわれの美女

みだれごこちまどひごこちぞさるぐつわ高

手小手繩乳おほひあへず

さるぐつわ夢にさまよふ陶酔のそのまなざ  
しに似たらずや女

誰ぞ夕べひがし生駒の山の上のまよひの雲  
にこの子吊さね

両手くくりさるぐつわかますうすやみの美  
女のあらがひ胸のときめく

狂ひの子われに繩目のとがきびし百たたき  
の刑石抱きの刑

みだれ繩を百貨店にて買ひし夜くくりたま  
へと君ゆりおこす

さかさ吊りにつられし夜のゆめごこちまろ  
き二つの乳房の重き

さるぐつわ胸へは一重腕<sup>ひとて</sup>へ三重繩のいまし  
めなど解きがたき

紫の繩目のあとはちぎれくわがやは肌に  
それはた消えぬ

乳房おさへ神秘のしばりにのぞけりぬそこ  
なる繩にはじらひぞ濃き

馬の背にゆられしばられねがはずや八百屋  
お七の袖ぞからげし

うすものの二尺のたもとすべり落ちて繩目  
にかゝる夜風のさむき

その涙のごふ指<sup>および</sup>は持たざりき若き女のうし  
手すがた

君が手にとらはれし子を誰と知る女の肌に  
ききたまひてや

あの夜より繩にかゝりしわが姿美しと見ば  
いたぶり給へ

女二人連縛せむにこの繩の四米<sup>メートル</sup>は長きみ  
じかき

みだれ繩たばねしまゝに手にとりて若きを  
みなをくくりけるかな



## 新連載小説

## 狩 獵 者

第一回

佐さ

度ど

新 川 工 画

槐かい

浴室には明るすぎるくらいの蛍光灯が灯っていて、司慎之輔が入浴中だった。

南がソッと脱衣室の扉を開けると、青いガウンといっしょに脱ぎすてた真白なブリーフが眼にしてみた。

南はなんとなく緊張して境のガラス戸に近よった。縦にすじの入ったガラスは、中が見えそうで見えない。たちこめた湯気が漂うのと、ほのかに白く裸体のありかが判るだけだった。

「誰だ？」

咄めるような尖った声がして、急に湯を使う音がやんだ。

「南です。背中を流しましょうか？」

「いい！ あっちへいつている。風呂場へは入ってくるな！」

怒りを含んだ司の声に、周章して廊下へでた南は、ションボリと自室へひきさがった。自室といっても、正確には、司が三人の男にあてがっている部屋で、三段になったベッドの他に、ロッカーや椅子・卓子が備えられている。

「どうした？ やに元気がねえんだナ」

一番下のベッドに寝転がっていた年かさの

山科が顔をあげた。

「イヤ、べつに……」

南がつまらなさそうに椅子にかけると、

「オイ、怒られたんだろ？ 親分に——」

週刊誌に読みふけていた杉田が、横から

ひやかすように云う。

「ウン、まあ……」

「なにをしたんだ？」

兄哥分としても、山科は、南の失敗を黙っ



てはいられなかった。

「なについて、親分の背中を流そうと思って風呂場へ入りかけたんだ。そしたら——」

「馬鹿だな、てめえ。そんなよけいなことしやがって」

「だって……」

「だってじゃねえ。親分は絶対に肌を他人に見せねえんだ。風呂場へ入るなんて、とんでもねえことよ。おまえは新米だが、云って聞かせてある筈だぜ」

「そうだったかナ」

「気をつけるよ。これから」

「へい……」

南は短く刈りあげた頭を掻くと、モゾモゾとチューインガムをとりだした。

「だけどよ、親分はなんだって男のくせに裸を見られたくねえんだろ？ 軀に秘密でもあるのかナ」

週刊誌をほうりだした杉田が、チューインガムに手をのぼしながら云うのを、山科はたしなめ顔で、

「知らねえよ、そんなこと。俺は親分とは従兄弟だが、子供の時から一度だって裸を見たことアねえんだ。それより、めったなこたア云わねえもンだぜ。俺たちア親分の命令

どうり動いてりやアいいんだ。そうすりやア、とにかく、金の心配もなく、衣・食・住が不自由なしなんだからな」

ふたたびゴロンと仰向けに転がった。

山科たちから「親分」と呼ばれてはいるが、司慎之輔は、いわゆる「やくざ」に属する人間ではない。だが、定職をもっていないという点では、いささか似ている。洋画家と自称し、銀座の画廊で個展を開いたこともあるが、それは、一つには、世間を欺く手段であって、厳密には職業とは云いかねた。

戦後実業界にのりだして、たちまちのうちに巨万の富を得た司大作を、いまは知る人もない。司夫妻が飛行機事故で急逝した事件は当時の新聞紙面を賑したものだだったが、一年も経たぬうちに、人々の脳裡からは忘れ去られ、遺児の慎之輔の現在の生活には、もう誰も関心をはらう者はなかった。

両親の死後、慎之輔には、一生遊んで暮したとしても、ありあまるほどの財産が遺された。それをめあてに、親戚をはじめ、周囲の動きは凄じいばかりだったが、実業界を嫌って、プラプラしているうちに、二十七才になつていた彼は、いっさいの干渉を斥け、財産整理にあたった。父が関係していた幾つか

の会社とはサッサと縁を切り、広いばかりで不便な邸宅は売りらつて、田園調布に、自分の設計で瀟洒な家を新築した。そうして、大型の自家用車を活動に便利のように小型乗用車に買い換えると、束縛のない独り暮らしをはじめたのである。

そのあいだにも、司慎之輔は、ある計画のための準備を怠らず、従兄弟で刑事の山科が収賄事件で懲戒免職になると、それを拾いあげて仕事の協力者にした。

慎之輔とは十才年上の山科は、刑事としては腕利きのほうだったが、派手好きの妻の安子に尻を叩かれて、しばしば職権を悪用しているうちに、とうとうそれが発覚して免職されると、安子はいそをつかして別の男にはしった。幸い子供はなかったものの、刑事より他に能のない山科は、たちまち食うにもこたく状態になっていたから、慎之輔の誘いは甘い蜜の匂がしたのである。

山科一人ではまだ人手が不足だったので、慎之輔は、助手二名の雇傭を山科に任せた。その結果、まず杉田が雇われ、次に南が加わった。

杉田は、元タクシーの運転手で、三人人を轢き殺しているし、南も傷害の前科がある。

いわば自分で世間を狭くした男たちだが、それだけに山科には恩を感じていたし、司慎之輔を主人として忠誠を誓ったのだ。

慎之輔を「親分」と呼ぶようにしたのは山科だったが、場合によっては「先生」とも呼んだ。もちろん、近所の人々は、慎之輔を画家だと信じていたし、多少似つかわしくないとは思わなかった。山科たちを弟子だと思っていた。

司慎之輔は、外出に際しては、努めてめだたぬ服装をしているかにみえた。よく見れば背広の仕立てもいいし、着こなしもうまく、オヤと眼をみはらせるが、一見しただけでは、都会のどこにでもいるスマートな青年紳士にすぎない。そういえば、彼の新居も、外見は人眼をひくような建物ではなかったし、自家用車も、灰色に塗られたトヨペット・コロナである。

山科たちは服装の自由を認められていて、各々に勝手なものを着ているが、慎之輔と行動を共にする場合には、たいてい山科の指示で、杉田も南も、ときに応じたみなりをするようになっていた。

つまり、司慎之輔がコロナを運転し、山科たちが同乗して東京の街を走っていても、誰

の注意をひくことも決してない。たとえば、通りががりの刑事が車内を覗いてみたところで、慎之輔の白哲の面に、フト気まぐれな友情をいだくことはあっても、犯罪の臭いを嗅ぎだすことはとうてい無理だった。

司慎之輔は、風呂からあがると、山科を広間に呼んだ。

「でかけるよ。あんたも風呂へ入って支度をしな。それから、杉田に云って自動車（クルマ）をガレージからだしておくんのだ」

「へい。おともは私だけでいいんで？」

「いいだろう。杉田と南には、あとに仕事がある」

「へい。判りました」

山科がでていくと、ソファから立ちあがった慎之輔は、壁にはめこまれた大きな鏡の前にゆっくりと歩みより、己の顔に向かってフツと笑った。

## 罨

司慎之輔の運転するコロナは、住宅の建ち並ぶ通りをたちまちにぬけると、都心へ向けて疾走していく。いくさきを知らぬままに、助手台の山科は、大都会の特有赤く爛れた夜空を、ボンヤリと眺めていた。

「夜光塗料といふう妙な名のキャバレーのボックスに、慎之輔たちは、もう二時間もねばっている。新宿の盛り場に近いところで自動車（クルマ）を駐車し、バアやキャバレーを二、三軒覗いて歩いた果てで、酒を飲めるのは役得とばかりに上機嫌な山科にくらべ、慎之輔は口数も少く、難しい顔をしていた。

「こちら、ずいぶん深刻そうネ。お酒だってほとんど召しあがらないみたい。なにか別のものをお持ちしましょうか？」

チカチカ光る着物を着た頸の細い女給が、慎之輔と山科を半々に見ながら云うと、慎之輔は、いっそう眉間の皺を深くして、

「酒はもうたくさんだ。それよりコーヒーをもらおう。ブラックでな」

と云ったが、とたんに瞳の奥が生々と輝いてきた。さすがに山科はそれを見逃すようなことはなく、慎之輔の視線を追うと、入口の扉を背し、股を開いて突っ立っている長身の青年が眼にとまった。

青年はすぐに歩きだし、集まってきた女たちに囲まれて、ボックスのシートへ乱暴に腰をおろした。すでに酔っているらしく、なにか喚くように云うと、上体を反して哄笑したが、やくざ者らしい精悍な貌に似ず、おどろ



くほどに齒が白い。細身のズボンに、いの上衣をむぞうさに着け、スポーツ・シャツの釦をはずしてはだけた浅黒い胸板に、大型のペンダントが揺れている。

「山さん。あの男を調べるんだ。うまくやれよ」

慎之輔は、低い声で山科は囁くと、コーヒーを一口含み

「俺は帰る。報告を待っているぞ」

と立ちあがった。

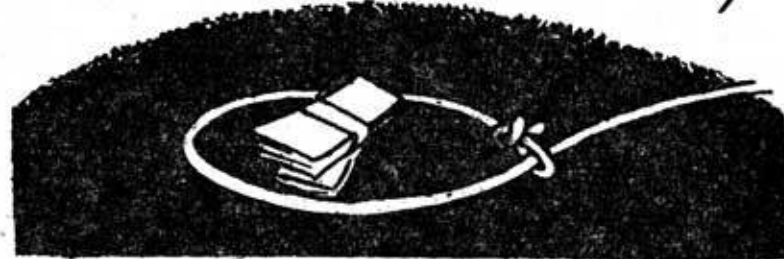
翌朝、トーストとトマト・ジュースで遅い朝食を摂りながら、司慎之輔は山科の報告を聞いた。

「男の名前は、木島鉄次。通称『鉄』と呼ばれています。年令は二十七才。情婦はいますが、独身です。『大熊組』の幹部で、れっきとしたやくざ。新宿界隈じゃいい顔で、もちろん腕っぷしもそうとうなモンです」

「ふうん。で、マゾのけはないんだろうな」

「マゾ？ ハハ、笑わせねえでくださいよ。

人を殺らすのは平気な野郎ですぜ。そうだ、



サドのけなら大いにあるかも——」

「よし！ 決まった。今夜決行しよう」

キャバレー『夜光塗料』の中は、今夜も澁んだ空気をバンドの音色がかきまわしている。

あいかわらず女たちにとりまかれた木島鉄次は、ものうそうに長い脚を卓子に投げだすと、

「五郎。いいかげんにしねえと、俺ア本気で怒るぜ」

「でも、兄哥……」

葉室五郎は、恨めしそうに木島の顔を見たが、睨みかえされてモジモジした。

「貴様、俺の親切がまだ判らねえのか」

「いえ、それは、じゅうぶん……」

「なら云うとおりにしたらどうだ」

「へい……」

「二十五にもなりやがってよ。女をしらねえなんて恥かしかアねえのか？ 俺はな、

そんなはんちくな野郎を舍弟分にもちたかアねえんだ。もし、どうしても貴様が云うことをきかねえんなら、盃をけえが、それでもいいのか？」

「そ、それだけは、ごかんべんを！」

「じゃ、すぐにいけ。万事は好子が心得ている」

「へい、まいります。だから、兄哥、盃をけえすなんて、そんなことは云わねえでくださいよ」

「アア、いいってことよ。早くいきな」

肩をおとした葉室が夜の街路へ消えていく

と、入れ違いに入ってきたのは山科だった。

山科は木島の姿を認めると、安心して、通路を隔てた横の席に着いた。

ハイボールを半分あけると、山科は、なにげないふうで洗面所にたつ。そこには一足先に入った杉田が待っていた。

「オイ、俺の横のボックスの、黒い背広にペンダントをした男だ」

耳うちされた杉田が洗面所をでていくと、少し遅れて席にもどった山科は、残りのハイボールをひといきにあけた。

すると、それを合図のように、突然喧嘩をはじめた若い男がある。杉田と南だった。

さほど珍しいことでもないのに、附近の客が慌てて身を避けるくらいだったし、木島も（うるせえな）と思ったただけだったが、しかし、じきに、無関心ではいられぬ事態になった。態勢不利で半ば逃げ腰の南が、木島の卓子の近くまでよろけてきたのへ、杉田が手に掴んだコップを投げ、とびちった水を木島が浴びてしまったのだ。

「やい、チンピラども！ てめえら喧嘩をするなア勝手だが、俺の顔へ水をかけたのは、どういう了簡だ」

酔ってもいたし、木島はヌッと立ちあがっ

た。

「フン、なんもおまえさんにかげようと思つてしたわけじゃアねえよ。ちょっと手許が狂っただけじゃねえか。犬じゃあるめえし、水がかかったくれえで吠えなさんな」

「なにイ！」

怒りまぎれに毒づく杉田の言葉に、木島は、もうがまんがなくなつた。

「おいッ、俺を誰だと思つてやがるんだ。

鉄々といやア、この界限じゃ、ちったア名の知れたお哥イさんだぜ。舐めたまねしやがると、どんなめにあうか判つてやがるのか！」

「うるせえな。鉄だか鉛だかしらねえが、いまおまえさんにかかずらっちゃアいられねえんだよ。邪魔だからどいててくれ」

「ようし。喧嘩を売る気だな。面白い。買つてやろう。だが、ここじゃ大勢が迷惑する。

二人共表へでろ！」

いたけだかになった木島は、いきなり杉田と南の襟がみをととり、ズルズルとひきずって歩きだした。

杉田と南は、死にものぐるいでもがくが、クレーンに挟まれてしまったように、どうしても木島の手をふりほどくことができない。

「あんまり見かけない男たちだけど、木島さんに抗っちゃ、ただじゃすまないわ。かわいそうに……」

女給の一人が呟くのを聞くと、さすがに山科は心配になって、ソッと席をたつた。

顔をしかめるボーイをしりめに、外にでた木島は、やっと杉田と南を離れたが、ホッとするまもなく、二人は前後して舗道へ叩きつけられていた。

「畜生！ おぼえている」

起きあがった杉田は、むかつてくるかと思いのほか、捨て科白を残してバタバタと逃げだし南もビッコをひきながらあとを追った。

あまりのあつけなさに、木島はポカンとして立っていたが、警棒をブラブラさせて眠そうにやってくるパトロールの警官を見ると、にが笑いを浮かべて、中へひきかえそうとした。

「お兄さん。素晴しく強いんだね。惚々したよ」

山科が声をかけると、木島はうさんくさそうに眉をよせたが、褒められると悪い気はしないらしく、

「イヤ、あいつらがだらしねえのさ。逃げちまったんじゃ勝負にならねえ」



「いやいや、お兄さんにかかっちゃ、誰もかなわねえよ。ところで、そこをみこんでの頼みだが、きいてはくれまいか？」

「頼まれたらあとへ退けねえ俺だが、ことと次第によるね」

「礼はじゅうぶんするよ。とにかくほかで飲みなおそうじゃないか」

眼つきは鋭いが、みなりは悪くない山科に木島は気をひかれた。

地下にあるバーの薄暗いボックスで、山科はむぞうさに紙幣束をだした。

「前金だ。とっときな」

「すまねえな」

ザツと数えて五十万はある。

「ところで、なにをするんだね？」

「話が決まったら、とにかく親分に会ってもらおう。詳しいことはそれからだ」

どこへ連れていかれるのかも判らず、コロナへ乗せられたが、木島は不安を感じるような男ではない。それに、内ポケットをふくらませている紙幣束が、ほかのことを考えさせなかった。

寝静まった住宅の並ぶ通りに入っても、そこが田園調布だとは気がつきもしなかったし自動車止まっておろされた家を、ことさら

に注意して眺めることもしなかった。

広間に木島を残して、山科がいなくなつてから、もうかなりの時間が経っていた。気の短い木島は、たばこ二本を灰にすると、焦だたしげに舌うちをした。フト見ると、ソファのそばのサイド・テーブルにウイスキーの壺がある。水差しもあるし、グラスの底に、僅かに琥珀色の液体が溜っているのは、誰かが飲んだあとなのだろう。木島はソファのほうへ位置を変えると、ウイスキーの壺を手にとつた。本場のスコッチだ。自動車で夜風に吹かれ、酔も醒めていたところなので、思わず咽喉が鳴つた。

司慎之輔が姿を現したのは、木島がちょうどグラスをあけたときだった。木島は、バツの悪さをごまかすように、わざとらしくペコリとおじぎをし、それから、

「あんたが、親分かね？」と云つた。

慎之輔は頷くと、微笑して、

「なるほど。見れば見るほど不敵な面魂だ。

気に入つたよ」

獲物を悦しむように、まじまじと木島の貌を見つめたが、慎之輔の心のうちなど知るよしもない木島は、昂然と肩をそびやかして、「はばかりながら、不死身でとおっている俺

だ。きつとお役にたつてみせますぜ」

「ハハ、俺もそう思うよ。だから、おまえさんに白羽の矢をたてたんだ」

「で、仕事つてなア、なんなんぞ？」

「麻薬さ。ちつとばかり大きな仕事だから、うまくいったら、礼金のほかに分けまえをだしてもいい」

慎之輔が声をひそめると、木島はもうワクワクして、

「それで、俺の役は？」

「ことは秘密を要する。別室で話そう。従いてこい」

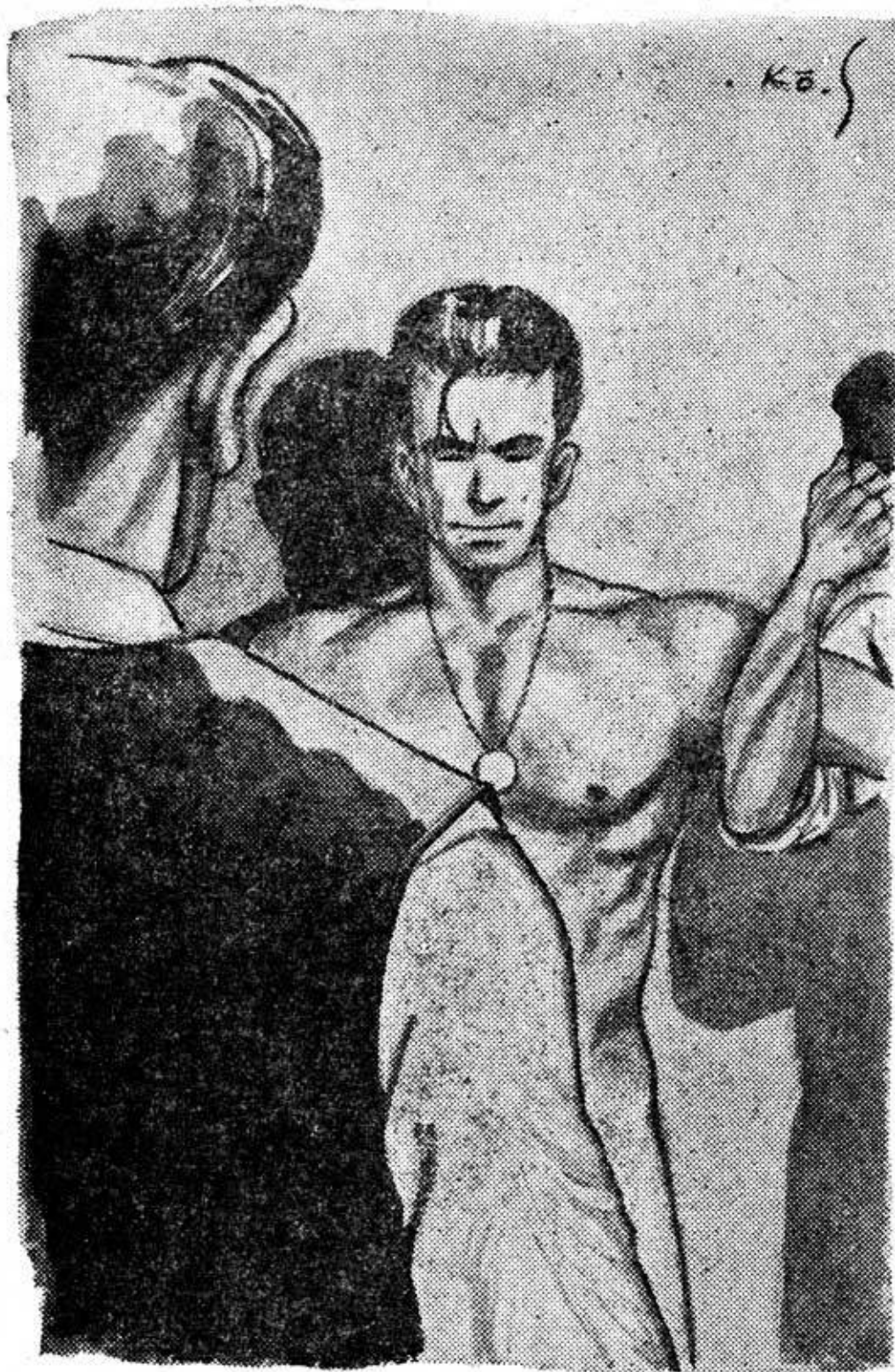
慎之輔は扉を開けて書斎に入ると、またその扉を開ける。書斎の隣は寝室になつていたが、慎之輔は三度めの把手に手をかけた。扉が開くと、そこは部屋ではなくて、地下室への階段だった。

コンクリートの階段の中ほどで、木島は、躓いて危く足を踏み滑らしそうになつた。しかし、

「気をつけなよ。暗いんだから」と慎之輔に注意されると、躓いた原因を暗いせいだと思ひこんでしまった。

## 第一の獲物





階段をおりきったところは、六畳ほどの広さになっていて、床も壁も天井もコンクリートで固めてある。照明に蛍光灯を使っているのが、いかにも不釣合な感じだった。奥にまだ部屋があるのか、黒く塗った鉄板の扉が不気味に光り、寝室からの階段と向いあって、もう一つ別の階段がついていた。

慎之輔は、たばこをとりだすと木島にもす

すめて、

「確か、木島とかいったな？」

「へえ」

「おまえさんが、やくざ仲間でも腕力がすぐれ、不死身を誇っているのは知っている。だがな、俺はこの眼でそれを見たいんだ。それで、ちょっとしたテストをしようと思うのさ」

「テストってえと？」

「それは、いまに判る」

「しかし、なにも、そんなめんどうなことをしねえでも——」

「フフ、嫌か？ さては、恐いとみえるナ」

「とんでもねえ！ 俺はどんなときだって、恐いなんて思ったことのねえ男でさ」

恐いのかと云われて、木島は憤然とした。臆病者だと思われるのが、彼には一番嫌だった。

「いいとも。あんたの気のすむように試してくれ。そのテストとやらを、潔くうけようじやアねえか」

「さすがにいい度胸だ。じゃア、ボチボチはじめるとするか」

慎之輔は、すいさしを壁で揉み消すと、

「オイ、みんな。おりてこい」と呼んだ。

すでに待期していたらしい男たちが、別の階段からドヤドヤとおりてきたが、山科のあとからくる二人の顔を見た木島は、

「お、てめえたちは……？」

と怪訝そうな表情をした。

それを見た杉田は、ニヤニヤとして、

「おぼえていろと云った筈だぜ。今度ア



手加減をしねえからな」

「じゃア、おめえたちは、みんなグルだったんだな」

「そうともよ。いまごろ気がついたのか」

「畜生！」

木島の額に怒気の走るのを見た慎之輔は、

「まアまア、それも、おまえさんに片棒かついでもらうための手段だったんだから——」

と宥めるように云っておいて、

「じゃア、いいか。一對三だぞ。どっちもしっかりやれ！」

と声の調子を変えた。

「こい！」

木島が、上体をやや低くして身がまえる。

山科たちが、思わずヒヤリとしたほど、木島の全身には冷い殺気が漲っていた。

数秒間の息づまる対峙を、最初に破ったのは南だった。そして、それは、いかにも不用意な攻撃にみえた。木島は、だから、南を軽くいなすつもりだった。だが、次の瞬間、まったく意外な結果になった。足許が崩れて泳ぐような恰好になったのは、南ではなく木島だったのだ。危うくたちなおって壁で背を支えたものの、木島は狼狽を隠せなかった。(しまった)と思うより、(変だ)というの

が実感だった。たとえ酔っていたとしても、

不覚をとるような木島ではない。しかも、酔はとくに醒めていた筈だし、さっき飲んだウイスキーは、グラスにたった一杯である。

では、不意にきた、かつて覚えのない躰の不調は、なにが原因なのか。

木島は、とにかく、死力を尽して斗うよりなかった。しかし、彼の躰は、三人の攻撃を防ぐだけがやっとで、それもいつまで続くか判らなかつた。

「オイ、もうそのへんで裸にしまえ」

慎之輔の声がかかると、山科たちは、よつてたかつて木島の服を剥ぎにかかる。抵抗する大の男を裸にするのは、なかなか容易ではないが、上になり下になりして揉みあっていくうちに、やっと上衣の片袖を抜くと、あとは簡単に脱がすことができた。白いスポーツ・シャツは、胸の釦をはずして着ていたから、強くひっぱると残りの釦はとび、袖やみごろはビリビリとひき裂いた。素肌に着けていたスポーツ・シャツを脱ぎ捨てれば、上半身はもう裸になる。

裸を晒すこと自体は、木島のような男にはなんでもない。だが、暴力で脱がされるとなると、意地でも拒まざるをえない。木島はズ

ボンだけは脱られまいと、ベルトにかかる手を必死に払い退けたが、それも時間の問題で、遂にベルトが脱されると、もう観念して、というよりは、馬鹿々々しくなって、暴れるのをやめてしまった。

「立て！」

山科が嗷鳴り、杉田と南に左右の腕をとられて、壁に押しつけられた木島の躰には、銀色のペンダントが残っているだけだった。

慎之輔は、その前に歩みよると、美術品でも観賞するように、

「ふうム。思ったとおりのいい躰だ。ますます気に入ったよ」

と、筋肉質の逞しい裸体に眺め入った。

「親分。これは茶番なのか？ 俺の躰が見たけりゃア、自分で裸になってやったのに、手数のかかることをする人だ」

木島は、ひきしまった腹筋を荒い呼吸で波うたせながら、腹に据えかねたように云う。「ハハハ、確かにおまえさんの云うとおりだ。だが、おなじ裸を見るのでも、このほうが面白いからな」

「俺には判らねえが、そういうモンか。だが、今夜の俺はどうかしてるんだ。こう、うめえぐあいに説明できねえが、手も足も、イ

「ヤ、躰全体が、思うように動かねえんだ。いつもの俺なら、こんな奴らの四人や五人いたって、絶対負けやしねえ。本当なんだ。信じてくれ」

「ハハハ、信じるよ。信じるとも。おまえが、さっきのウイスキーを飲んでいなかったら、こうは易々と裸にされはしまいだろさ」

「ウイスキー？ あ、さては、あの酒にしかけがあったのか！」

「そうだよ。階段で躓いたのもそのせいだったんだ。だが、安心するがいい。麻酔薬をちょっぴりしこんだだけだ。昏睡するまでにはいかねえさ」

麻酔薬と聞いて木島は愕然としたが、そう云われてみれば意識は、ハッキリしている。ただ躰がなんとなく重いだけだ。しかも、ウイスキーは、彼が勝手に飲んだものだった。「しかたがねえ。俺の油断だったんだ。それより、こんな恰好でいつまでいればいいんだ？」

恥かしくはないつもりでも、晒しもののように、ジロジロ裸体を眺めまわされるのは、いい気持のものではない。

「フフ、おまえのような男でも、羞恥心はあ

るとみえるナ」

「恥かしくなんか、ありゃアしねえ。だが、もう、いいかげんに茶番は終わってもいいんだろ」

「木島。おまえ、まだ、これを茶番だと思ってるのか？」

「じゃア、これもテストのうちなのか？」

「テストか。そう、俺はそう云ったんだっけな。うん。テストには違えねえ。つまり、おまえは、実験材料として、ここへ連れてこられたんだ」

「なんだって？ 俺にヤアよくのみこめねえが、それじゃア話が違やアしねえか？」

「いいか。もっとハッキリ云ってやろう。おまえは、金につられて、まんまと欺されやがったのさ」

「欺された？! じゃア、あの話は、みんな嘘なのか？」

顔色を変えた木島は、猛然として、杉田と南をはね退けようとしたが、満身の力をこめても、壁から躰を離すことはできなかった。

「ハハハハ、薬の効いているうちは、いくら暴れようとしても無駄さ。なアに、そのうち薬もきれてくる。そうしたら、ぞんぶんに暴れるんだな」

「畜生オ！」

口惜しさに、木島はギリギリと歯がみをしたが、本当は、まだ、慎之輔の真意をのみこみかねていた。「実験」とは、いったいなんなのか。まさかに、生体解剖とも思われないが、男性の生体が必要とする実験とは、木島の想像力の圏外だった。判らないだけに、不安を感じだしたら際限がない。木島には、司慎之輔が、急に得体の知れぬ人物に見え、恐怖すら覚えてきた。

「頼む。云ってくれ。その実験とはなんなんだ？ 金さえくれれば、なんでもする。俺も男だ。こうなった以上覚悟は決めてるさ。だから、実験とはなにをするのか説明してくれ」

不安と恐怖から逃がれようとするように、木島は喚き続けたが、慎之輔は耳もかさず、冷然として、

「オイ。こいつを、そっちの部屋に入れるんだ」

と、杉田に顎をしゃくった。

(以下次号)

× × ×





## 浣腸レポート

## 家政婦の日記

渡部 かね

×月×日

丸山派出婦会に所属してからこの方、私は  
 準看護婦の免状をもっているのを重宝がられ  
 て、何時も病家へ派遣される。でも、それが  
 私の一つの楽しみを満たせて呉れる場合が多  
 いのだ。そして今日も……

「かねさん、急いで曾我部さんのお宅へ行っ  
 て頂戴。知ってるわね、坂上のタバコ屋の角  
 を曲ったお屋敷」

「はい、高校三年のお嬢様のいらっしゃる  
 ?」

「そうよ、そのお嬢さんの具合が悪くて、折

悪しく女中さんが休暇で田舎へ帰ってるん  
 で、大急ぎだったさ」

会長のママさんに追い出されるようにして  
 やって来た曾我部家。御主人は鉄鋼会社の重  
 役とか、まだどこか幼げすら残る美しい奥様  
 に、この一人娘の良子お嬢様。ごく静かな上  
 流家庭である。

「丸山から参りました。渡部かねと申しま  
 す」

「まあ早いね、よかったわ、女中が休みだ  
 もんだから大変なのよ、良子が学校でお腹が  
 痛くなったって帰って来て今寝かせた所、早

速だけど、田所先生お呼びして来てくれないかしら、そら駅前内科の」

「かしこまりました」

折よく田所博士は在宅、外の往診を後まわしにして駆けつけて呉れる。

「君、容態は聞いて来て呉れたかね」

「はい、あの、伺ったばかりで、よくは分らないのですが、学校で腹痛とか、早退していらした様で……」

「熱はどうなのかな、まあよい、腸カタルか食当り位だろう、そう言えば、あんたは看護婦免状があったね」

「いいえ、準でございますよ」

「看護婦でも立派なもんだ。うちも今日は看護婦が休みでね、丁度いい君に手伝ってもらおう。そのイルリガートル持ってきてくれ給え、どうせ腸を洗ってみにゃいかんだらう」

おお、あのやさしい静かなお嬢様が、花も恥じらう十七才の乙女が、やがて十分の後は田所博士と私の手で浣腸される、どんなに恥ずかしがる事だろう。そんな事とも露知らず、今頃は痛むお腹を押さえていらっしやる事だろうか、想像するだけでも私は胸が高なるのであった。田所博士は私の胸の中などお

構いなく、

「じゃ行こう、この頃は食あたりや食い過ぎが多くてね。どうだ君、わしの所も手薄でかなわんのだが、手伝って呉れんかね。いやあこんな事言ったら、丸山ばあさんにえらく叱られること必定だな、ワハハハハ……」

良子お嬢様は日当りのよい東南むきの書斎のベッドに青白い顔で横たわって居られた。

「どうしました。おいしいあんみつの食べすぎですか。どれ診察しましょう」

型通りの検温、脈搏、眼、咽喉、そして、

「胸をはだけて下さいね」の博士の声に、もう一瞬間を赤らめて私の方にチラと視線を動かす。真白い二つの双丘、まぶしいばかりに輝いて私は思わず視線をそらす。田所博士は平然たるもの、打診聴診とよどみない動作。

「お腹を。パンティを下げて。ハイ、ここ痛みますか、ここは、ではこの辺は」

「ええ、あのう、一寸」もうお嬢様はたえ入るばかり、蚊のなく様にうなずくばかり。

「お通じはありましたか」

「はい、昨日」

「今日は」

「まだですけど」やっと聞きとれる位。

「では浣腸してみましよう」

遂に浣腸の宣告が下った。医師の命は絶対

である。お嬢様はとみれば、一瞬ハッとした様に大きな眼を、どこを見るでもなく見開いたものの、次の瞬間には力なくうなずくと共に、静かに眼を閉じ、真赤な顔を見られるのを恥じるが如く、横をむいてしまわれたのであった。

「渡部君、用意して。お通じが昨日だから、一〇〇〇CC、薬用石鹼三〇グラム、温度は三十七度、いいね」

奥様はただもうおろおろするばかり。私はイルリガートルの準備をしながら、

「奥様、恐れいますが、ビニールの大きな風呂敷と、新聞紙、それから差込便器がありましたら御出し下さいません」

奥様がおろおろしながらビニール、便器をさがしていらっしやる間に、イルリガートルにはなみなみと乳白色の液体が満たされた。

「横をむいて、渡辺君、パンツとってあげて。そう。そんなに固くならないで、一寸膝を曲げてごらんさい。ほらほら、そう固くなっちゃ駄目、駄目、浣腸なんか痛くもかゆくもないじゃないか、一寸の我慢だよ」

といっても、花恥じらう乙女が、医師と看護婦の前とはいえ、他人の眼前にさらす苦痛



は如何ばかりであろう。

「渡部君、その高さじゃ注入量が多すぎる、もう一寸下げて、もう一寸、はいよろしい」

イルリガートルの液面が静かに私の眼前で下ってゆく。へびのような黒いゴム管。お嬢様の真赤な顔が、みるみる苦痛にゆがむ。

「良子さん、あなたは子供の頃からよく私に世話をやかせたねえ、ポンポンが痛いといっちゃ、何度浣腸かけさせたかな。昔は浣腸という大あばれしてね、本当にてこずったよ。ねえ、奥さん」

恥づかしいのを我慢して浣腸の苦しみに耐えているお嬢様に、言わずもがなの思出を、いくら気をまぎらそうとするにしても、話題も外にあるという物、私はおやめなさいとあやうく口にする所であった。

一〇〇〇CCの大量の石鹼液は注入され、歯をくいしばって耐えるお嬢様、全身に力をこめて、今は、あられもない姿の恥づかしさも忘れたかのように、体を硬直させて、私の押さえる脱脂綿に身をまかせるのであった。「五分位我慢して下さい。渡部君、しっかり押さえてあげて」

田所博士の宣告は氷のように冷い。時々ピ

クビクと痙攣するように動くのが押さえる私の手に響くのは懸命に我慢する姿なのであるう。

「うう」かすかな呻きを咽喉の奥にかみ殺すのも、乙女のせめてもの心やりかと思われていじらしい。早く五分がすぎないかと、私はお嬢様に代って念ずるのであった。

「もう便器おあてしてよろしいでしょうか」「もう少しだね」

何と意地の悪い医師であろう。勿論排便効果は長時間我慢した方がよい事は分っているが、お嬢様の身にもなってあげてはと、私は勝手にそつと便器をひきよせるのであった。そつと便器をあてて、新聞紙をかけると、私は室外に出た。それを待ちかねるように、大量の水の下る音、恐らく音を立てまいと努力するにもかかわらず、一気に下るのをどうする事も出来ないお嬢様の苦悩が眼に見えるよううで、思わず私はホッと溜息をつく。博士はとみれば、

「お見事なお庭のお手入れですな。あの石燈籠は一寸見かけぬものですが、何か由緒あるものでも……」

などと奥様に如才なく話しかけ、病人の苦

痛など知らぬ顔なのが憎々しい。私はそつと病室に入り、

「お気分いかがでいらっしゃいますか」

「ええ、ずっと」蚊のなくような顔は毛布の下からであった。手早く後始末をして、検便のため博士を迎える。

「まあ、便秘と、軽い胃カタルといった所ですかな。今日は絶食、明日から軽いもので大した事はありませんまい。あとでお薬差し上げますから、渡部君、すまんが取りに来て呉れ給え。それから、変った事があれば往診致しますが、明後日になってもお通じがなかったら君、イチジク浣腸でいいから、お浣腸差し上げてくれ給え。ではお大事に」

帰ってゆく田所博士を見送りながら、私は今の言葉を反芻していた。

——明後日、明後日、お嬢様よ、お通じがありますように、ないと又私に浣腸されるんですよ——

——明後日、明後日、お嬢様よ、お通じがありませんように、なければ、又私はお嬢様に浣腸して差し上げられる——

私は二つの相反する想念に悩まされ、眼をつぶって首を左右に振ってみるのであった。

## 連載第三次元小説

## 影の国

雪ゆき俊とし遙はるか女にょ体たい鋪しき石いし

芳江と愛子が新町溪谷の吊橋から駿河吊りに吊されて鶯の谷渡りをさせられた数日後。

多与子は馬車に乗せられて、街から街を晒らされながら曳廻しの附加刑で通っていた。本刑は言うまでもなく死刑である。クーデターの直後の不安定な社会では、旧社会で指導的地位に居た者を処刑して、新政権の威力を内外に示す必要があった。それは同時に、処刑された人達を生き永らえさすことによって反革命の中核を温存させる愚から免れるという、一石二鳥の効果があったわけである。

曳廻しは三日間に渡り、新町区のあらゆる道路、小径、路地を通

ることになっていた。馬車が通れない様な細径は、馬車から降りて歩かなければならない。と言っても、その歩くということが多与子達には大変な苦行なのである。

第一に彼女達は首に三貫匁もある大きなコンクリートの円盤枷を嵌められていた。これは曳廻しの始まる前日、工場の間の空地に座らせられ、逃げられない様に背後に杭を打たれて後手に縛りつけられてから、首の周りに木型を嵌められ、鉄筋を通し、早結セメントで練ったコンクリートを流し込んで作ったものである。死ぬまで此の首枷は彼女達の首から取り外す事は出来ない。双方の肩にのしかかる三貫匁のコンクリートの重味は、そのままお仕置場へ曳かれて行く彼女達の運命の重味でもあった。



第二に彼女達の正座している馬車の床板自体が、一板の大きな算盤木になっているのだ。その上に跪き、背後の針金杭に後手に結かれた多与子一家——の女達罪人は、すべて女ばかりだった。男達はクーデターの夜、あっさり銃殺されていた、その方が男達の死に方に相応しい様に、女は公開拷問台の上で苦しみながら死ぬ死に方が最も相応わしいと此の国では信じられていた。本誌の読者で異議のある方々は、どうか影の国の民衆に存分に抗議して頂きたい。——は、太股の上に重さ五貫匁の伊豆石を二枚宛、載せられていた。コンクリートの首枷は旧政府時代。秘かに死刑を宣告された政治犯達の首に嵌められたものだと言われていた。

それらは、すべて森田建材店で調達されているという流言が専らだった。しかし、それは確証のない流言蜚語に過ぎなかった。区民達は細い首に怖ろしく重そうな石の首枷をかけられた女を、多与子達の曳廻しによって始めて白日の下で見たのだった。膝の上の伊豆石も、公私の拷問用として森田建材店が手広く扱っていた物である。森田建材店の伊豆石は新町地区唯一のJISマークの認可を受けていたので、その販売収入だけでも大した物だと噂されていた。いわば伊豆石のもたらす富と権力に庇護されてぬくぬくと育ち、気持良い程充分に脂肪ののった肉と、ふくよかな柔肌とを用意された森田家の女達が、急転直下の伊豆石に身を苛まれながら、街から街を曳廻されている訳だ。

その上、彼女達の乗せられている馬車を曳いているのは馬ではなくて人間馬だった。彼女達は皆車上の罪人の奴隷なのだが、人間馬馬となって此の車を曳いて走る事を最後の御奉公として、奴隷の身分から解放される事になっていた。奴隷はしめて八人であった。同

じ地方紳士でも、芳江の家族が概して質素で実利主義的な性格を反映して、女奴隷なども、マコや輝子の様に何の取柄もない、平凡で安上りな女ばかりを使役していたのに反して、多与子の家族は派手好きで浪漫的な気性に相応ししく、高額を払って、選り抜きの美人ばかりを奴隷にしていた。その折檻の烈しさも、土地の名流家庭の間での評判の種だった。

だから区民達は寧ろ、馬車の上に円盤首枷姿で跪き、算盤木と伊豆石の間で、白く肉づきのよい足をひしやげさせている罪人のお仕置姿より、その車を曳いて走る奴隷達の人間馬ぶりの方に声援を送っていた。奴隷達は四人宛二列に並び、各列共左右の二人宛が一単位となつて、首の後に一本の材木を結びつけられていた。軀を咽喉に縛りつけた革紐は、そのまま長く斜め上後方に延びて、御者の手の中に纏められ、手綱となっていた。

女達は後手錠をかけられ、顔面に大きなゴム製の轡をはめられていた。轡は大きな丸い環の五方にゴムベルトが附いている。左右のこみかめの下にその環を当てがって、五本のベルトを、顚頂部。後頭部。頸裏の一番奥。唇の合わせ目。鼻の頭の少し上に廻し、後頭部でベルトをギュッと締めると、五本のベルトが女達の華やかな顔を強く引緊めてしまうのだ。

女達は皆、森田家の奴隷の制服を着ていた。鳩尾まで胸のあいた純白のスウェーターに、下腹から鼠蹊部までの丈しかない黒のスカートである。スウェーターは胸と二の腕がたっぷりふくらんでいて、胴と下膊部はストレッチジャケットの様に身体を締めつけていた。スカートは腰の線の丸味を申分なく見せて、腹巻の様にピタッと肌にくっついていて、よりすぐった美女の身体を充分、鑑賞出来

る様に、制服の下には一切、肌着類を着用させないのが森田家の習慣だった。

ふっくらとした肉づきのよい太股には、鋼鉄の環がきつく嵌められていた。そこには二本の鎖が嵌めてあり、前の四人の腿鎖は後の四人の腿枷の前に埋り、後の四人の腿鎖は長く延びて馬車の車体に山型金具で留めてあった。一人一人は又左右の腿枷の間に、丸く垂れた短い鎖を渡されていた。一足毎にその鎖が触れ合ってカチャカチャ鳴っていた。後手錠にも鎖が二本附いていた。前の四人のそれはV字型に開いて後の四人の軀に結びつけられ、後の四人のは同じくV字を描いて馬車に繋がれていた。その外、馬車を曳く為どんなに力を入れても上体が前へ傾かない様に、膝頭の上にも鉄環を嵌めて、その後面と五本ベルトの轡の後頭部との間に、細い金色の鎖が吊縄の様にピンと張っていた。

馬車は申分なく舗装の行届いたハイウェイを全速力で走った。薄い腹巻の様にピチッと緊った極短スカートの上から、女達の豊満な臀部にピシピシと革鞭が当てられた。それでも二輦幅のゴムベルトが厳しく口に喰い込んでいたので、どの牝馬も少しもいなくことは出来なかった。ガシッと顔面の白い肉に食入った蜘蛛手の轡の奥で、八つの美しい顔が、目を瞋らせて、苦痛に歪んでいた。

穴だらけの凸凹道にかかるると、馬車は烈しく不規則に揺れた。膝の上の伊豆石がずれたり、一層重くのしかかって来たり、脛の骨が鋭い算盤木の稜に自ら喰い込んで行ったりする痛さで、馬車の上の罪人達は、後手に縛られた胸を反ら、顔をそむけて、一際高い



悲鳴を上げたり、苦しげに唸ったりした。皮は破れ、肉は裂け、骨までが砕けてしまいそうな痛さだった。丸太を並べた様に逞ましい太股がひしゃげて扁平となり、白い足も算盤木の車床も、鮮血で朱



く染まって来た。

それでも狭い路地に来ると、多与子達は馬車から降され、痛む足を曳きずって、泣き泣きその路地を歩かねばならない。歩けなくなれば四つん這いにされ、這えなくなれば、ずるずる引きずられても、曳廻しの義務だけは果させられるのだ。どうせ殺される罪人なので、息も絶え絶えになっても、決められたお仕置を許されることはない。やっとの思いで路地を抜けて広い道へ出ると、先廻りした馬車が罪人の乗車を待っていた。

「ソラ。お客様の御乗車だ。歓迎と感謝の心をこめて、精一杯高いいななけ」

ピシリ。ピシリ。と鞭で叩かれて、予め轡を緩められていた牝馬達は、ヒヒン、ヒヒン、と鳴かされた。再び轡が締められて、豊かな臀部に出発を促す鞭が、ピシリと当てられる。二本足の馬はもういなくなることが出ない。

三日間の曳廻しが漸く終って、処刑の日が来た。母親を先頭に、嫂、嫁いだ姉、多与子、良子の順で、小さな手押車に移され、一人宛石を抱かされたまま、刑場に当てられた新町公園のグラウンドに曳かれて来た。新町公園は新町溪谷の南側の台地一帯を占め、グラウンドは、その西面の中腹を切拓いて作られていた。だから刑場の三方は緩い傾斜の観覧席になっていて、お仕置の工合が誰の目にも、遮るものなく俯瞰出来た。

一方だけでは溪谷沿いの低い道路に面し、階段でそこから昂る様になっていた。処刑を受ける女性達は階段のすぐ下まで手押車で運ばれ、太股の石をどけられて車から下り、階段を一段ずつ上らされた。

階段の上からグラウンド中央の処刑台まで、幅の狭い速成の舗石道が続いていた。白い舗石は凹凸が烈しかった。三日間石を抱いて曳廻されていた多与子は、弱りきって目は霞み、耳の底がゴオゴオと鳴っていた。只、舗石の外へ一歩も出ない様に厳しく注意されたことだけ覚えていた。いつ誰の注意だったかは解らなかったが、違反したら背中を縦に割って、割目に溶解した硫黄を流し込むぞ。という恐ろしい罰則で脅されていたので、ともすれば朦朧とし勝ちな意識を強いて、厳命通りに、すぐ前を行く姉の後から、最初の舗石をぐっと踏んだ。

忽ち足の裏にグニヤリと何か柔かな物が当り、危く倒れそうになると、あわてて、足を踏みしめる。柔かな底に固くて細い物があった。

「ア、痛い。痛い」

足で悲鳴が上った。ビクッとして思わず飛上った。驚いて、目を見開いて足許を見た。多与子が踏んで立っているのは、白くて肉附きのいい二本の足だった。固くて細い感触はその足の骨らしい。舗石は縦二米。横五十糎ばかりの白セメントの板石だった。その一枚一枚に女が一人づつ仰向けて寝てはめ込まれていた。烈しい凹凸は、鼻や乳房や腹部の隆起や、目、口、鳩尾、臍の窪だった。目の霞んでいた多与子はそれとも知らず、足を踏外すまいという一心で、最初の舗石に生きながら嵌込まれた女の向う脛を嫌という程踏みつけてしまったのだ。身体は弱りきっていたが、体格のいい、娘盛りの多与子はまだ重い。その上首には三貫匁の石首枷が嵌込んであったのだ。

女は、行儀よく手足をピンと伸ばして石の中に寝たまま、動かさ

ない顔をしかめて、

「痛いわ。早く、そっと通ってしまつてよ」と多与子をせき立てた。

「まあ、小林さんじゃありませんか」

多与子は当惑して、まだ肉づきのいい、足を踏んで立っていた。

それは姉の旧友で、まだ独身の若い女医、小林幹子だった。彼女も父が頑固な保守黨員だったので捕ったのだろう。

「何を愚図々々してるんだ。早く歩かないか」

樺の枝の皮を剥いた白い筥で、多与子の背中は皮膚が裂ける程強く打ちのめされた。多与子は慌てて前進した。豊かな肉の引緊った幹子の太腿を踏み、ふくらと盛上った腹部を踏み、乳房と乳房の間を踏み、美しい顔を踏んだ。踏まれる度に多与子の素足の下で幹子は、ム、ム、ム、ム、と叫びた。

敷き並べられた人間舗石を次々に踏んで、多与子達は刑場の真中まで曳かれて来た。

そこには女体を埋めた舗石が五枚。一米宛の間隔を置いて並べてあった。罪人達は一人宛。その温かくてふくよかな肉の石の上に跪かされた。

舗石の女の隆起した白い胸と腹の上には、十五糎平方程の厚い板が置かれていた。板の上には、縦横五本ずつ、二十五本の五十釘が刃先を空に向けて出ていた。板の横には、

秋元鉄工場。圖冊。3×2½ No. 5

などという字がマジックインキで書いてある。秋元鉄工場は姉の嫁ぎ先である。そこでは小型齒車を作っていた。出来上った齒車

は、仕上げの前後に、解り易い様に中の穴を釘に通して台の上に積んでおく。それが此の板なのだ。

多与子達は舗石の前で履物を脱がされ、その五寸釘の板に爪先と膝をのせて跪かされた。脱がされた履物は泥のまま舗石の女の顔面に、左右揃えて載せられた。その時、氣附いたのだが、多与子の跪かされた舗石の女は芳江だった。芳江は側の柔和な山猫に似た可愛い顔を紅潮させ、こみかめに青筋を浮上らせて苦痛をこらえていたが、靴底が顔の上五糎位まで近附くと、すっかり観念した表情で素直に眼を閉じた。泥靴がその顔を殆ど覆った。

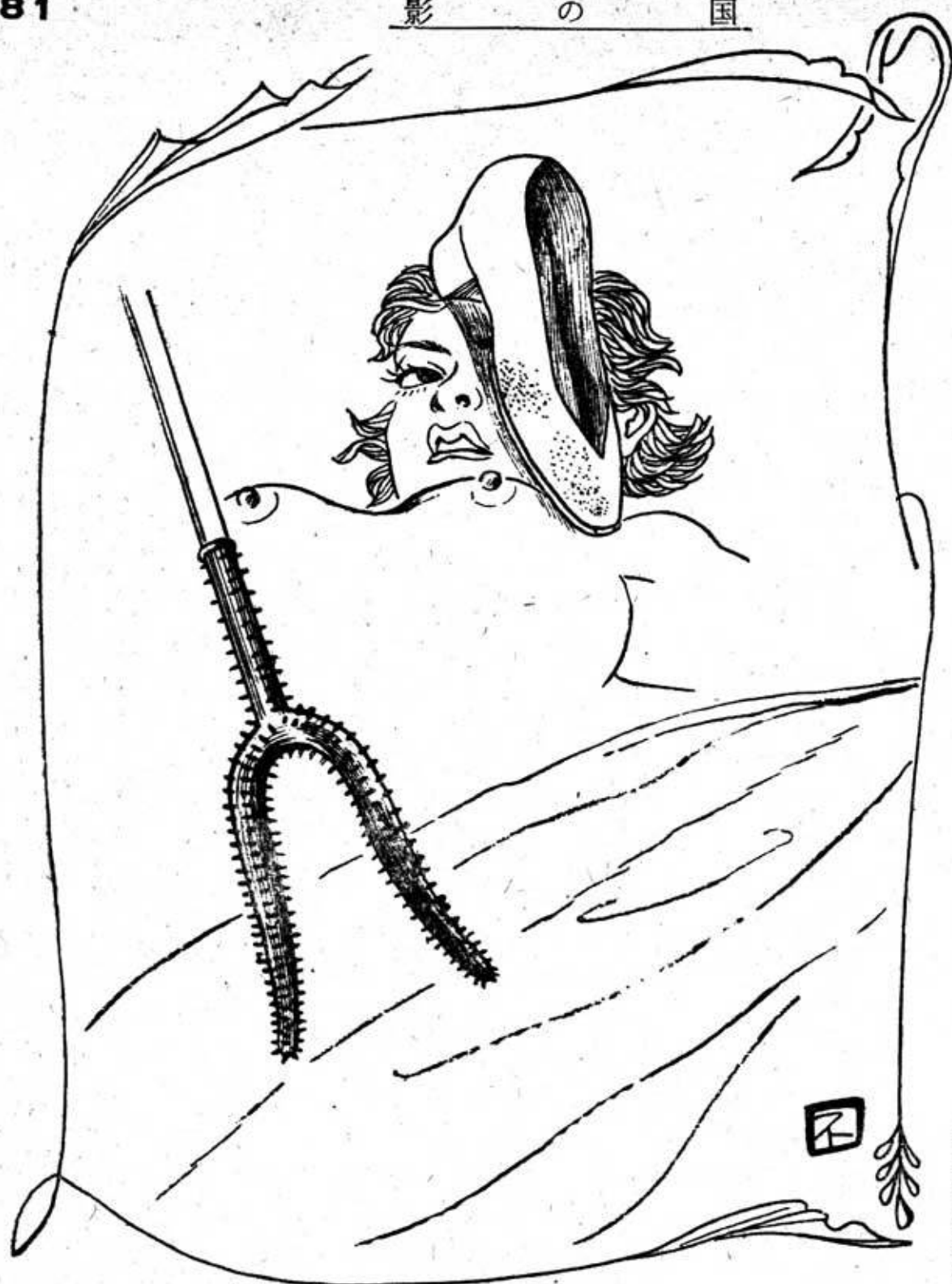
「革命治安委員会は被告森田初子に鋸引による全身細断刑を宣告します。被告の夫は永年に亘って区政を壟断し、区民を苦しめ、多くの無事の人命を奪いました。被告は妻として、此の国の法慣習に従い、夫の罪の一切を公開処刑によって償わなければなりません」

死刑執行委員長の三田央子が、多与子の母の前に進んで宣告文を読上げた。

「そんな抽象的な罪条で死刑だなんて、あんまりです。本当に夫が悪人だったのなら、その罪を具体的に摘発して裁判して下さい。その上でのお仕置ならお受けも致しますが、具体的な裏付けもなしに、多くの人命を奪い、などと言いがかりをつけるのでは筋が通りません。夫の名誉の為に、私には承諾致しかね……」

初子夫人は必死の抗弁の最中に突然悲痛な悲鳴を上げた。二人の刑事が左右から刺のついた鉄の刺又で、夫人の太腿を強く押えつけたのだ。曳廻しの時裸で石を抱いていた罪人達も、今日は着物を着せられていたが、和服と足袋の上から齒車台の五寸釘に足の肉を突き通される酷痛の為、夫人はそれ以上、抗議の言葉が出せなかつた。





た。

三田央子は冷やかにその様子を見下して、

「被告森田初子。今の宣告に異議があったら、即刻申立てなさい。ありませんね」

怖ろしい刺の刺又が一層強く夫人の太腿を責めつけた。

「ウッ。ヒイイッ。イッ、ツウッ。ウウ」

「ない様ですね。では宣告は成長しました」

別の刑事が前に廻って、初子夫人の小鼻をキューッと抓み上げた。

呻き声がかすれた。夫人は思わず口をあけた。するとその口の中に、濡れ汚れた真黒な布がぐいぐい押込まれた。夫人は目を白黒させながら結局、口中一杯、その汚布を頬張った。同じ布がもう一枚四つ折りにされて、夫人の鼻と口を覆い、頬をベルトの様に締めて後頭部で結ばれた。観客の誰も汚布が何であるかを知らなかった。しかし夫人の娘達は皆知っていて、自分がその布で猿轡された様な不快感に戦慄した。それは製瓦機で瓦を作る時、型と製品の間を仕切る晒の布なのだ。布は繊維の絢目にまでモルタルとクレオソードが混合して沁込んでいる。というより油泥をすいて布にした様な代物だ。そんな布を口中一杯詰められて別の一枚でその上から猿轡される気持の悪さ。その猿轡の本当の味を想像することが出来る者は、その布をいつも見て知っている多与子は姉妹だけなのだ。

猿轡を噛まされ終ると、母は帯を解かれ、着物を脱がされた。必死に抵抗したが無駄だった。最後に肌襦袢もむしり取られ、二色の湯文字一枚の姿にされた。後手に縛られた彼女を、ギラギラ光る目なめ廻す市民兵達……人間舗石の腹の上に立つ、三十

女の様に脂ののった白い腕から胸に、鮮やかな紅の扱帯がギリギリと喰い込んでいた。後手に廻された肉付きのいい両腕が荷造りされた様な厳しい縛しめに撓んでいた。油泥の布で猿轡された顔をうなだれて、初子夫人は、そんな恰好にされた自分を、若い娘の様に初しくはじらっていた。

「始めに鋸で両腿を切断します。湯文字は腰まで捲って、落ちない様に腰紐でからげなさい」

央子は冷たく命令した。男の刑事が指示に従って、初子夫人の両足をすっかり露わにした。鮮やかな白と紅の二色の湯文字を、おさんどんの様に腰にからげて縛られながら、夫人はうなだれて、言ひ様の無い恐怖にピクとピク身を震わせていた。

「お仕置を執行する前に、被告の夫の偉大さを讀える勲章を身体に附けてやりなさい。その勲章と身体とを今日の参観者全部によく見て頂く為に、被告はその姿のまま場内を一周するのです」

憤怒と恐怖に震える夫人の顔がのけぞり起された。刑事の一人がその鼻腔に胸まで届く長い鼻鎖をはめ込んだ。次に乳首と乳首の間に鎖が渡された。鎖は二本共金モールの様で、ピカピカ光った立派な金鎖だ。鎖は先端が細くて鋭い鉤になっていて、丁度イヤリングの留金と同じで、竜頭を廻すと、鼻中隔と乳首とに針の丸鉤がキツカリ肉を刺して乳い込む様になっていた。乳首に鉤が突き刺さると、夫人はなまめかしく呻いて、全身を戦慄させた。

年は四十代の半ばを過ぎていたが、夫人は近年ゴルフに凝っていて、衣服をぬがされてみると、ガッシリした骨骼と、よく脂肪ののった豊かな肉付きは、若々しい印象だった。白い肌はスポーツ・ウ

ィマンらしく健康美に張り切っており、胸の双丘も美事な稜線を描いていた。その乳房の頂上から頂上へ金モールの鎖を垂らした夫人の姿には、中年女の惨めさはなく、まさに新町区のトップ・レディに相応しい威厳と気品さえあった。

鼻鎖の先には、魚鉤の浮子に似た形をした金の分銅が、ぶらぶら下っていた。

余りにも侮辱的な勲章を肌にじかに附けられて、夫人は口惜しさや侮辱に赧らめた白い顔を歪めていた。背の高い男が髪を荒縄で括って一本吊りに吊上げ、愛用のクラブの先に結びつけて、折角のトップ・レディの責顔を伏せられない様にした。クラブの他端を男に持たれ、別のクラブで腰を突かれ、叩かれながら、夫人は顔と胸の勲章を見せびらかして刑場を一周させられた。

その間に刑場の真中では処刑台が用意された。それは何の変哲もない鉄の台だったが、足部の方に罪人の足を載せるペダルと、それから鉄の腕木で連結している自動丸鋸が二本、横についていること、それに顔面のあたりに細いビニール・パイプが二本出ていることだけが一寸変わっていた。満場の観客が好奇の目を光らせて見守る中で、ペダル上に五寸釘の歯車台が取り付けられ、拷問台の中のタシにどろどろとした白い液体が満された。

「今の白い液体は鉄工場で使うカッティング・オイルです。ペイントとスピンドル油の混合液を稀釈したものです。さて一体これから何が始まるのでしょうか」

場内アナウンスが拡声器から流れると、客席の間を最後の曳廻しで追われていた初子夫人は、思わず足を停めてギョッとした顔になった。胸の上で、鼻鎖が細かく震えた。金鎖の表面を、震えに応じ



て動く日光の反射がキラキラと眩しく移動して行った。

「コラ。さっさと歩くんのだ」

若い娘の様にこんもりと肉の盛上った美事な太腿に、クラブがパシッ、パシッと当たった。

曳廻しが漸く終ると、夫人は又人間舗石を踏んで、拷刑台の前に立戻った。

夫人の腰には乳鎖と全く同じ要領の臀鎖が垂らされ、台の上で四つん這いにされて四方八方にお辞儀をさせられた。扱帯縄の解かれたすべすべした、背中に、ピシピシと一しきり烈しく鞭を当てられた。最後に今迄の猿轡を取られ、油泥の汚れも真新しく晒し布を口に押込まれて、きつく猿轡をかけ直された。

「これで附加刑は全部終りよ。いよいよ、これから本刑に取掛ります」

新しい猿轡で頬をくぶり上げられた顔を、クラブでしゃくり起され、臀を高く上げた四つん這いの姿勢で、夫人は央子から最後の宣告を受けた。附加刑の終を告げる鞭が背中に当てられ、クラブでしゃくられた罪人の顔が苦しげに硬ばり、歪み、汗を流した。

刑事が夫人を拷刑台の上に仰向けに寝かせた。白光りのする魅力的な両脚を揃えて、台の後側面と丸鋸の間を下に伸ばし、五寸釘のペダルを踏ませた。膝の上から扇型に見える太腿は、台面とその上の丸鋸との間の僅かな空間を満たして寝ていた。ピクリと動いても太腿の肉に鋸の刃がグサリと突き刺さってしまいそうだ。夫人の胸許乳下、上腹部、下腹部に、黒光りのする太い革ベルトが掛けられて、罪人は先ず胴体を固定された。次に両腕が真上に引伸ばされ、手首を細鎖で固く結かれて、チェーンブロックで肩が軽く台から

浮く位に吊上げられた。最後に夫人の上体を固定した台が首筋の下で二つに割れて余分の上半分は台下のレールを滑って、十米も先に行ってしまった、吊上げられた両腕の間から、夫人は首枷の喰い込む咽喉を反りかえらせて、がっくりと首を後に垂した。

鼻鎖は外され、代りにビニール・パイプが一寸近くも鼻の穴の奥深くさし込まれた。

「これで大腿部切断刑の準備は完了しました。娘達を観客席最上段の磔柱に括りつけて、皆様と一緒に母親の処刑を見物させますので、暫くの間、そのままお待ち下さい」

アナウンス嬢の声も、うわずって震えていた。息を詰めて初子夫人が、次々と異様な処刑の姿勢を取らされて行くプロセスを見守っていた観客席から、どよめく様な吐息が洩れた。台上に仰向けに縛られた初子夫人は、豊かな胸を大きく波打たせ、釘のペダルを踏んだ脚をブルブル震わせていた。のけぞった顔は全く血の氣を失い、観念して閉じた瞼が、ヒクヒク、ヒクヒク、とひっきりなしにけいれんしていた。

多与子と良子と嫂の三人は、観客席の階段を上って、一番後の磔柱に縛りつけられた。しかし、姉一人は、その場に残って、前手錠をかけられ、央子の前に引据えられた。姉は純白のピチッとしたスウェーターに薄い空色のGパンをはいていた。央子は右手に鉄線の鞭を提げて立っていた。姉はGパンの前釦を外されて太胸までずり下げられた。跪いてムッチリ重なった太腿が陽光に当たって白く光った。次にはスウェーターの背中のチャックをすっかり開かれ、肩から背中一面をあらわされた。いつでも背肌を鞭が当てられる様に彼女が素膚のままスウェーターを着せられていた。鉋で削った様な新



鮮な若妻のむきだしの背中に鞭が一閃した。

ピシーリッ。

鋭く腿が鳴って、白い背中に薄赤い細線が走った。それが処刑開始のサインだった。

刑吏が棒スイッチを下してモーターに電流を通ずると、子どもの太腿の附根の肌すれすれの所で丸鋸が回転し始めた。

同時にビニール・パイプのバルブが開いて、白いどろどろの液体が、タンクの内圧でパイプを伝わって流れ出し、罪人の鼻の穴に送り込まれて行く。ビニールのパイプなのでその様は透いて見えるのだ。

息詰まる苦しさに罪人は頑丈な汚布の猿轡の顔をのけぞらせ、右に左にくねらせた、猿轡の奥で咽喉がかすかに、だが、いかにも苦しそうに鳴らした。それでも鼻腔を脹れ上らせる程きつく塞いで一寸もはめられているパイプは、簡単には外れない。鼻から注がれたカッティングオイルは咽喉に溢れ、一部は鼻腔の内壁を伝って泌み出て、或は口腔内に流入して、唾液に塗れた猿轡の汚布を一層濡らし、又少量は気管支から肺にまで流れ込んだ。そして大部分は食道から胃に注がれる。オイルは次々と絶間なく鼻腔に注がれ、その勢で罪人の腹と胸を満たして行った。想像を絶する苦しさに、意識は霞み、頭の奥ががんが鳴った。

苦悶の挙句、罪人は全身の内どこでも動かせる部分を動かして、無意識に苦痛に耐えようとする。しかし、両手は吊上げられ、胸と腹はベルトできつく締めつけられているので、自由に動くのは首と足だけだった。だが首はともかく、太腿は一寸でも動かせば忽ち柔く肥った肉が烈しく廻転する丸鋸に触れて、血飛沫が飛んだ。膝に力をこめてペダルを踏めば、もう足袋も脱がされた白い足裏の肉に五寸釘が突き刺さる。もっと悪いことにペダルと丸鋸は腕木で連結しているので、踏めば踏む程、五寸釘の



痛さにも比例して、廻転する丸鋸が太腿に切り込んで来るのだった。

苦しくても咽喉に溢れるオイルの水圧で呻き声一つ立てられない。痛くても猿轡が嚴重で悲鳴も出ない。だから此の酷い刑罰は全くの無言劇だった。夫人は黙々として悶えながら、徐々に大腿部を切断されて行った。娘の様に張りのある皮膚が新鮮で肉附きのいい両足が、みるみる血で染まって行った。

オイルは五分間毎に自動的に流れたり停ったりする様になっていた。だから罪人は水責めに息を詰らされても決定的に氣絶することが出来ず、夢現の様な朦朧とした意識状態で責められ続ける苦しみ永久に続く思いだった。すると激痛の頂点で瞬間的な意識転換が起り、苛まれている筈の夫人の全身に玄妙な悦びが訪れた。拷問台の上に仰向けに縛られて、生きながら地獄の責苦を味わっている筈の夫人が、時々極楽の蓮のうてなの上に伸びと四肢を伸ばしている様な錯覚に襲われた。しかし極楽を夢みながら、夫人は蒼白の顔をひきつらせ、全身を脂汗で濡らせていた。オイルの水圧でどこか内耳の粘膜が破れたのか、夫人の両耳がピューッと烈しくカッティング・オイルを噴き出し始めた。

磔にされたまま多与子に思わず目をとじた。

「コラッ。目をつぶるんじゃない」

ビュシッ、ビュシッ、と烈しく鞭が鳴って太腿や腹部に灼きつく様な痛みが次々と突っ走り、痛みは消えずに疼き続けた。疼きは次々と量を増し、腰のあたり一面がカッカッと燃える様になったが、多与子は呻きながらも頑強に目を閉じていた。喰いしばった歯が唇を嚙切って朱い血がたらたらと流れた。

多与子がもう一度、目をあけた時。鮮血に染った二枚の丸鋸は、台の後横面すれすれの所で空しく空廻りしていた。台上に仰臥した夫人は苦痛に耐えきれず、失心してぐったりとなっていた。のけぞった首も、前方に頸を精一杯突き出したまま動かなかった。

切断された両足はアルコールで綺麗に洗われ、小さな二本の十字架に釘付けされて刑場に晒された、逞ましい太腿と膝と足首とに五寸釘を打込まれました足は、心持血の氣を失ってはいたが、生きた足と殆ど変らない美しさだった。

両足を失った罪人は電気衝撃で蘇生させられた。氣附薬を飲まされ、鼻にはめられていたパイプは外され、ベルトは緩められた。附根から切断された太腿部創口は止血され、苦痛を忘れる様に局部麻醉を施された。太い注射が一本宛ブスリ、ブスリと切断面に打込まれ、引っくりかえされて腰椎の上には特に太いのを注射された。

それで罪人は苦痛を忘れた。しかし、それは新たな刑の苦痛を全く新しく味わせる為の準備に過ぎなかった。

今度は両腕の切断である。太腿が下を切取られた身体が、腕を水平に押ばして吊られ、宙に十字架を描いてぶら下る。ムッチリした二の腕の附根に、鉄柱で支えたカッターが取付けられた。カッターの刃はステンレスの薄片を菊花型に丸く組合わせ、中が丸く空いていた。腋窩から肩の軀肉まで、二の腕の一番根本に、カッターの穴はキッチリとはめられた。食込む薄い刃。その両側の白いふくよかな肉を盛上らせて、それは厳しく夫人の腕の肉を嚙んでいた。十字架吊りの夫人は腕をカッターに喰い千切られる表情の変化を、最後まで充分人々に見て貰う為に、髪の毛を縛ってクレーンで吊上げられた。もう下を向くことも、横にそむけることも出来ない。その

顔が硬張って歪み、恐怖におののいていた。

スイッチが入りモーターが又、唸った。カッターの刃は緩り絞られ、腕のくびれが一層細くなった。それにつれられて両側の肉の盛り上がりが一層際立ち、夫人の年に似ぬ豊満さと弾力を証明した。くびれ切った所でピューッと血が噴出して、白い皮膚ははじけてざくろの様に反りかかる。薄赤い肉の中にカッターは徐々に入って行く。今度は猿轡を外されたままなので、カッターに皮を切られ、肉を切られ、血管を切られ、神経を切られ、骨を切られ、髄を切られる度に、夫人はその苦痛の変化に応じて、痛々しい七色の悲鳴をあげた。

手も足も附根から切断された夫人の身体は、もう一度、拷問台の上に仰臥させられ、腹と胸とを二本のベルトで括られた。もう虫の息の罪人に、それ以上の拷問は不要だった。石首枷のすぐ下で白い咽喉に金鋸を当てられて、今度は人力で引き切られた。

次の罪人は嫂であった。彼女の夫は森田家の若主人として勢力を誇っていたので、彼女も姑に負けぬ程憎まれていた。だから彼女の受けた切断刑も苛酷と極めていた。先ず普通の糸鋸で両手両足の指を全部切断された。それから首を荒縄で縛って曳きずり廻され、柱を背負って立ったまま縛られて、大きな木鋏で両方の乳房を切られた。切られた乳房は乳首を細い銅線で括って、義母の梟首台の両端に吊下げられた。最後に丈の長い拷問台の上に両手をピンと頭上に伸して縛りつけられた。手首、肘、胴のくびれ目、太腿の附根、膝下、足首に大小のカッターをはめられた。拷問を出来るだけ長びかせ、処刑の苦痛を充分味わせる為に、カッターの刃は金属ではなく、竹製でしかも丸刃だった。

モーターの唸りと共に、全身十カ所に取付けられたカッターがじわじわと締め始めた。しかし竹のカッターは氣前よくすっぱりと柔肉を切断しないので、罪人の苦しみ方は非常に長々と続けられた。

次は姉の番である。彼女は白いスウェーターもGパンも脱がされてパンツ一つの姿で後手吊に吊上げられた。逆手に捻上げた腕だけしか縄が掛って居ないので、全身の重味と首枷の重味が一切、両腕の附根にかかって、肩の骨がミシミシ言った。姉は顔を歪めて泣きながら、苦しそうに足を絡み合わせ、丸い腰をくねくねとくねらせた。この吊責めの苦悶の興行は、罪人の苦痛の烈しさにも拘らず大変なめしかった。見物人の中から希望者が募られて、長刀で、一人が切りずつ罪人の、結婚してまだ幾らも経たぬ素肌に切りつけることを許された。太腿を切られ、腹部を乏られ、乳房をえぐられ、頬をそがれ、腰を割られ、背肉を裂かれて、吊下げられた白い女体は、次第に赤く染まりながら、いつまでもピクリ、ピクリと動いていた。一寸試し五分試しの刑である。相当の時間を経っても、真紅に彩られた吊人形は、咽喉をぜいぜいと鳴らし、口から血泡を噴き、後手に捻じ上げられた十本の指を、搦ませ、くねらせ、反り返らせて、まだ生きていることを肉体の苦悶で告げていた。後手のまま血塗れた指を鋭角に折曲げて、そのひそやかな蠢めきだけで処刑の惨めさを訴えている罪人の凄愴な姿に西陽が燃えつく様だ。

森田家の長姉を文字通り戮り殺しにしようとして、流石の群集も後味の悪さにひっそり静まって、まだ続行されそうな虐殺刑への不熱意を示し始めた。次に刑場へ曳出された多与子が、身体こそ一人前になっているが、セーラー服の匂う様な初々しい十八才の少女で



あることが、余計、彼等に気まずい思いをさせたらしい。それでも央子はお仕置の続行を命じた。梯子に二本の横棒を取付けて、多与子は手足を精一杯ひろげて磔にされた。そのまま梯子は逆さに立てられた。重い石首枷が頸にのしかかって来て、多与子は呻いて頸を前方に突出した。刑吏が少女の腹部だけをすっかり露出させた。逆磔の苦しきで、白い、ふくよかに盛上った、脂肪層の厚い少女の腹が、大波を打ちながらくねっていた。梯子が短いので、頸を掴まれて顔を水平にうつ向けられると、多与子のすぐ目の先に地面がひろがっていた。涙でうるんだ視界に土粒の一粒一粒がぼやけて映った。逆さにされてすぐ目の前に見る地べたには言い様のない圧迫感があった。そのすぐ鼻先の村面の上で炭火がカンカン熾された。一米もある長い鉄串が四方八方から火の中へ入れられた。串先が赤く灼け始めた。

三田央子が逆磔の少女に近寄った。皮下脂肪が厚くてぶっくりふ

## 鼻虐

略号(はい)

モデル 絹川 文代

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

美貌の絹川さんの鼻を思いきりいじめぬいた写真。火のついた煙草を鼻の穴に挿し込み、或は浣腸器の嘴管で鼻の穴をこじあけたり果ては金属製のクリップで鼻を挟んで悦虐の涙をハラハラと流させるという逸品。

## 鼻責

略号(はき)

モデル 絹川 文代

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

身動きならず縛しめられて逃げもならず顔の中心である鼻をいたぶられるのは誠にサド的である。足の指で鼻を挟まれバンドの猿ぐつわで鼻をこじられ、観念の眼を閉じた髪を驚づかみに愈々鼻の料理にかゝるのだ。

くれている肌を指で押したり、撮んだりして、手応えを試している。

「いいお腹をしてること。肌も綺麗だし、今此処へ真赤に焼けた鉄の串をプスプス突き刺してやるわよ。命のある中に精々此の大きなお腹をゆすぶって、皆さんを喜ばせておあげなさい」

央子はそう言って多与子のお臍の所を、嫌という程力一杯、抓ってひねり廻した。真白なお腹に蒼い痣、紫の痣が点々と増えていった。それでも逆磔の女学生は全身の血が頭に下って、耳の底がガーンと鳴るばかりで、その痛さも余り感じられなかった。只目の充血で時々真暗になる視野に赤熱した鉄串がいつのまにか白く強烈に光り、薪の様にかすかな焰さえ放っているのを認めていた。

「やっぱり洋服は邪魔だわ、お仕置を受ける罪人は裸でなければ罪人らしくないわ」

央子は刑吏に命じて多与子のセーラー服はもとより下着まで小刀で引裂かせた。裂かれた服は火中に投じられた。最後に処刑される妹の良子も既に刑場に曳かれて来ていたが、同様ズロース一枚にされ、次のお仕置を待つ為に、蛙そっくりの姿勢で、多与子の前十米程の所に這いつくばらされた。三田央子が多与子の肌をいじめ廻すのを止めて立上った。串を焼く火の方へ緩り歩み寄って行く。大きな白いがま蛙の様に這わされている良子は、その時、誰かが走って央子を追い抜き、素早く鉄串を一本掴み上げるのを見た。火の粉が烈しく舞上った。逆磔の多与子は既に気を失ってしまったのか、全身が髪の毛一筋程も動かなかった。

(未完)